聖ムハンマドの普遍的教え

Vol.2

イブラーヒム・サルチャム
Prof. Dr. İbrahim SARIÇAM

Tokyo Türk Diyanet Camii Vakfı

聖ムハンマドの
普遍的教え

Vol.2

イブラーヒム・サルチャム
Prof. Dr. İbrahim SARIÇAM

上のカリグラフィはアラビア語でアル・アミーン（信頼すべき人）と書かれています。
預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、預言者になる前からアル・アミーンと呼ばれていました。

聖ムハンマドの普遍的教え

◆——目次

預言者と社会の様々な階層の人々……110

社会の諸問題と預言者……144

布教活動とイスラームの広まり

一　はじめに

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、いついかなるときでも人々をイスラームへと招き、その教えを伝えた。マディーナ時代にはしばしば布教団を各地へ派遣しただけでなく、戦役や遠征のときにあっても、人々をイスラームの教えへと招くことを怠ることはなかった。フダイビーヤ和平条約が結ばれるまで、部族単位あるいは個人的にイスラームへの入信が行われていた。しかしフダイビーヤでの和平成立以降預言者が亡くなるまでの四年間に、イスラームは急速に広まり、大規模な部族のイスラームへの入信が相継いだ。それには預言者のイスラームを教え知らしめる活動が大きな役割を果たしていたことは言うまでもない。その布教活動については預言者のマッカ時代の項目で取り上げた。それについてはさらに彼の人柄についての項目でも取り上げるつもりである。ここでは、預言者が周辺国家の支配者、部族の長や有力者たちをイスラームへと招く書状を送っていたこと、さらにヒジュラ暦九年と十年にマディーナを訪れた代表団がイスラームの広まりに果たした役割を取り上げてみたい。

二　イスラームへの招き

フダイビーヤ和平条約により一時的とはいえ平和が実現され、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はイスラームの布教活動を行う絶好の機会を手にした。フダイビーヤからマディーナに戻ったのち、すなわちヒジュラ暦六年の

最後の月（もしくは七番目の月であるムハッラム月）に、イスラームの普遍的な教えを各地に広めるために周辺国家の支配者たちに六人の使者を遣わし、イスラームへと招く書状を送った。預言者はディフヤ・ビン・ハリーファをビザンチンの皇帝へ、アムル・ビン・ウマイヤ・アッ＝ダムリをエチオピアの皇帝へ、アブドゥッラー・ビン・フザーファ・アッ＝サミーをイランのキスラに、ハーティブ・ビン・アブー・バルターをアレキサンドリアのコプトの総督ムカウキスへ、シュジャブ・ビン・ワフブをガッサーニー族の長の一人ハーリス・ビン・アブー・シャミルへ、サーリド・ビン・アムルをイエメンの支配者ハウザ・ビン・アリーへと派遣した。この他、アラビアの北部や南部にいた王たちや部族の長たち、名の知れた有力者たち、キリスト教徒たち、ユダヤ教徒たち、そしてゾロアスター教徒たちにも書状が送られた。預言者は支配者たちがイスラームを受け入れることによって、その領土内に住む人々が少しでもイスラームに入信することを期待したのである。[1]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はビザンチン皇帝のヘラクレイオスに次のような手紙を送っている。「慈悲深く慈愛あまねくアッラーの御名において。アッラーのしもべであり使徒であるムハンマドから、ビザンチンの皇帝であるヘラクレイオスへ。イスラームへの導きに従う人々に平安あれ。あなたをイスラームへと招きます。イスラームを受け入れ、救いを得てください。アッラーがあなたに二倍の報奨を与えられますように。もしあなたが受け入れなければ、人々の罪をあなたが負うことになるのです。『啓典の民よ、わたしたちとあなたがたとの間の共通のことば（の下）に来なさい。わたしたちはアッラーにだけ仕え、何ものをもかれに列しない。またわたしたちはアッラーを差し置いて、他のものを主として崇ない。それでもし、かれらが背き去るならば、言ってやるがいい。〝[2]わたしたちはムスリムであることを証言する〟』

ヘラクレイオスは預言者の使者と滞在先のエルサレムあるいはフムスで面会した。彼は当時シリアにいたアブー・スフィヤーンとその仲間から預言者のことを聞いていた。ヘラクレイオスはそのことから判断してムハンマドはまちがいなく預言者であるとの結論に達した。だが、人々は自分がキリスト教を放棄することに反対するであろうと考え

イスラームへは入信しなかった。そして使者をよくもてなし、贈り物を授けて預言者のもとへ送り返した。
預言者はアムル・ビン・ウマイヤ・アッ＝ダムリをエチオピアの皇帝ナジャーシーのもとへ派遣した。彼がイスラームを受け入れたこと、預言者からの手紙を保管していたことが伝えられている。ナジャーシーは、ジャーファル・ビン・アブー・ターリブやウンム・ハビーバなどエチオピアに移住していたムスリムたちを船に乗せ、アムル・ビン・ウマイヤと共にマディーナへ帰している。伝承によれば預言者はナジャーシーに二通の書状を送り、その一通でイスラームへと招き、もう一通ではウンム・ハビーバとの結婚を勧めると共に、その地にいるムスリムたちをマディーナへ帰すよう依頼したとされている。
預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はアブドゥッラー・ビン・フザーファ・アッ＝サミーをイランの皇帝のもとへ派遣した。皇帝ホスローⅡ世は書状を受け取るとそれをヒーレの書記官に読ませたところ、その書状には預言者の名前が自らの名前よりも先に書かれていることに立腹し、書状を破棄し使者を追放した。マディーナへ戻った使者からことの子細を聞いた預言者は、イラン皇帝の領土が分裂するようアッラーに祈った。一方で皇帝はイエメンにいる総督のバーザーンに手紙を送り、ムハンマドをすぐに捕え自らのもとに連れてくるようにと命じた。預言者のもとを訪れた二人の使者がイエメンの総督からの書状を差し出すと、預言者は彼らをイスラームに招いた。そして翌日、イラン皇帝が殺害されたという知らせを彼らに伝えた。事実、イラン皇帝は六二八年二月に実の息子シールーヤに殺害されている。こうした出来事ののち、総督バーザーンやその周辺の人々がムスリムとなった。イラン皇帝はイスラームを受け入れなかったものの、バーレーン、アンマン、そしてイエメンといったアラビア半島のイラン領土の統治者たちに送られた手紙はよい結果をもたらすこととなった。これらの地域はイランのくびきを絶ち、イスラーム国家の属州となったのである。[3]
アレキサンドリアの総督ムカウキスは、ハーティブ・ビン・アブー・バルタから自分宛の書状を受け取ると、キリスト教徒のコプト人たちは私の言うことに耳を貸さないだろうし、私は今の地位を離れるわけにはいかないと述べた。

そして返事をしたためた書状と共に、マーリヤとシーリーンという名の女奴隷といくつもの贈り物をマディーナに贈った。預言者はマーリヤを妻とし、彼女との間にイブラーヒームという男の子をもうけている。シーリーンはハッサン・ビン・サービトの妻となった。ハーティブ・ビン・アブー・バルタはあまり待たされることなく総督ムカウキスに面会でき、彼が気前よく自分をもてなしてくれ、そこに五日間滞在したと語っている。[4]

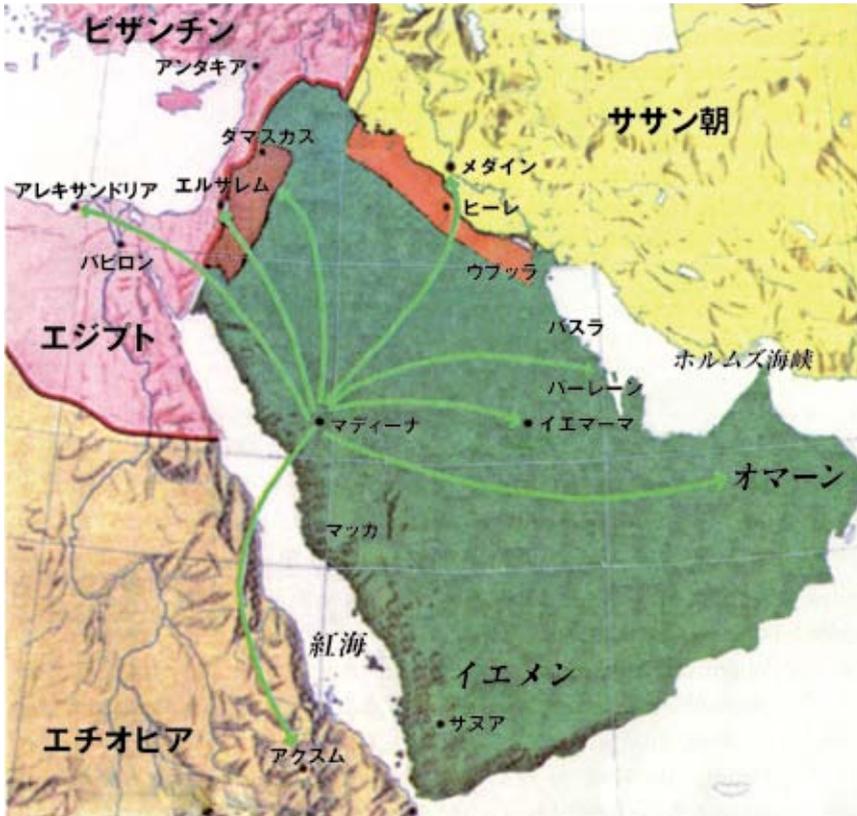
預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はシュジャブ・ビン・ワフブをガッサーンの長であるハーリス・ビン・アブー・シャミルのもとに派遣している。ハーリスは自分をイスラームへと招く手紙が来たことに怒るあまり、それを床に投げつけ、さらにはマディーナに攻撃をしかけると使者に告げた。ハーリスはビザンチンの皇帝にその経緯を知らせ援助をあおいだが、彼から期待した援助を受けることができなかったため攻撃を断念している。使者は贈り物を持たせた上で預言者のもとへ送り返している。[5]

預言者は書状を携えたサーリド・ビン・アムルをハニーファ族の長でありキリスト教徒のハウザ・ビン・アリーのもとへ派遣し、彼をイスラームへと招いている。そしてもしムスリムとなるなら、その地域の統治を継続してまかせてもいいと伝えている。ハウザは使者を歓待し饗応を行ったのち、イスラームを受け入れることはできないという書状を持たせて彼を帰した。[6]マッカ征服ののち死去したハウザの跡を継いだスマーマ・ビン・ウサルはムスリムとなっている。

預言者が書状と共にバスラの総督に派遣したハーリス・ビン・ウマイルは、ガッサーニー族の長の一人シュラフビル・ビン・アムルに、彼らの土地を通過したときに殺害されている。この出来事がムータの戦いの引き金となったことは先に記したとおりである。

預言者はアラー・ビン・アブドゥッラー・アル＝ハドゥラムを使者としてバーレーンに派遣した。アラーはバーレーンの有力者ムンジル・ビン・サーワに預言者の手紙を届けた。その結果ムンジルをはじめ、アラブ人とイラン人からなるバーレーンの多くの人々がイスラームを受け入れた。預言者はバーレーンにいるアラーに書状を送り、自分た

ちの宗教に留まることを望んだユダヤ教徒やゾロアスター教徒たちから人頭税を徴収することを命じると共に、ムスリムが支払うべきザカートの額やザカートと認められる財産の種類を知らせた。アラーは預言者の手紙を人々の前で読み上げ、ザカートを定めた。また預言者はハジャルのゾロアスター教徒たちに送った書状でも、彼らにイスラームを受け入れることを求め、もしそれを受け入れない場合は人頭税を徴収すると告げている。[7] 彼はアラーをバーレーンの知事に任命した。そのとき従来の知事が職を解かれなかったことから、ムスリムとなった人々の統治やザカートの徴収、イスラーム教育といった任務がアラーに委ねられ、ムスリムではない住民の統治は以前からの知事に任されていたことがうかがえる。[8]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あ

預言者のイスラームへの招待の手紙が送られた様々な地域

れ）はアムル・ビン・アスにイスラームへと招く一通の書状を託し、アンマンのジュランダの息子たちジャイファとアブドゥのもとに派遣した。彼らはアズド族の出身であった。ジャイファはその当時アンマンを支配していた。書状の内容は次のようなものであった。「イスラームへの導きの途上にある人々に平安あれ。あなた方二人をイスラームに招待します。イスラームの教えに従い救いを得てください。なぜなら私は、アッラーがすべての人々のために遣わされた使徒であるからです。もしあなた方が二人ともイスラームを受け入れるなら、お二人に力を与えましょう。もし受け入れない場合は、あなた方は支配権を手放すことになるでしょう。私の騎兵たちがあなた方の国に陣地をはり、私は預言者としてあなた方を打ち破るでしょう」

預言者のこの手紙を読んだ二人は、数日考えたのちイスラームを受け入れた。そしてアムルの活動を支援するようになった。アムルは裕福な人々からザカートを徴収し貧しい人々に分配した。預言者が亡くなったとき、アムルはアンマンに留まっていた。[9]

預言者はイエメンの人々に手紙をしたため、ムアズ・ビン・ジャバルとマーリク・ビン・ズラーラをイエメンに派遣した。そしてイエメン各地の様々な人々に手紙が届けられた。手紙はこの二人が任務を与えられて派遣されことを知らせ、ザカートや人頭税を二人に支払うように命じていた。イエメンの人々はマーリク・ビン・ズラーラを預言者のもとへ送り、自分たちがムスリムとなり、二人に従うことを知らせた。預言者は新たに一通の手紙をしたため、マーリクが確かにそのことを自分に伝えたと知らせた。[10] 預言者のこの振舞い、すなわちイエメンの人々がムスリムになったと告げる知らせが自分に届いたことを当のイエメンの人々に書状で知らせたことは、預言者がイスラームを受け入れた人々をよく思いやり、尊び、賞賛していたことを示している。

預言者は使者を派遣するとき、何よりもまずその地を熟知し、以前その地を訪れたことのある人物を使者に選んでいる。たとえば、マッカ出身のアブドゥッラー・ビン・フザーファは何度もイランに行ったことがあり、ペルシア語も多少話せるという理由でササン朝の皇帝へ使者として派遣されている。使者には、説得力、高い徳、誠実さ、優れ

た話術、物事を理解し把握する高い能力が要求された。預言者は手紙を書くに際し、要点を簡潔にまとめ、イスラームへの導きを記し、相手を威嚇したり名誉を損なうような言葉は決して用いなかった。支配者たちには称号で呼びかけ、手紙の内容は彼らの性格に細心の注意を払って決め記した。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は手紙に印を押して送っていた。銀でつくったその印は、「アッラー、使徒、ムハンマド」と三行で彫られていた。つまり、「アッラーの使徒ムハンマド」という意味である。預言者はその印を常に指にはめ、印を押す必要があるときには、それをそばにいる者に与え、用件がすむとまた指に戻していた。[11]

預言者は多神教徒の部族の人々、キリスト教徒や様々な地域に住むユダヤ教徒たちをイスラームへと招き、さらにビザンチン帝国やササン朝からアラビア半島の領土に派遣された知事にもイスラームの教えを記した手紙を送った。この手紙の送付先は広範囲にわたり、遠くイランのフーゼスターン州のゾロアスター教徒たちにまで送られた。それらの書状の数は非常に多く、宛先の個人名や部族名を逐一列挙し、その内容を記し分析することはここでは省きたい。その全体的な内容を示すことで、イスラームを広める上で手紙の果たした役割を明らかにしていきたい。

預言者の送った書状は、相手によりその形式も内容も異なっていたことは注目に値する。部族の長たちに送られた手紙を詳細に見ていくと、それぞれの部族や個々人の特性や状況に注意が払われた上で、ムスリムになれば彼らの土地はそのまま彼らの手元に残されること、財産と生命の安全が保障されること、ダムラ族・グファール族・アスラム族といった一部の部族とは他の部族より強力に相互扶助が行われること、信仰、礼拝、ザカート、アッラーとその使徒への服従といった事柄や、血の報復は禁止されることなどが記されていること、また部族内部や部族間の抗争を防ぐべく配慮された表現が用いられていることがわかる。キリスト教徒やユダヤ教徒といった啓典の民に送られた手紙では、彼らの信仰についてイスラームの見解を示し、イスラームを受け入れることを勧め、それが拒否された場合に適用される事柄、すなわち互いの権利と義務や人頭税について言及している。預言者がヒムヤールの統治者に送った手紙では、彼らがアッラーの導きによってイスラームの教えを受け入れたことを確認し、アッラーとその使徒に従い、

礼拝を行い、ザカートを支払うべきであると伝えている。これに加え、預言者自身やその家族は徴収されたザカートを使用することができないと伝えていることは、注目に値する。

これらの書状の中でイスラームへと招く表現は特に重要である。[12] たとえばハイバルのユダヤ教徒たちには「あなた方をアッラーへ、そしてその預言者へと招いています」、ナジャーシーには「私はあなたを、唯一で並ぶ者のないアッラーへ、そのお方への服従へ、私に従い私に下されたものを信じることへと招きます」、ビザンチンの皇帝には「私はあなたをイスラームへと呼びかけています」、キリスト教徒には「ムスリムになってください、それがかなわなければ人頭税を払ってください」、ハーリス・ビン・アブー・シャミルには「私はあなたを、唯一で並ぶ者のないアッラーへと招いています。それを受け入れるならばあなたの富はあなたに残されます」、ムカウキスには「あなたをアッラーの唯一性を表明することへと招きます」といった各々異なる表現を用いている。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はイスラームを広めるため、国家や部族の長だけでなく、個人にも手紙を送っているが、そのことから預言者が彼らと特別な関係を有していたことがわかる。たとえば預言者はブダイル・ビン・ワルカにイスラームへの入信を促す手紙を送っている。アリーに代筆させたこの書状は後年、彼の家族に誉れをもたらすものとなった。[13]

カダーの小巡礼（前年に果たせなかった償いのための小巡礼）を行おうとムスリムたちがマッカに入ったとき、当時まだムスリムではなかったハーリド・ビン・ワリードの行方がわからなかった。そこで預言者は弟のワリード・ビン・ワリードにハーリドの行方を尋ね、彼をイスラームへと導きたい旨を伝えた。しかし兄を探し出すことのできなかったワリードは、ハーリド宛てに手紙を出して状況を知らせた。手紙を受け取ったハーリドは、預言者が自分のことを気にかけてくれていることをたいへん喜び、イスラームへの関心を強め、後日、彼はムスリムとなったのである。[14]

三　イスラームの勢力拡大における訪問団の重要性

マッカが征服され、クライシュ族とそれに次いで有力な部族であったハワージン族がイスラームを受け入れたこと、さらにヒジュラ暦九年のタブーク遠征の際にアラビア半島の北部がイスラームの影響下に入ったことから、アラビア半島の様々な地域に住む部族がマディーナへと訪問団を送るようになった。部族の代表団がマディーナを訪問することはそれ以前にも見られていたことである。たとえばヒジュラ暦五年、ムザイナ族は自分たちが入信したことを伝えるため預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のもとへ一団を派遣している。ヒジュラ暦九年には多くの訪問団がマディーナを訪れ、それにちなみこの年は「訪問団の年」とも言われている。[15] ヒジュラ暦一〇年にもその来訪は続いた。マディーナに代表団を派遣した主要な部族は以下のとおりである。ムザイナ族、サアド族、バキル族、タミーム族、ヒムヤール族、バリイ族、アブドゥルカユス族、アズド族、バジーラ族、ハスアム族、ハニーファ族、ターイ族、アサド族、タグリブ族、アーミル・ビン・ササア族とその支族、ファザラ族、ムッラ族、ムハーリブ族、キラーブ族、キナーナ族、アシュジャ族、キンダ族、サキーフ族、バーヒラ族、スライム族、シャイバーン族、ハウラーン族、ジュハイナ族、カルブ族、ムラード族、ハムダーン族、ナハア族、ナジュラン族などである。

マディーナで預言者に迎えられた訪問団は、それぞれ様々な意図や要求を持っていた。しかしその多くは、彼らの部族がイスラームを受け入れたことを知らせ、彼らの名においてそれを誓約し、自分たちにイスラームを教えてくれる人の派遣を求めるための訪問であった。中には少数ではあったが、イスラームへの入信に一定の条件をつけたり、現世的な見返りを求めること、イスラームは受け入れないが人頭税を払い預言者の統治下に入ることを表明することなどを目的とした訪問団もあった。キリスト教徒のタグリブ族の訪問団には、キリスト教に留まることができるが、子供たちはキリスト教の習慣に従って洗礼を受けることはできないと確約された。[16]

訪問団との面会はイスラームを広める上で重要な意味を持っていた。なぜなら、訪問団の目的がどのようなもので

あれ、あらゆる機会をとらえてイスラームを人々に伝えたいと思っていた預言者にとって、それはイスラームを広める絶好の機会となったからである。訪問団が個人としてではなくその部族を代表していることも大きな利点であった。
預言者は、マディーナを訪れた代表団が好ましくない態度を見せた場合を除き、寛容で好意的な態度で彼らに接した。彼らを賞賛し、尊び、親切に振舞い、丁重にもてなした。イスラームを受け入れた上で来訪した人々や、自らに誓約を行った人々、あるいはマディーナ来訪後ムスリムとなった人々は、マディーナに一定期間滞在しクルアーンやイスラームの教えの基本を学び、また預言者自身や教友たちのイスラームにのっとった生き方を見る機会が与えられた。預言者は訪問団員の質問に答え、彼らがムスリムとしてなすべき事柄について教えた。彼は預言者モスクの「訪問団の柱」と呼ばれる柱の前で使者たちと面会した。なお現在、その柱には「これが訪問団の柱である」と記されており、いまでもその柱の場所は知ることができる。
マディーナに十日以上滞在する訪問団のために寝食の世話をする家々があった。それはアブドゥルラフマーン・ビン・アウフ、ムギーラ・ビン・シューバ、アブー・アイユーブ・アル＝アンサール、そしていくつかのアンサールなどの家々であった。預言者モスクのスッファやその周囲に張られた天幕も、必要に応じて客間として用いられた。預言者は訪問団がマディーナを離れる際には彼らに様々な贈り物を与えた。またイスラームの命令や規律を記したもの、個人や集団に与えられた権利、契約を記した書類などの他、彼らに割り当てられた土地を明記した文書が与えられた。部族によっては彼らの中から知事が任命された。ムスリムとなった人々にはザカートの、キリスト教徒として留まった人々には人頭税の割り当てが定められた。訪問団の来訪は、アラビア半島のほぼ全土の人々がムハンマドが預言者であり、その支配と勝利を承認することとなった。
訪問団に共通する基本的な事項に続き、それらがイスラームの勢力拡大に果たした役割について述べていきたい。
預言者の乳母ハリーマの属するサアド・ビン・バキル族もマディーナへ代表団を送っている。その団長ディマーム・ビン・サラバはラクダを預言者モスクの前につなぎモスクの中に入った。ディマームは教友たちと腰をおろしていた預言者

に気づくと、彼に対し、ぶしつけな質問をするが、どうか怒らないようにと切り出した。預言者は、自分は決して腹を立てないから、知りたいことは何でも質問するようにと言った。ディマームは「私はあなたの神、あなた以前の神、そしてあなた以降の神の名に誓って尋ねる。アッラーが、あなたを私たちのもとへ使者として遣わされたのか」と尋ねた。預言者は「そのとおり」と答えた。ディマームは同じ誓いを質問ごとに行い、次のように問いかけた。「アッラーにのみ崇拝行為を行い、何者かを配することをせず、私たちの父祖が崇めていた像を放棄せよと、アッラーが命じられたのか」、「日に五回の礼拝を行うようアッラーが命じられたのか」預言者は彼の問いかけごとに「そのとおり」と答えた。ディマームはザカート、断食、巡礼、その他イスラームの定めている事柄を一つ一つ挙げ、その後シャハーダ（信仰告白）を唱えムスリムとなった。そして「私はアッラーによってもたらされたものすべてを信じる。そしてそれらを滞りなくすべて実践する。私はわが一族の代表として送られてきた。部族のもとに戻ったのちには人々にもここで聞いたことを伝えよう」と宣言し、郷土へと戻っていった。預言者はその様子を背後から見つめながら、「もし彼が約束を守るなら、彼は救いを得るだろう」と語った。ディマームは彼の帰りを待ちわびていた部族の人々のもとに戻ると、彼らが崇めていた偶像を非難することから話を始めた。部族の人々は、偶像を非難したことにより彼の身の上に何か悪いことが起きるだろうと警告したが、彼は気に留めなかった。ディマームが預言者と交わした言葉を逐一説明すると、当初イスラームへの入信をためらっていた人々もその日のうちにムスリムとなったのである。彼らは崇拝していた偶像をすぐに破壊し、礼拝所を設け、礼拝を行うためにアザーン（礼拝への呼びかけ）を唱えた。[17]

　ここで取り上げた一連の出来事で使者の質問の内容を詳しく見ていくなら、ディマームが以前からイスラームについて一定の知識を持っていたことがわかる。かつて預言者はイスラームを布教する使者を各部族に派遣しているが、ディマームはそうした使者からイスラームについて教わっていた。[18] 彼は直接預言者にその知識が正しいものであるかどうか確かめるために、マディーナまで足を運んだのである。預言者がディマームと会談した結果得られた成功はたいへん重要なものである。預言者は、彼が自由に振舞い望むまま質問することを許し、それによって彼が思うところ

を率直に述べる機会をつくった。ディマームはすぐに、預言者が明快な言葉を話し、正しい教えを伝える、信頼の置ける人間であることを理解した。預言者の訪問団に対する振舞いや、彼らの質問への説得力のある明快な返答は、彼らに多大な影響を及ぼした。すなわち彼らは故郷に戻ると、自分たちの部族の人々に古い信仰を放棄させると共に、崇拝していた偶像を破壊させ、イスラームを受け入れさせたのである。そしてモスクを建設し、アザーンを唱えた。ディマームのようにマディーナで入信したのち故郷に戻り、その部族の人々をイスラームに改宗させる活動を始めた訪問者は少なくなかった。

訪問団にはマディーナ滞在中、クルアーン、スンナ、そしてイスラームの基本的な信条が教えられた。預言者はアサド族の代表団であったハドゥラミー・ビン・アーミルに自らクルアーンの一つの章を教えている。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はそれぞれの部族がおかれている個別の状況に注意を払い、彼らの要求が妥当なものであればそれを受け入れた。たとえば預言者がアサド族をイスラームへと導いたときには、彼らの財産から支払われるザカートはアサド族の貧しい人々へと与えられること、そして飢饉の際には他の土地に移り住めることを条件に、彼らは誓約を行いムスリムとなっている。[19]

預言者は部族が以前から持っていた誤った信仰やそれにまつわる悪しき行為を取り除くことに努めた。アサド族の訪問団は、鳥を嫌悪したり、鳥の名前や色、その様子から何らかの意味を読み取ろうとすること、石にしるしをつけて手のひらの中で転がしそれを意味づけること、予言を行うことなどについて預言者にその是非を問うたところ、そのすべてが禁じられた。[20] 彼らはウズラ族の代表団には予言を行う女性が一人含まれており、何かことが起きるとその裁きを彼女に委ねていると明かした。自分たちで決定を下すことができない問題が出てきたときは、それについて彼女の意見を求めた。預言者は彼らに、何事であれ彼女に相談を持ちかけてはいけないと命じた。また彼らが偶像の名において屠っている動物の肉を食べることも禁じた。[21] キンダ族の代表団はバターの中に種を一つ隠し、預言者にそこに何が隠されているかと尋ねた。預言者は「アッラーに讃えあれ。それは予言者のなすことであり、予言を行うこと

を好む者は火の中にあるのだ」[22]と語っている。次に挙げる出来事も、預言者がイスラームに反する誤った考え方や習慣を取り除くために行った一例である。

預言者ドは、イスラーム以前の時代に動物の心臓を食べることを禁じていたジューフィ族の代表者たちに焼いた心臓を振舞った。肉を食べようとそれを手に取った代表者の一人サラマ・ビン・ヤージドの手は、おそらく緊張とそれまで禁止されていたものを食べることへの恐れから震えていた。預言者が「それを食べなさい」と言って彼を勇気づけたところ、彼はそれを食べたのである。[23]

預言者は部族間の勢力の均衡を守り、他の部族の領土に侵出することによって起きる争いを防ぐこと、そして各部族が相互の権利を尊重することを求めた。そのため、ある部族の者が許可なく他の部族の土地に入ることを禁じたこともあった。実際、アサド族の水源や土地にターイ族の者が許可なく立ち入ることを禁じる命令書を出している。[24]この文書は、その命令に伴いクダーイー・ビン・アーミルが彼らのもとに派遣されたことを告げる一文を含んでいる。預言者のそうした行為は、彼がどの部族にどのような問題があるかを熟知していたことを示すものである。預言者は布教活動の成否は、その対象となる人々の文化的・心理的構造を認識した上で行うか否かにかかっていることを、よく知っていたのである。

こうした訪問団とのやりとりから、預言者は部族間の問題はもちろんのこと、部族間の結びつきや戦争をはじめとする部族の歴史についてよく知っていたことがわかる。ムラード族の代表者ファルワ・ビン・ムサイクは部族の名においてマディーナを訪れ、預言者に誓いを行った。そのとき預言者は、イスラームの誕生直前にムラード族とハムダーン族との間で起き、ムラード族に大きな損失を伴う敗北をもたらしたラズムの戦いについて、ファルワと語っている。預言者はファルワに「ラズムの戦いであなた方の部族に起こったことはあなたにも影響を及ぼしましたか」と尋ねた。ファルワは、「ラズムの戦いで我が部族に起こったようなことが他の部族に起こったとして、彼らが悲しまないなどということがありえましょうか」と答えた。預言者は「しかしこのことは、あなたの民がイスラームに入信する上で意

味のあることでした」と評価した。[25] この会話は、預言者がイスラーム以前の部族間の衝突を、イスラームの発展の観点から意義あるものと見なしていたことも示している。

イスラーム以前の時代にウムヤーニスという名の偶像を崇拝していたハウラーン族は、集団でムスリムとなったのちに十二人からなる代表団をマディーナへ送り、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）に自分たちがイスラームへ入信したことを報告し、イスラームについて教えてほしいと要請した。預言者は彼らに偶像はどうなったのかを尋ねた。それに対しハウラーン族の人々は、偶像崇拝を続けている者は二人の老人しか残っていないこと、残った偶像は壊す予定であると答えた。ここからも、預言者がどの部族がどの偶像を崇拝しているかを熟知していたことがよくわかる。

訪問団がマディーナから離れる際に与えられた命令を記した文書からは、預言者が思慮深く振舞っていたこと、友好によってもたらされるよい結果を優先させていたこと、衝突の原因となるような無用な活動から代表団を遠ざけていたこと、そして必要とあればそれ以前の決定を覆すこともあったことが理解される。ムラード族の長ファルワ・ビン・ムサイクは、すでに入信した部族の人々と共にイスラームをまだ受け入れていない人々と戦う許しを預言者から得た上でマディーナを去った。預言者はその後使いを送りファルワを呼び戻し、彼に部族の人々をイスラームへと導き、ムスリムとなった人々についてはその入信を承認してよいが、預言者自身から改めて命令書が送られるまでは入信していない人々に対し一切攻撃を仕掛けないようにと命じている。[26]

預言者はハウラーン族に対してと同様に、他の部族の代表者たちにもイスラームの基本的信条やハラール（勧められていること）、ハラーム（禁じられていること）について説いた。[27] 一部の部族には、イスラームの基本を書き記したものを与えた。預言者は道徳的な事柄にも重きを置いていた。たとえばターイ族の代表者たちには、約束を守ること、信託物を責任を持って預かること、良い隣人関係を築くこと、決して人に危害を加えないことなどを命じている。特に迫害することの罪悪について強調し、「迫害は最後の審判の日の闇である」と語った。[28]

アディー・ビン・ハーティム族が暮らしていた地域では、狩猟は重要な収入源であった。そのため彼らの代表団には、

イスラームの狩猟についての見解が詳細に教えられた。[29]

偶像崇拝を取り除き、唯一神への信仰を定着させるため、訪問団には何よりもまずイスラームのタウヒード（唯一神信仰）が教えられた。そしていくつかの代表団にはタウヒードとまったく相容れない偶像を破壊する特別な任務が与えられた。サキーフ族はかつて崇拝していたラート像を破壊することを望んだが、彼らは恐れるあまりその像に近づくことさえできなかった。預言者は、自分たちに代わって偶像を破壊してほしいとの彼らの要求を受け入れた。それによって偶像を破壊するという当初からの目的を果たすことができたからである。預言者はイスラーム以前の時代からサキーフ族と友好関係にあった二人、ムギーラ・ビン・シューバとアブー・スフィヤーン・ビン・ハルブにその偶像の破壊を命じた。ウスマーン・ビン・アブー・アル＝アサは壊された偶像に代わってその地にモスクを建てることを命じられた。[30]

訪問団に偶像を破壊する任務を与えたことにまつわる例をもう少し示したい。バジーラ族のジャリル・ビン・アブドゥッラーは、訪問団と共にマディーナを訪れムスリムとなり、誓約を行った。預言者はジャリルに、彼らが住む地域のイスラームの状況を尋ねた。ジャリルはイスラームが優位に立ち、その教えが広まりつつあり、モスクではアザーンが唱えられていること、そして部族の人々がそれまで崇拝していた偶像を破壊したと語った。預言者はさらに、タバーラのハスアム族の領土にあり、多くの部族の人々の神殿でありイエメンのカアバとして知られていたズルハラサがどうなっているかを尋ねた。そしてジャリルからその像がまだ残っていることを聞くと、彼に百五十人の人々と共にその偶像を破壊する任務を与えた。[31]ジャリルはその偶像を破壊し、その後ハスアム族の人々も預言者に従うようになったことを報告するためマディーナに一団を派遣した。彼らは預言者に、「私たちはアッラーとその使徒と、彼がもたらしたものを信じました。私たちに一つ文書をしたためてください。私たちはそこに書かれていることに従うでしょう」と訴えた。それに応え、彼らのために次のような文書が記された。「これは、アッラーの使徒ムハンマドから、砂漠で生きるハスアムの人々への契約書である。イスラーム以前の時代の流された血への報復は禁じられた。あなた方のう

ち誰であれ、イスラームを望みつつ、あるいは望まないままに受け入れたのであれば、実り多きとき、あるいは飢饉のとき、それに応じて増減する、雨水や露で湿った柔らかい土壌で作物を育てること、そしてそれを食べることはその人の権利である。流れる水で潤された土地の収穫物の十分の一、そして井戸水で潤された土地の収穫物の二十分の一は徴収される」ハスアム族のために記された文書は、血の報復が禁じられ、農作物から徴収されるザカートの割合が示されている点で重要である。

ジャリル・ビン・アブドゥッラーの例に見られるように、預言者はイエメンの部族の人々をイスラームへ招くに当たって、中央から軍を派遣するのではなく、イスラームを受け入れた部族の長をその地元や近隣の部族へと派遣したのである。このことは、預言者が人の心の機微に通じそれに配慮していることを示すものである。[32]同じように、アズド族から十二人の訪問団がマディーナを訪れたときムスリムとなったスラドゥ・ビン・アブドゥッラーに、イスラームに入信したアズド族の人々と共に、アズド族の居住地の近辺に住むイエメンの偶像崇拝者たちをイスラームへと導くために尽力するよう命じた。スラドゥは隣人のジュラシュ族をイスラームへと導く活動を始めた。彼らがその働きかけを拒否したため、スラドゥは町を包囲し長期間に及んだ戦いの末に勝利を収めた。その後ジュラシュ族の代表団も預言者のもとを訪れイスラームに入信した。預言者は彼らを次のような言葉で讃えた。「ようこそ、最も美しい容貌を備え、最も心地よい言葉を持ち、信託を最善の形で守る人々よ。あなた方は私の仲間であり、私はあなた方の仲間なのです」預言者は彼らに周辺に木の多い家畜の放牧に適した土地を与えた。[33]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は来訪する代表団に様々な任務を与えている。次に述べる例は、のちの時代、来訪者たちをもてなす場合、ある地域の収穫物の十分の一のザカートを免除するということを思い出させるものである。イエメンから預言者のもとを訪れた代表団の中でバールク族の代表者たちはムスリムになった。それに応え預言者は次のような文書を用意させた。「これはアッラーの使徒ムハンマドのアズド族への契約書である。バールク族の果樹は切り倒されない。彼らが望まない限り、その土地のオアシスで家畜たちが草を食むこともない。彼らも、飢

饉のとき、もしくは戦いの際に彼らのもとに来るムスリムを三日間客としてもてなすこととする。果実が実る時期には、実を枝からもいで持ち去ったりしないことを条件として、地に落ちている果実を食べることができる」[34]

預言者は訪問団に対しイスラームが禁じていることについては決して譲歩しなかった。サキーフ族を代表して預言者と話をしたアブドゥヤーリ・ビン・アムルは、自分の部族の人々は姦通や飲酒、高利貸しといった悪い習慣を放棄することができないだろうと訴えた。しかし預言者はその条件を決して受け入れず、それらを禁じるクルアーンの章句を一つ一つ唱えた。[35] サキーフ族の代表団はラートという名の偶像を三年間崇拝する許可を求めた。しかし預言者は決してそれを許可しなかった。結果としてサキーフ族の代表者たちはムスリムとなり、預言者がサキーフ族の人々に宛てた書簡を携えて地元に帰った。ただし彼らは、入信した事実や預言者から受けた指示について一定期間人々に明かさなかった。そして適切な時期が来るとイスラームを説き始め、人々の入信を実現させたのである。[36]

もし代表団の地元でイスラームが禁じているものが生産されていれば、預言者はそれについてのイスラームの見解を彼らに告げた。ジャイシャーンの代表団がマディーナを訪れたとき、彼らはイエメンでつくっている酒についてイスラームの見解を求めた。彼らは大麦からつくった酒の名を挙げたところ、預言者はその酒が彼らを酩酊状態にするかどうかを尋ねた。彼らは「たくさん飲めば酔ってしまいます」と答えた。預言者は「多量に飲めば人を酔わせるものは、たとえ少量であってもそれはハラーム（禁止されていること）である」と告げた。また労働者に飲ませるためにワインを用意していた人物について尋ねられたときには、「人を酩酊状態にするものはすべてハラームである」と答えている。[37] ブドウと酒を所有していたフィールーズ・アッ＝ダイラミーは、ワインがハラームならばそのブドウで何をつくればよいのかと尋ねたところ、預言者は「乾燥させて干しブドウをつくりなさい」と答えている。[38]

訪問団のメンバーの中に家族に関するイスラームの規範に反する古い風習が見られたときはそれを直させた。イスラームに改宗する以前、二人の姉妹と婚姻関係にあったフィールーズ・アッ＝ダイラミーはそのいずれかと離縁するように命じられ、それに従っている。[39]

預言者は機会あるごとに、社会のあらゆる階層の人々に公正に振舞い人々を尊重しなければならないと訪問団に強調した。ヒジュラ暦九年、当時まだ少年であったアムル・ビン・アフタムは八、九十人の規模のタミン族の代表団と共にマディーナを訪問した。訪問団の人々は彼に荷物の番をさせた。預言者は彼らに贈り物をした後、まだ贈り物を受け取っていない人がいるかどうかを尋ねた。人々は荷物番の子供が一人いると告げた。預言者が彼を連れてくるようにと言うと、カユス・ビン・アーシムという団員が、その子供は純潔とはいえない生まれの子であると述べた。預言者は「それは一向にかまわない。彼も代表団として来たのだから贈り物を受け取る権利がある」と答えた。そして少年を呼び寄せ贈り物を受け取らせた。[40] 同様の出来事がトゥジーブ族との間にも起きている。預言者は人々に贈り物をした後で、馬のそばに一人の若者が残されていることを知り、彼をその場に呼び寄せ贈り物を与えた。[41]

預言者がイスラームに改宗した部族に知事やザカートの徴税官、そしてイスラームを教える要員を派遣したことについては、関連する章ですでに言及しているのでここでは繰り返さない。イスラームが広まり定着していく上で、教育はきわめて重要な役割を果たした。そのことに関しては、教育活動について述べている章を参考にしてもらいたい。

預言者の模範的人格

一　人々をアッラーに招く人

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はクルアーンでは「（人びとを）アッラーに招く者」[42]と表現されている。彼に与えられた任務は、「警告を与えなさい」「招きなさい」「教えを広めなさい」「注意しなさい」といった神からの命令によって示されている。預言者には人々に警告し、そして吉報を伝えるという任務が与えられたのである。したがって、その存在は警告を与える者、吉報を伝える者と定義づけられている。[43]全人類に吉報をもたらし、警告を与える者として遣わされたこと、すなわち預言者とは普遍的な存在であることがクルアーンで明らかにされている。[44]

預言者はその活動を最も近しい人々から始め、のちに全アラビア半島、さらにはアラビア半島の外の世界へと活動を広げていった。預言者としての任務を果たす活動をたゆまず続け、そして大きな成功を手にしたのである。預言者が用いた布教の方法は論理的・組織的・現実的ということで一貫しており、それがイスラームの布教を成功へと導く要素となった。そうした方法でまず自分の周囲に信仰を持った人々の集団を形成し、その後、自らが始めた布教活動を他国でも展開できるような大きな共同体をつくり上げたのである。預言者自身もまた、アッラーの使者として周辺国家の元首にイスラームへと招く書状を送った。そのような活動によって、その後の世紀にイスラームが急速に拡大していくことになる普遍的な布教活動を始動させたのである。

預言者の活動が成功したことには様々な要因がある。第一に挙げられるのは、預言者自身がイスラームの教えを心から信じ、それを自らの生活で実践していったことである。実際、預言者はイスラームが人々に課した義務のどれ一

つとして自分を例外とすることはなかった。義務は率先して自らが実践し、禁止命令にもまず自分が従った。そして最も近しい人々にそうするように注意を促した。

預言者の活動が成功したもう一つの要因は、失望したり悲観したりすることなく、忍耐や強い意志、信仰と強い決意を持って活動を続けたことにある。預言者は布教活動において社会的な関わりを絶やすことなく保ち、それを最大限に生かした。たとえば、ムスリムはもちろんのこと、まだ入信していない親戚や周囲の人々とのつながりを固く保持していた。社会への影響を考慮して、部族の長たちと特別な関係を築いた。布教を行うための集会を開き、市場や定期市、家など人々が集まる場所でイスラームの教えを伝える活動を行った。イスラームへの招きを行う際には、その相手を誰一人として軽視することはなかった。[45]

預言者は布教の対象とする人々をよく把握することに努めた。彼らの感情や望み、そして個人としての特性に注意を払い、尊敬し、よい関係を築き、親密さを増すように努力した。布教は、その対象となる人々とわかりあえる共通点を見出すことから始めた。その活動の中で預言者は、相手に対し許しや寛容、柔軟さ、いたわり、慈悲の精神を持って臨み、怒りや憎しみの感情を排し、抑圧的な態度をとらないように心がけた。クルアーンは、預言者が神の慈悲のおかげで人々に優しく振舞っていることを明らかにしている。もし横暴でかたくなな心を持っていたとすれば、人々は預言者から去っていったであろうとも述べている。[46]

預言者は人の過ちについて当人に直接問い質すことはせず、個人の名前を出さずにそれとなくいさめた。なぜなら、直接当人に過ちを指摘することは、その人にばつの悪い思いをさせ、彼が共同体から離れていく原因となるからである。預言者の働きかけに人々がいかに反応しようとも、強い意志と希望を持ってイスラームの教えへと招き続けた。特にマッカ時代には、イスラームへの招きを受け入れない人々は、時に横暴に、時にはいんぎんに、時にはあいまいな態度で否定的な返事をした。しかし預言者は、強い決意を持ち、失望することなく、イスラームを広めようと努力を続けた。あらゆる機会にイスラームの教えへの招きを繰り返したのである。

預言者は誰に対しても決してイスラームへの入信を強制することはなかった。なぜなら預言者の任務は、人々を無理やり入信させることではなく、イスラームを知らしめ、警告を行うことにあったからである。人を強制的に改宗させることは、悪しき結果を生むことにつながる。つまり、それはイスラームが厳しく対立し拒んでいる偽信徒を増加させることになり、裏表のある人間が増えることを意味した。イスラームは誠実に心から信仰することを第一義としているのである。預言者はよりよい説得を通じて人々をイスラームへと招くことを布教活動の原則とした。この原則に従って行動した預言者は、ユダヤ教徒、キリスト教徒、あるいは他の宗教を信仰する人々を強制的にイスラームへと改宗させることはなかった。逆に、強制することなく彼らをイスラームへと招いたのである。もし人々がイスラームを受け入れない場合は、一定の条件のもとで彼ら自身の宗教や良心の自由を保障した。クルアーンには、信仰において強制があってはならないこと、さらに預言者が布教への責任感から力の及ぶ範囲を超えてまで自らを苦しめるのは適切ではない[47]と記されている。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は布教活動において決して個人的な利益を求めなかった。事実クルアーンでは、預言者が警告と吉報を与えるという任務の対価として何の報奨も求めていないことが明らかにされている。[48]預言者の死後もムスリムたちは、イスラームの布教を継続すべき任務として認識していた。[49]

最後に、アッラーが一人の布教者として預言者が備えることを望まれた性質について述べ、この項を終えたい。預言者はクルアーンの包る者章の「立ち上って警告しなさい。あなたの主を讃えなさい」との呼びかけで、人々をイスラームの教えへと招くことを命じられている。そしてそれに続いて「またあなたの衣を清潔に保ちなさい」[50]と命じられているのは、布教という観点から注目すべきことである。この章句の、清潔に保つことが求められている「衣」が何を意味するのかという点については、行為、心、自我、体、道徳、教え、そして衣服など人間の物質的、精神的両面を包括する幅広い解釈がなされている。「衣」の意味するものが何であれ、衣服や体、あるいは心や道徳の清らかさが、人間関係を結んでいく上で重要であることは明らかである。この呼びかけを受けた時点で預言者はアッラーの使

徒としてイスラームを広く伝えることを命じられ、物質的・精神的清らかさに注意を払うよう指示されたのである。

二　正義の人

この項を始めるに当たって最初に述べておかなければならないのは、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は正義を遂行する勇者であったということである。そして正しい行いをする人々によって形成された集団をつくり出すことが預言者の最大の目的であった。そのため彼は自ら正しい行いの模範となったのである。正しさは彼の生涯に一貫して見られる特長である。預言者の内面と外見、本心と言葉は常に一致していた。言い換えるなら、彼はいつも本質のままの外見であり、外見のままの本質を持っていた。話すことと行うことの間に矛盾が生じることはなかった。正しさの点で人々の模範であると同時に、多くの言葉を費やしてウンマ（イスラーム共同体）を正義へと導こうと努めた。諸文献には、預言者が正しさや正しさの美徳について語った何百もの言葉が存在する。

預言者は自らに正しくあることを求めると同時に、他者にも正しくあるように命じた。預言者には「正しくありなさい。正しさへと導きなさい」[51]という言葉がある。あるとき、「アッラーの使徒よ、イスラームについて私に一つ言葉を与えてください。あなた以外の誰にもそれを尋ねることはないでしょう」と聞いてきた人に対し、預言者は「アッラーを信じた、と言いなさい。それから、正しくありなさい」[52]と答えている。ここで注目すべきことは、正しくあることをアッラーを信じることに続けて示し、正しさとアッラーへの信仰とを一体のものとしていることである。「アッラーの使徒よ、あなたは歳をとられました」と言った人に対し、彼は「クルアーンのフード章と出来事章が私を老い込ませた」[53]と答えている。なぜならフード章では、「それであなたと、またあなたと共に悔悟した者が命じられたように、（正しい道を）堅く守れ」[54]と命じられているからである。この章句やさらに多くの他のクルアーンの言葉を考えるなら、正しく振舞うことは彼とすべてのムスリムへのアッラーからの命令なのである。

正しさを生活で実践していた預言者がそれを推奨したことは、社会に大きな影響を与えた。彼の正しさについては親友も敵対関係にあった人々も、味方も敵も双方の意見が一致している。アブー・スフィヤーンはまだ入信していなかった頃、シリアへの旅の途中でビザンチンの皇帝ヘラクレイオスに、預言者について情報を提供するようにと呼ばれたことがあった。そのとき預言者の特徴を順に述べた中で、預言者の正しさと、正しくあれと人々に命じていることについて触れている。

正しさの逆を意味する裏表のある態度、嘘、欺瞞といった悪い行いは、人々の健全な結びつきを困難にする。預言者は常に人々にそういったことをしないよう強く求めた。[55] そして嘘をつかず、計略や偽証をすることなく幸福な生活を送ることができるという具体例を、自らの生き方によって示した。また、正しさに反するあらゆる行為を悪しきものと見なし、人々に正しく振舞うように命じた。子供に「おいで、これをあげるから」と呼びかけながら何も与えないことですら、人を騙す行為、嘘であると見なし、そのようなことをしないように求めた。次の出来事はそれに関連するよい例である。ある日、預言者がアブドゥッラー・ビン・アムルの家を訪れたとき、母親が彼に何かを与えるという口実を設けて呼んだ。預言者が彼女に子供に何を与えるつもりなのかと尋ねたところ、母親はナツメヤシを与えるつもりであると答えた。預言者は「もしあなたが嘘を言って何も与えなかったとしたら、あなたに一つの嘘が記録されるところだった」[56]と語った。

預言者は正しさは善へ、善は天国へと人を導くこと、一方嘘は悪へ、悪は地獄へと人を導くことを簡潔に説き、嘘をつかないようにと言った。ある質問に対し、ムスリムはたとえ臆病であったり、物惜しみすることがあったとしても、決して嘘をつく人にはなってはいけないと答えている。[57] 諸文献には、正しいことは美徳であり、嘘は悪徳であることについて語った預言者の言葉が何百も見出せる。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は決して背信行為を働かず、背信行為をしないようアッラーに庇護を求めると語っている。[58] 最も無慈悲な敵に対してすらも、背信行為を働かなかった。預言者はマッカ征服の際、見つけ次第

殺害することになっていた敵の一人アブドゥッラー・ビン・アブー・サルフを赦しているが、そのとき教友たちに語った言葉は興味深いものである。この出来事はおうよそ次のようにして起こった。アブドゥッラーはイスラームに入信してマディーナへ移住し、預言者に下された啓示を書き取る係に任命された。しかしのちに棄教し、マッカの多神教徒たちのもとへ帰り、彼らのイスラームへの敵対行動を支援するようになった。マッカ征服のとき、自分が殺害の対象となっていることを知るや乳兄弟のウスマーンに庇護を求めた。そして自らの行為を後悔していると述べ、ウスマーンに自分のために預言者から許しを得るよう依頼した。ウスマーンが彼の助命を願いでた結果、預言者はアブドゥッラーを許し、その誓約を受け入れた。アブドゥッラーがウスマーンと共に預言者のもとから立ち去った後、アブドゥッラーを殺害する機会をうかがっていた一部の教友たちは預言者に、許しを与える前になぜ彼を殺せと指図しなかったのかと尋ねた。預言者はそれに対し[59]「そのように密かに指図を出すことは背信行為であり、そのような行為は預言者にはふさわしくない」と答えている。

　預言者はいついかなるときでも約束を守った。その他の徳と同様、この点においてもウンマのために模範となる生き方を続けた。約束を守ることは信仰心の一部と見なし、約束を破ることは偽信徒のしるしとした。なぜなら約束を破ることは、自分の言葉の信用性を損ない、信仰の根底に存在する正しさに矛盾することだからである。預言者は人と約束したり何かを保証したときにはそれを必ず実行し、契約にも従った。次に説明する出来事は、預言者が契約にどれほど重きを置いていたかをはっきりと示すものである。教友のアブー・バシルはムスリムになったという理由からクライシュ族の多神教徒たちによって投獄された。フダイビーヤ条約後、アブー・バシルは脱走し、マディーナの預言者のもとへと逃れた。多神教徒たちは即座にマディーナに二人の使者を送り、アブー・バシルを自分たちに引き渡すよう要求した。また預言者宛に一通の手紙も書いた。その手紙をウバイ・ビン・カアバに読ませた預言者は、アブー・バシルを呼び、フダイビーヤ条約によって彼をクライシュ族に引き渡さなければならないことを説明した。アブー・バシルは自分を引渡さないようにと訴えた。しかし預言者は「あなたも知っているように私たちは彼らに約束

したのだ。私たちの教えに背信の占める場所はない」と答えている。ただ、多神教徒たちとの盟約に重きを置きつつも、ムスリムたちのことをいつも気づかっていた。預言者はアブー・バシルに、アッラーが彼や彼のような状況にある、他のムスリムたちに何らかの道を見出してくださるであろうと語っている。[60]

フダイビーヤ条約にまつわるもう一つの出来事も、このテーマにふさわしい例である。クライシュ族の代表団の長であったスハイル・ビン・アムルの息子アブー・ジャンダルは、ムスリムであることから牢に入れられていたがフダイビーヤ条約に署名がなされたのち脱走し、足に付けられた鎖を引きずったままムスリムたちに庇護を求めた。預言者はクライシュ族との間に結んだ条約の遵守をアッラーの名において誓ったと述べ、彼に耐えるよう説得し、その身柄を父スハイルに受け渡したのである。[61]

三　不適切な言動を好まない人

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は生来、一部の人たちが示す粗野な振舞いや不適切な行動を好まなかった。ムスリムたちがバドルの戦いへと赴いたとき、一人の遊牧民から様々な情報を得ようとした。しかしその遊牧民は何も知らなかった。彼らはその男に預言者に挨拶するよう促した。男は「あなた方の中に預言者がいるのか」と尋ねた。「そうだ」と彼らは答えた。男は預言者に挨拶し、「もしあなたが預言者なら、このラクダが身ごもっているのはオスかメスか、私に教えて欲しい」と言った。そこにいたサラマ・ビン・サラマは「そんなことは預言者に聞くまでもない、私に聞きなさい。私が教えてやる」と言った。サラマのこの振舞いを、預言者はよしとしなかった。そこで預言者はサラマに、男に対し横柄な態度をとったことを注意した。[62]同じ教友が、バドルの戦いを終えマディーナに戻ったときに発した言葉に対し、預言者が示した態度も興味深いものである。バドルの戦いのときマディーナに残っていたムスリムたちは、預言者や兵士たちを祝うために出迎えた。サラマ・ビン・サラマは「我々を何のために祝っているので

すか。アッラーに誓って言いますが、私たちは去勢されたラクダのような、毛も抜けたような年寄りと戦って彼らを屠っただけです」と不適切な発言をした。預言者はそれに対し、微笑を浮かべ、ムスリムたちの成功を矮小化しないようにと次のようにサラマに語っている。「兄弟よ、彼らは有力者であり、部族の長たちであったのだ」

以上のような伝承は、預言者が不適切な振舞いをよしとしなかったことを示しているのと同時に、一部の教友たちが彼の前で非常に自由に振舞っていたこと、一方預言者も彼らを傷つけたり、厳しい態度に出ることなく、彼らの行いを正していたことを明らかにしている。一つ目の出来事は、イスラームに無知な人物が預言者をどのように理解し、彼らが預言者から何を求めていたかを示して興味深い。

四　品格のある人

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は親切で品格のある人であった。そうした性格は預言者の生涯をとおして、家族の人々やムスリムたち、マディーナへ預言者を訪問してくる代表団、招待した人々、そして手紙を送った相手に対する態度に見受けられる。さらには多神教徒への態度にも見出すことができる。その一例に、ウムラトゥル・カダー（ヒジュラ暦七年に行った、その前年にできなかった代わりの巡礼）のとき起きた出来事を挙げることができる。三日というマッカの滞在期限が切れ、預言者がアブターフの地に設けられた皮の天幕の中でサアド・ビン・ウバーダと腰掛けていた。そこへクライシュ族の多神教徒のスハイル・ビン・アムルとフワイトゥブ・ビン・アブドゥッザがやって来て、三日の期限が切れたため契約に従いマッカから出ていくようにと告げた。それを聞いたサアド・ビン・ウバーダはスハイル・ビン・アムルに腹を立て、次のように言った。「ここはあなたの土地でも、あなたの父の土地でもない。アッラーの使徒はただ契約に従い、その心による承認によってここから出るのみだ」それに対しムハンマドは微笑みながら、サアドに向き直り、「私たちの宿営地まで私たちを訪問してきた人々を非難してはいけない」と諭し、教友たちに出発

を命じたのである。[63]

五　人生を肯定的にとらえる人

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は常に人生を肯定的にとらえ、周囲の人々にもそうするように勧めた。そして微笑を絶やすことはなかった。最も苦しいときですら悲しみを表に出さず、周囲の人々の心を暗くするような態度をとらなかった。実際のところ預言者は、マッカ時代には多神教徒たちの迫害を受け、マディーナ時代にも様々な襲撃や攻撃にさらされ、人間にとって最大の災厄である戦争や武力攻撃に何度もさらされてきた。飢えに苦しんだ時期もあった。そうしたことにとどまらず、六人の子供を失うという悲しみも味わった。ファーティマを除くすべての子供を失っているのである。諸文献は私たちに、娘たちや息子イブラーヒームの死に直面して預言者が悲しみにくれ、涙を流したことが伝えられている。[64]イブラーヒームが亡くなったときには、山に向かって次のように呼びかけている。「ああ、山よ。私の身に起こったことがあなたの身に起こっていたら、あなたは崩れていただろう。しかし私たちはアッラーが命じられたとおり、[65]『私たちはアッラーのしもべであり、そのお方のもとに帰ります、万物の主アッラーに讃えあれ』[66]と言うのだ」[67]この言葉は、彼が受けた苦しみや痛みの大きさと同時に、その深い忍耐心とアッラーへの帰依、そして人間的な側面を示している点でたいへん興味深いものである。

預言者は家族の人々と同様に、教友たちを深く愛していた。彼らの身に起きた災難を、自分の身にふりかかったことのように悲しんだ。たとえば、七十人から成る布教団が多神教徒たちの裏切り行為によってビリマウーナで殺害されたことを、この上もなく悲しんだ。そうした悲しみや苦痛を与える出来事も、預言者の世界を暗くすることはなかった。反対に逆境に耐える力を養ったのである。また預言者は決して失望することもなかった。人生を肯定的にとらえることは彼の特性の一つであり、人が模範とすべき最も重要な態度であった。肯定的なものの見方と志気を高く保つ

ことは、人を成功に導くための要素であり、人々の模範となる基本的な事柄である。人々が、やる気もなく人生に嫌気がさしているような人を模範としないのはごく当り前のことである。

六　謙虚な人

歴史をとおして人類は、手にした物質的あるいは精神的な力を頼み、自らの仲間のみならずアッラーに対しても挑もうとする、類まれな能力の持ち主に出会ってきた。しかし、物質的・精神的な能力の双方を備えていた預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はそのような人物とはまったく異なっていた。彼は「私は皇帝でもないし、独裁者でもない。逆に、クライシュ族の中の、乾いた肉を食べる女性の息子である」[68]と語っている。この言葉によって預言者は、民衆の一人であることを明言したのである。預言者は信仰告白の言葉にあるように、アッラーのしもべでありその使徒である。この特性は彼の生き方すべてに反映されている。たとえば、人が集まっているところへ入って行ったときには、空いている場所を見つけて座ったことが知られている。実際、預言者はその生涯を、国家の長としてではなく、一人のアッラーのしもべとして生きた。預言者は飾り気のない質素な生き方を貫き、預言者であることを個人的な利益のために利用したことは一度たりともなかった。[69]

年老いた教友のマフラマ・ビン・ナウファルはある日、預言者が自分に贈られた衣服を分け与えていることを耳にした。彼は息子のミスワルを呼び、一緒に預言者の家の前まで行った。そして息子に、預言者に呼びかけるようにと言った。しかし息子は気が引けてしまい、そうすることができなかった。そこでマフラマは「息子よ、預言者は独裁者ではない」[70]と言い、息子の気持ちを楽にしたのである。マフラマのこの言葉は、預言者が周囲の人々からどのように認識されていたかを明白に示している。アルナルデスの言葉を借りるなら、「預言者はどのようなときも横暴ではなかった」のである。[71]

アディー・ビン・ハーティム・アッ＝ターイはムスリムとなる以前はキリスト教徒であり、イスラームに敵対していた。のちに訪問団と共にマディーナに来たとき、預言者のそばに親戚の女性とその子供たちがいるのを見て、預言者にはイランやビザンチンの皇帝のような特性はないと見なした。[72] 預言者は彼を家に連れて行く途中、年老いた女性に呼び止められ、彼女が長々と悩みを打ち明けるのに耳を傾けた。家に着いたときには、細い糸をつめた皮のクッションを客に与え、自分は床に座った。預言者のそうした振舞いからアディー・ビン・ハーティムは、「誓って言うが、彼はただの皇帝ではない」[73]と賞賛し、その結果ムスリムとなったのである。

七　いき過ぎた言動を嫌う人

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は何事においても度が過ぎることをよしとせず、そのような行為を避け、いかなるときも過激な感情や思いに囚われることはなく、教友たちにもそのことについて警告していた。イスラームに対する中傷の原因となった、人々をいやな気分にしたり、イスラームを憎悪させるような行動やイスラームに悪い影響をもたらすような行為は決して容認しなかった。そのような出来事を知らされると悲しみ、さらには腹をたてた。そのような行動をとった者には厳格な態度で臨み厳しく注意した。このことについていくつかの例を示そう。教友の一人は、集団を率いて礼拝する際、長い章句を選んで詠み、礼拝にたいへん長い時間をかけていた。そうした状況を集団礼拝に参加している人が預言者に訴えた。それに対し預言者は立ち上がって、そこにいる人々に次のように忠告した。「人々よ。あなた方の中に、人々をうんざりさせている者がいる。誰であれ、礼拝を率いる立場となったときには、礼拝を適度に短く行いなさい。なぜなら集団礼拝を行っている人々の中には、病人や老人、用事がある人などがいるはずだから」この出来事を伝えた教友は、その日のこの話のときほど預言者が腹をたてているのを見たことはなかったと語っている。[74]

サキーフ族の代表団がマディーナを訪れムスリムとなったとき、彼らの中で最も若かったウスマーン・ビン・アブー・アル＝アスがサキーフ族の知事及びイマームに任命された。そこで預言者は彼に次のように助言した。「集団を率いて礼拝を行うときには、人々のために礼拝を適度に短く行いなさい。時間をかけすぎないように礼拝を行いなさい。人々のうち最も弱い者たち、老人や子供、病人や仕事のある人たちのことを考慮しなさい」[75]

預言者は二つのハラール（勧められていること）の事柄からいずれかを選ぶ必要があるときは、容易にできる方を選ぶことを勧めた。崇拝行為においても、人の性格や能力を超えて負担となるようなことは勧めなかった。

マッカを征服したとき、預言者のもとに一人の男が来て、「私は、アッラーがあなたにマッカの征服を成し遂げさせたならば、エルサレムで礼拝を行うと誓いました」と伝えた。それに対し預言者は「ここで礼拝を行うことがより徳として適っている」と答えている。預言者の妻マイムーナも、「アッラーの使徒よ。私は、アッラーがあなたにマッカの征服を成し遂げさせたならば、エルサレムで礼拝を行うと誓いました」と訴えた。預言者は彼女にも、「あなたの力ではそれをすることができない」と答えた。それに対しマイムーナは「前後に護衛をつけて行きます」と主張したが、預言者は「あなたの力はそれをするには十分ではない。エルサレムに灯明に使うための油を送りなさい、そうすればそこで礼拝を行ったと同じように見なされるだろう」と答えた。それ以降マイムーナは、灯明のための油を買う費用として毎年現金をエルサレムに送った。[76]

預言者は崇拝行為においても、人が辛いと感じるようなことはよしとしなかった。アナス・ビン・マーリクによると、ある日預言者はモスクに入り、二つの柱の間に張られたひもを目にし、「このひもは何か？」と尋ねた。「これはザイナブのひもです。礼拝のとき、立っているのに疲れるとこのひもにつかまるのです」と人々は答えた。彼はそれに対し次のように話した。「いや、このひもはほどきなさい。あなた方のうち誰でも、健康で丈夫である限り礼拝を行うように。疲れたときにはすぐに座らせなさい」[77]

八　信頼できる人

美徳の中で最も重要なものの一つに信頼性があり、それはすべての預言者たちが共通して持っているものであった。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は若い頃から信頼できる人として知られていた。彼は二十五歳のときにはマッカで、「アル＝アミーン（信頼できる人）」と呼ばれていた。三十五歳のとき、カアバ聖殿の工事中に、「黒い石」を誰が設置するかをめぐってクライシュ族の間で衝突が起こりかけ、その解決策は翌日最初にカアバに入ってくる人に託されることとなった。翌日預言者が最初にカアバ聖殿に入って来るのを見て、彼らは「アル＝アミーンが来た」といって喜んだ。預言者がアル＝アミーンと呼ばれた逸話は枚挙にいとまがない。

マッカの人々は預言者に貴重品を預けていた。彼はその信託を決して裏切らず、持ち主に確かに返した。経済的に最も困難な状況にあったときですら、預かりものに手をつけることはなかった。よく知られているように、マディーナに聖遷を行った夜、多神教徒たちは彼を殺害しようと預言者の住居を包囲した。預言者は家を出る前に預かりものをアリーに託し、翌日それを持ち主たちに返すよう依頼している。ここで注意すべきことがある。それは預言者がアリーに託したその信託物は、多神教徒たちのものである可能性が高いことである。なぜならその時点で多くのムスリムたちはマディーナに移住し、マッカには数人のムスリムしか残っていなかったからである。

イスラームの教えが広く伝えられたことには、預言者が信頼できる人であったことが大きな役割を果たしている。もし、預言者の行為が人に信頼を与えるようなものでなかったとすれば、人々は預言者の周囲に集うことはなかったであろう。

預言者は、個々の人々やその財産に対し信頼を裏切ることがなかったように、公共の財産に対してもその所有権を侵害することはなかった。事実、フナインの戦いの後で戦利品が集められた場所で止まり、手にラクダの毛を取り、次のように言っている。「人々よ、私はあなた方の戦利品を欲してはいない。この毛すらも」[78]

預言者は教友たちに常に信頼される存在であるようにと言い、信頼に逆行する背信行為が醜い振舞いであることを教えた。教友たちも預言者を信頼できる人と確信し、無限の信頼によって預言者と固い絆で結ばれていた。

預言者は信仰と信頼される人であることは切り離せない関係にあると指摘している。そのことに関する預言者の言葉をいくつか紹介しよう。「人の心に信仰と憎悪が同時に存在することはない。信頼と裏切りも同時には存在しない」[79]、「信徒とは、人々に信頼されている人のことである。ムスリムとは、その言葉や行動について信徒たちが安心できる人のことである」、「私の自我がその手にあるアッラーに誓って言うが、その悪しき振舞いのため隣人たちが安心できない人は、天国に入ることはできない」[80]、「信託を尊重しない人には信仰は存在しない」[81]

信頼感は、社会のあらゆる側面、あらゆる分野で必要欠くべからざるものである。親が子供に、子供が親に、配偶者が互いに、上司が部下に、部下が上司に、雇用主が労働者に、労働者が雇用主に、売り手が買い手に、買い手が売り手に信頼を感じられる社会は健全である。

ここで預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が重視していた商売上の信用について簡単に触れたい。まず明らかにしたいことは、取引の本質は相互の信頼にあるということである。商売において信用が失われ不信が広まれば、人々はすべてのものを疑いの目で見るようになり、人々の間の精神的な結びつきは弱まる。そして不和や対立が生じるようになる。自分を騙す、あるいは騙そうとしている人に対しては、誰しも愛情や敬意ではなく憎しみを感じるものである。人は言葉や仕事において信用の置けない人と関係を持つことを避ける。もしその人が商売を行っていれば彼と取引をしようとはせず、彼がもし買い手であれば品物を売らず、物を造っている人であれば仕事の注文を入れないだろう。そう、預言者の「背信行為とは、貧しさをもたらすものである」という言葉の意味はここにある。しかし、もしその逆であれば、すなわちすべての人々がお互いを信頼すれば、生産も消費も利益も増加し、繁栄や豊かさがもたらされるのである。

商業に携わる人々が社会に貢献していることを否定することはできない。なぜなら、人々は工場まで行って製品を

求めることはできないからである。事実預言者は、商業に携わる人々が他の人々同様社会に貢献したことから、大きな精神的報奨を得ることを吉報として伝えている。あらゆる欺瞞や計略、そして相手に害を及ぼすことは禁じられている。預言者はある日、食べ物を売っている人のもとを訪ねた。預言者が手を商品の中に差し入れると、指が濡れた。それによって商品の上部、つまり買い手から見える部分は乾いているが、下の部分は湿っていることが明らかになった。預言者が「これはどうしてだ」と尋ねると、売り手は雨が降ったからだと訴えた。それに対し預言者は次のように言った。「湿った部分をどうして人の目の届くところに置かなかったのか。私たちを欺くものは、私たちの仲間ではない」[82]

信頼感は個人の間で重要であるように、国家間の関係においても重要である。信頼されていない国家は、国際関係において経済から政治に至るまで、どのような分野でも成功することはない。預言者は単にマッカやマディーナ、あるいはヒジャーズ地方だけで交易を行っていたのではなく、国際交易に勤しむ商人であった。国際交易でも、彼に対する信頼があってこそ、ハディージャの隊商はシリアへの旅で予想外の利益を得たのである。そのためハディージャは預言者に、最初に提示した報酬額の二倍を支払った。これも信頼される商人は利益を上げるという一つの例である。

九　公正な人

社会は愛によって力を強め、公正さによって自らを守る。あらゆる人が公正に振舞うようになれば、人々はお互いに親密になることができる。逆に不正や不公正は不和をもたらす。なぜなら、何人といえども、決して他者によって自らの権利が侵害されることをよしとしないからである。クルアーンでは、公正さについて数多くの言及がなされている。公正さを欠く人と、公正さを備えた人が比喩を用いて比較されている。それによると、公正さを欠く人は言葉を持たず、何も成し遂げられない、何かに益をもたらすこともない奴隷にたとえられている。そのような人は、正しい道を歩み、公正であるという特質を備えた人と同じとは見なされないとしている。[83] 権利について触れた章句では、

自分にとって都合がよければそれに満足し、不都合なものであればそれを無視する人々を不義者と見なしている。[84]そして個人的な利益や親戚関係、豊かさ、貧しさ、憎しみ、敵意、あるいは階級の違い、肉体的・精神的に欠点があるといったようなことは、権利の侵害や公正に反する行為の正当な理由にはならないことが示されている。[85]クルアーンで預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は人々の間に公正さを実現することを命じられているのである。[86]

預言者は常に公正さを自らの活動の原則にしていた。イブン・サアドは預言者がイスラーム以前の時代にも、人々の間に不和が生じたときにその判断を求められる人であったと語っている。[87]カアバ聖殿で彼が下した判断は有名である。預言者は人々を差別することがなかった。預言者として活動している時期にも、他の人々の後先を考えない要求や提案に左右されることなく、神の命令に従って振舞った。諸文献には、預言者の公正さにまつわる言葉が多数見出せる。

預言者は他者の権利に十分配慮し、人の生命や財産を損なったり、権利を侵害することを許さなかった。やむをえず人に害を与えてしまったときには、謝るだけで済ませられる場合であっても、あるいはそれすらも必要ないような場合でさえ、もし相手から補償を求められれば喜んでそうした。バドルの戦いのとき戦闘を始める前に、預言者が手にした矢でムスリムたちの隊列を整えていた際、サワド・ビン・ガジヤという名の教友が列を乱し、少しだけ内側に入っていることに気がついた。そこで、サワドの腹に矢で触れ前に出るよう求めた。するとサワドは「アッラーの使徒よ、あなたは私に痛みを与えました。アッラーはそれに対する私の権利を問われるでしょう。補償を求めることを許してください」と言った。それで預言者が腹部を出し仕返しするようにと言ったところ、サワドは即座に彼を抱きしめキスをした。どうしてそのようなことをしたのかと尋ねる預言者に、サワドは次のように答えた。「あなたもご存知でしょう、私は敵に殺されないという保障はないのです。あなたとの最後の交流が、肌と肌の触れるものであることを私は求めたのです」預言者も彼のためによいことを願っていると告げた。[88]明らかなように、サワドの本来の目的は仕返しをすることではなく、預言者への愛情をそういった形で表現することにあった。預言者はそのことに触れることなく、

彼のためによいことを願うと述べるだけで十分としたのである。ただし、そういった形で愛情を表現しようとした人を傷つけてもいない。この出来事から汲み取るべきことは、預言者が彼の真意を知らないまま、その見かけの振舞いに応えて行動したということである。しかしこの伝承で私たちが真に注目すべきは、預言者が公正さとアッラーのしもべの権利をいかに重要に考えていたかという点である。預言者は他者が彼に行使し得る権利を、いかなるときであっても、たとえそれが戦いを前にして軍を整えているようなときでさえも、実行に移すことができることをこの例で示したのである。

公正さと権利にまつわる例をもう一つ紹介しよう。フナインの戦いに参加した教友の一人が次のように語っている。「私は、自分のラクダに乗って預言者のそばへと近づいた。私は固い靴を履いていた。私のラクダが預言者のラクダに接触したとき、靴の端がアッラーの使徒のふくらはぎに当たり、彼の足が痛んだ。預言者は私の足を鞭で打ち、『足がひどく痛んでいる。私の後ろに続きなさい』と言われた。私は預言者のおそばから離れた。翌日、アッラーの使徒は私を呼ばれた。私は『昨日、あのお方の足を痛めたことで呼ばれたのだろう』と考えた。おそばにいくと預言者は私に、『あなたは昨日私の足を痛め、私を苦しめた。私もあなたの足を鞭で打った。あなたを呼んだのはそれを補償するためだ』と言われ、八十頭の羊を私に与えられた」[89]

ターイフの包囲が解かれジラーナへと戻っていたとき、預言者がラクダを鞭で打つたびに、鞭が後ろにいた教友アブー・ズルア・アル＝ジュハーニに当たった。預言者は振り返り「私の鞭があなたに当たっているのだろうか」と尋ねた。アブー・ズルアは「そうです」と答え、しかしそれは気に留めるほどのことではないとつけ加えた。それにもかかわらずジラーナに着くと、預言者はアブー・ズルアに贈り物を与えている。[90]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は教友たちの間に生じた権利の侵害を放置せず、公正さを保ったことが知られている。諸文献にはそれについての多くの例が存在する。アナス・ビン・ナドゥルという教友の妹ルバイーが、ある女性の歯を折った。そこで歯を折られた女性の近親者にその代償を支払うことが提案された。だが相手はそれを

受け入れず、仕返しを要求した。人々がそのことを預言者に伝えたところ、彼も仕返しするように命じた。アナス・ビン・ナドゥルは預言者のもとにやって来て、「アッラーに誓って、ルバイーの歯は折られるわけにはいきません」と訴えた。預言者はそれがアッラーの命令であり、それに従わなければならないと告げた。ただしそのときには、歯を折られた女性の近親者は仕返しを断念し代償を受け取ることに同意していた。[91]

預言者は公正さの逆を意味する不正を機会あるごとに非難していた。それについて預言者は多くの警告を残している。その中で最も有名なものは「ムスリムはムスリムの兄弟である。彼を苦しめてはいけない」というものである。[92]この言葉は、ムスリムたちは兄弟であることを示した上で、ムスリムであることの最大の特性は兄弟を苦しめず、不正を行わないことにあることを明らかにしている。ムスリムが互いに不正を行わないことと同様、イスラーム国家の保護下にある人々に対しても不正を行わないように命じた。預言者は権利が侵害された人を常に保護し、人々に被害者を守り、彼らを支援することを求めた。不正が来世に及ぼす害についても説き明かしていた。[93]

十　寛容な人

寛容という言葉には、寛大に見ること、大目に見ること、気に留めないこと、罪を犯した人に対し厳しい態度をとらずにすますこと、[94]我慢することといった意味がある。

寛容な精神は社会生活でこの上なく要求されるものである。なぜなら人はそれぞれ異なる信条や考え、態度を持っているからである。人の拠って立つところ、目的や意図、手段などは多くの場合異なるものであり、いかなることにおいてもすべての人々の意見を一致させることは不可能である。そのためお互いの考え方や態度に寛容な精神を持って臨む必要があるのである。

寛容は近年においてその価値が見直され、高められてきたものの一つである。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の寛容さを理解することは、現代の寛容の概念とその実践が、彼が示した寛容さと比べてどの程度のものかを知る上でも役立つであろう。預言者は寛容を意味する「ムサーマハ」という言葉を頻繁に使い、実際、寛容でなければならないという原則に従って行動した。一方西洋においては、寛容は預言者の時代から千年以上も経ったのち十九世紀に入ってから、哲学的概念として用いられるようになった。

寛容は預言者の活動の重要な原則である。この原則の礎は、「やさしくしなさい、難しくしてはいけない。吉報をもたらしなさい。怖がらせてはいけない」という言葉にある。預言者はイスラームの教えとはやさしさであることを明言している。[95] そして、寛容とやさしさの教えであるイスラームを携えて自らが遣わされたと述べている。[96] 人々の「アッラーの位階において何が最も尊いことなのか」という質問に答えて、預言者はアッラーへの信仰に次いで寛容を挙げている。[97] また寛容であることが天国へ行くための必要条件であるとも語っている。[98]

預言者は寛容について、人間関係の中で一方の側にだけ求められるものではなく、双方において実践されるべきものであるとした。寛容が不正につながることを防ぎ、一人が常に寛容さを求め、もう片方がいつでも寛容さを示さなければいけないという事態が生じないように、そして社会のあらゆる人々の間で寛容がよく行われるために、「寛容の精神を持って振舞いなさい。そうすれば、あなたも寛容に振舞われるだろう」[99] と述べている。この言葉は同時に、寛容には同じように寛容を持って応えること、人の寛容さを悪用してはいけないことを明らかにしている。

預言者は粗暴で道徳に反する行為に対し、怒りのままに行動に出るようなことはなく、成熟し落ち着いた態度で接した。ある日、ナジュラン産の硬い襟を持つ服を着て歩いていたとき、近づいてきた一人の男がその服を強く引っ張った。その結果、襟が首を傷つけた。男はそれを謝るどころか、「ムハンマドよ、あなたのところにあるアッラーの財産を私にも分けるように奴らに命令してくれ」と言った。預言者は男に向き直り、微笑を浮かべ、彼を罰することはなかった。そして彼が求めるものを与えるよう命令を出したのであった。[100]

またある日、一人の遊牧民が預言者モスクで小便をした。そこに居合わせた人々は彼に罰を与えるよう預言者に求

めた。しかし預言者はその要求を受け入れず、小便をした場所を水で洗い流すよう指示した。そして「あなた方は物事を難しくするためではなく、やさしくするために遣わされたのですよ」[101]と言ったのである。この出来事から、預言者が不適切な行動をとった人に寛容な心で接したこと、そして教友たちにそのことを教え、一般的な規範を指摘したことがわかる。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が家族の人々や親しい人々に示した寛容は高く評価すべきものである。妻たちや子供たち、その庇護のもとで育った人たち、そして召使たちに寛容な態度で接していたことはすでに述べたとおりである。それと同時に、社会のあらゆる階層の人々に対しても寛容に振舞った。たとえば、預言者の近親者を殺傷したり、彼自身に対して暗殺計画を企てた人なども許している。

預言者は他の宗教に属する人々にも寛容さを示し、彼らに敬意を払って接した。たとえば、ヒジュラの後、マディーナの多神教徒のアラブ人やユダヤ教徒とマディーナ条約に調印し、ムスリムでない人々にも信仰、思想、生命と財産の保障を認めている。彼らに認めていた崇拝行為の自由に関する例を次に示したい。キリスト教徒であるナジュランの代表団はある日の午後、マディーナを訪れ預言者モスクに入った。預言者と教友たちが午後の礼拝を行っている最中に、彼らは自分たちの崇拝行為の時間になったため東方に向かい、その用意を始めた。一部の教友は彼らの崇拝行為をやめさせることを望んだ。しかし預言者は彼らを自由にさせ、崇拝行為を最後までやり終えるように告げたのである。啓典の民に含まれるユダヤ教徒とキリスト教徒、そしてゾロアスター教徒たちは、もしムスリムとならず自分の宗教にとどまるのであれば、国家に人頭税という税金を納めることにより、生命や財産が保障され、名誉や尊厳、宗教及び宗教施設が守られた。このようにただ寛容であることにとどまらず、実際に庇護や保護、保障といったことが行われていたのである。寛容の実践はそれ以後の時代にも受け継がれた。預言者の啓典の民に対する寛容さと彼らとの関わりについては、既に述べているのでここで同じことを繰り返さない。

耐え忍ぶこともなく、寛容の精神も持たずに人生を送ることができないのは自明である。人が支配者などとして権

力を持っているとき、寛容さが相手の権利を認める、許すという形で示されるなら、それはより意義深く尊いものとなる。この観点から、マッカ征服の際に預言者が示した寛容はこの上なく尊いものである。

あらゆることに対し寛容であることが求められるわけではないことは言うまでもない。個人や集団に対してひどい罪が犯されることがあり、それを大目に見ることはできない。したがって、預言者が新たな社会秩序を形成し、社会の規律を確かなものとし、平和を維持するためにとったいくつかの政策は、不寛容としてではなくこの観点から捉えるべきである。預言者はそれによって、寛容さとは人につけ込まれるような行動様式ではないことを示している。さらに、あらゆる物事に対し寛容を示すことは誤った寛容さを認め、対峙すべき行為から逃げる態度を容認することとなり、悪い習慣を蔓延させる原因ともなる。

寛容な精神は社会の平和や融和にも大きな影響を及ぼす。それは相互の愛情や敬意に支えられた、喧嘩や争いごとのない、お互いの考え方やものの見方、信仰に敬意を払う人々から成り立つ社会を形成する基盤となる。そのような社会のあり方は、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が第一の目標に掲げていたものでもある。預言者は過ちに目をつぶるのではなく、正しいものを示し、同じ過ちが繰り返されないように努力していた。なぜなら、過ちに目をつぶり続けるならば、それは次第に個人や社会の安定を破壊するほどの状態をもたらしかねないからである。またある行為に対し当初示された寛容が、それが長く続けば次第に鬱積へと変わっていくこともある。

預言者の寛容については、西洋の研究者たちの注目するところでもある。たとえば、預言者に関する著作を発表しているイギリスの将校ボドレーは、多くの面で秀でた人間であった預言者が、人間の弱さに思いをめぐらせ、その弱さに対し寛容を示し、人間の欲望についても理解していた[102]と指摘している。寛容さ、物事をよりやさしくしたこと、そして穏健な政策が預言者の成功の鍵であったと語っている。また彼は「アブー・ジャフルの息子イクリマがイスラームを受け入れたことは、穏やかさと物事をやさしくすることの正しさを示す一つの勝利である」[103]としている。[104]ボドレーは預言者の寛容さはほとんどすべての状況で見られ、最も苦しいときですらその穏やかさを手放さなかったと述べて

いる。

十一　気前のよい人

気前のよさとは、自分の財産や能力を自ら望んで見返りを期待することなく、必要に応じて他者のために費やすことである。ここでまず指摘しておかなければならないことは、イスラームの教えにおいて気前のよさは人が備えるべき基本的な徳の一つであるということである。クルアーンでは気前のよさがアッラーの特性の一つ（カリーム）[105]であり、アッラーが気前よく与えられるお方であることが示されている。[106]また、気前のよさの表れである「援助」は、見返りを求めず、[107]見せ掛けではなく、誰も傷つけることなく、[108]自分にとって大切な財産[109]を使って行うことが求められている。あらゆる分野で崇高なるクルアーンの規範を実践する預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）も、その言葉や行動によって気前のよさに高い価値を認め重きを置いた。彼はその人柄を熟知する教友たちに「人間の中で最も気前のよい人」と知られていた。[110]そして預言者は気前のよさをとりわけラマダーン月に発揮したと伝えられている。[111]

諸文献は預言者の気前よさと雨を比べ、そして預言者の気前のよさは、雨よりも気前がいいと伝えている。[112]ここでの比較は注意すべきものである。すべての人々、すなわちあらゆる宗教に属するあらゆる世代の人々が、貧富を問わず雨から恩恵を受ける。それと同様に、預言者の気前のよさから様々な立場の人々が恩恵を被ったと言えるのである。預言者は何かを求められたとき拒んだことがなく、それを持っている限り求めに応じて与えたと伝えられている。[113]

「物惜しみ」とは富を失いたくないがために、見返りを期待せずに自分のお金を費やしたり善を行ったりすることをしないことであり、「浪費」は人が自分の財産、あるいは自らが責任を負っている財産を必要のないものに費やしてしまうことを意味する。気前のよさはこの「物惜しみ」と「浪費」という二つのいき過ぎた振舞いの中間に位置するものである。クルアーンでは無駄や浪費が非難される一方で、浪費や物惜しみをしない均衡のとれた支出を行う者が評

価されている。[114] またクルアーンは人々に善行、恵み深さ、援助を奨励し、物惜しみすることはよくないことであり、[115] アッラーは物を惜しむことを好まれないこと、[116] 物惜しみはその人自身に害をもたらすものであること、[117] 物惜しみしない人は救いを得るであろうということ、[118] 物惜しみする人が堕落してしまった場合その財産は彼に益をもたらさないこと[119]などを教えている。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は物惜しみすることを非難し、物惜しみしないようにアッラーに庇護を求めていた。[120] 預言者は自らが物惜しみする人間ではないと明言し、物を惜しむことは人を卑小にすると教えた。[121] また物惜しみの感情と信仰とは両立しないとも告げた。[122] あるハディースでは、物欲を鉄のよろいにたとえ、気前のよい人と物惜しみする人を次のように述べている。気前のよい人の人を助けようという感情は物欲に勝り、人は気前よく振舞えば振舞うほど身につけているよろいはゆるくなっていく。そしてそのような人の物欲や物惜しみの感情は次第に消えていく。気前のよい人は同時に他の人々の苦しみを和らげることで心のやすらぎを得る。それに対し物惜しみする人の物欲は、自らを締め付けるよろいのように次第に自らを苦しめだす。人々が苦しむのを見るにつけ良心の痛みを感じるが、物惜しみする性格ゆえに良心を楽にするような善行を行うこともできない。このように物を惜しむことはその人自身に心理的なストレスを加える。[123] 預言者は物惜しみが原因となって過去にいくつかの民族が滅亡したことを次のように言い表わしている。「物惜しみすることを避けなさい。なぜなら、物惜しみがあなた方以前の人々を滅亡させたのだから。それが彼らをお互いの血を流し合い、禁じられたものを合法だと見なすような状態へと追いやったのだ」[124]

預言者は様々な場面で、人々が自らの資力や能力を浪費しないように努めた。「食べなさい、飲みなさい、サダカを支払いなさい、衣装を求めなさい。しかし浪費せず、またうぬぼれることのないように」[125] と命じている。礼拝前に体を清めるときですら水を無駄にしないように求めた。[126] また人は青年時代、力や財産、知識といった資力や能力をどのように生かしたかについて、アッラーに尋問されるであろう[127]と教えた。それにより、人がその資本や能力を活用する

際に自らの責任を認識しなければならないことを指摘したのである。浪費は個人、社会のいずれにおいても悪い結果を生む。公的な浪費は人々を苦しめ、経済的な問題を生み出す。この観点から見るなら、預言者が一人の統治者として気前のよさを備える一方で浪費を否定的なものとしているのは意味深く、また重要なことである。さらに浪費は社会的・心理的な苦痛の要因となる。なぜなら、資力を持つ人々の浪費はそうでない人々に妬みや憎しみを植えつけるからである。[128]

十二　進取の精神に富んだ人

新しい事柄、進歩や発展は人間を幸福へと導くものである。預言者ムハンマド(彼の上に平安あれ)がその時代に人々に伝えようとしたことは、宗教的・社会的・経済的・道徳的・文化的な新しい時代の息吹であった。したがって彼が預言者であった時代は、様々な革新的な出来事に満ちあふれている。ただし預言者は、そうした新しい事柄を実現するに当たって、クルアーンの啓示に反するものでない限り、それまでに人類が生み出してきた知恵や人間の本質に適ったやり方を無視することはなかった。なぜなら預言者の意図は社会の価値基準を混乱させることではなく、あらゆる分野の不合理なものを正していくことにあったからである。そして、改革を進めていくときにも、当初の案より適切な代替案を見出したときには、それをすぐ採用し実行した。預言者が協議や相談に重きを置いたことはこの観点から捉える必要がある。活発な議論の中から様々な意見を汲み取り、新しい考えが適切だと判断すればそれを実践したのである。預言者が生涯を通して新しいものを受け入れていたことを示す数多くの例が存在する。その中からいくつかの例を紹介してみたい。預言者モスクではかつて、早朝と夜の礼拝のときにはナツメヤシの枝や葉を燃やして明かりをとっていた。ヒジュラ暦九年、タミーム族の代表団の一人としてマディーナを訪れたタミーム・アッ・ダーリーは、いくつかの灯明と油を持参し、ある金曜日の夜、召使にモスクで灯明を柱に結びつけ点すように命じた。預言者はモ

スクに来たとき、それらの灯明は誰が点したのか尋ねた。それがタミームの行いだと知った預言者は、彼に次のように語りかけた。「あなたはイスラームに光を与えた。イスラームの礼拝所を美しく輝かせた。アッラーがあなたに、この世とあの世で光を与えてくださいますよう」この出来事に預言者はたいへん感銘を受け、タミームに灯明を点した召使の名を尋ねた。彼の名がファーティフであると知ると、名前をシラージュ（灯明）と変えさせた。教友となったシラージュは、預言者モスクに灯りを点し、名前を変えたことを自ら伝え残している。[129]

預言者が新しいものを受け入れることを示すもう一つの例は、戦いにおいて他民族の技術を巧みに採用したことである。塹壕の戦いでは、町を守るためにイラン人の防衛技術を取り入れ、サルマーン・ファーリシーの助言に従い町の周囲に塹壕を掘ったことが伝えられている。またターイフの包囲のときは、イランで投石器が用いられていると知らせたサルマーンの勧めに応じ、投石器をつくらせそれを戦いに用いた。ヤズィード・ビン・ザムア、トゥファイル・ビン・アムル、ハーリド・ビン・サイードの三人が投石器をターイフへ持ちこみ、それをターイフの包囲で用いた[130]との伝承もある。こうした例はすべて、預言者が人の知性が生み出した新しい考えを受け入れ、さらに発展させることを奨励したことを示している。

ムスリムは預言者のどのような振舞いを人生の模範とすべきなのだろうか。彼の個性はその時代だけではなく、それ以降の時代においてもムスリムの生き方の模範であった。クルアーンは、預言者は信徒にとって生きた、そして完成された徳の見本であると告げている。したがって預言者の目的は、人々に実際に生活の中で守ることのできる規範を教え、それを率先して示すことにあった。ムスリムに期待されていることは預言者を模範とすることなのである。クルアーンでは次のように述べられている。「本当にアッラーの使徒は、アッラーと終末の日を熱望する者、アッラーを多く唱念する者にとって、立派な模範であった」[131]

アッラーが預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）を模範とするように命じられたとき、当時の食べ物や道具や衣装、すなわち預言者の外見上のあり方を模範とすることをお求めになっているのではないことは明らかである。もし

そうであるとすれば預言者を模範とすることは不可能である。模範とされるべき根本的な要素はそうしたものではない。もしそのように受け止めれば、乗り物はラクダを、食べ物はナツメヤシを、着る物はイエメンの民族衣装を着なければならないということになってしまう。同時に、預言者の人生の外見上のあり方、たとえば衣装を模範としなければならないと主張することは、イスラームの普遍性に反する。動物の皮を着た極北の民族イヌイットのムスリムに、アラビア半島の暑さにあわせて預言者が着ていた衣装を身につけさすことは現実的ではない。そのようなことはイスラームの教えの本質に関わりがあるわけでもない。実際ムハンマドは、預言者となる前に食べていたものが何であれ、預言者になってからも同じものを食べていた。同様に預言者となる前から着ていたものと同じものを、預言者となってからも着ていた。預言者となってから着るものを変えたというような記録は一切存在しない。したがって、ムスリムが模範としその人生で実践すべきことは、預言者の外見のあり方ではなく、正しさ、人々への愛情と敬意、平和の重視、寛容さ、信頼性、穏やかな気質、勤勉さ、足ることを知ること、慈悲、慈愛、気前よさといった美徳なのである。[132]

預言者の家庭生活

一　家長としての預言者

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は多くのハディースで、家族の大切さを説き、家庭が安らぎをもたらす場であると説いている。子供たちが生まれたときには父親として喜び、亡くなったときには悲しんだ。たとえば、息子であるイブラーヒームの誕生を彼に知らせたアブー・ラフィーには贈り物をしている。イブラーヒームの母であるマーリヤを解放した。[133] 子供の世話としつけに関わった乳母にはナツメヤシの畑を贈った。そして、しばしば乳母を訪問した。イブラーヒームは生後十六ヵ月もしくは十八ヵ月のときに亡くなっているが、その知らせがもたらされたときにムハンマドは涙を流した。それを見て「アッラーの使徒よ、あなたも泣くのですか」と言ったアブドゥルラフマーン・ビン・アウフに、それが慈しみから湧き上がる感情であり、自分が悲しみの中にあっても大声で泣き叫んだりすることは禁じられていると語った。[134]

友として、父として、最も細やかな感情に恵まれていた[135]預言者は、家長として家族にどのように振舞うべきかを明白に示しただけではなく、自らも実践していたのである。男性が女性に対しよく振舞わなければならないことも明確に伝えている。「あなた方のうち最も尊い者は、家族にとって尊いものである。私は私の家族に対し、最も尊い存在である」[136]「あなた方のうち最も尊いのは、妻たちによく振舞う者である」[137]と述べている。アナス・ビン・マーリクは「家族に対してアッラーの使徒ほど慈悲深い人を私は知らない」[138]と語っている。信仰と徳、そして家族への優しい振舞いとが切り離せないものであることを表現した次の言葉は非常に意味深いものである。「信徒のうち、信仰において最も

完成された者とは、徳が美しい者、そして家族に優しく振舞う者である」[139]
人は家族に対して最も責任を負わなければならない。なぜなら人が喜びや悲しみを最初に分かち合うのが家族だからである。預言者は様々な形で、男性が女性に、女性が男性に対し責任を負っていることを教えた。女性に対する振舞いにおいてアッラーを畏れること、彼女たちに不正を行わないことを求めた。預言者のもとを訪れ女性の不平を言う男性が増えると、そのような行いはよいことではないと諭している。[140]預言者は妻たちに親切に振舞い、彼女たちに手を挙げることはなかった。またそのようなことを行う人がいれば、「なぜ昼に殴っておいて、夜になると共に寝ているのか」[141]と非難した。そして男たちに女性に手を挙げない、特に顔を殴ったりしないように、また汚い言葉で脅したり家を追い出したりすることがないようにと忠告した。[142]「あなた方の中で悪い者だけが妻を殴るのだ」[143]とも語っている。イブン・サアドは女性たちを殴ることについてハディースの中で特別の頁を割いて書きしるしている。[144]
また預言者は、妻をはじめとする家族の近親者ともかかわり続けた。妻ハディージャの友人が来たときは親切にもてなし、羊を屠ったときは必ずハディージャの友人たちにも肉を贈ったと伝えられている。[145]家族同様と見なしていたアナス・ビン・マーリクの母親や祖母とも親密に交流した。父が残した使用人であり、子供の頃預言者の世話をしていたウンム・アイマンには「わが母よ」と呼びかけ、残された家族の一員であるといった。[146]
クルアーンでも預言者の妻や家庭生活について言及されている。妻たちとの間で起こった口論について、預言者と妻たちに忠告が与えられ解決の道筋が示されている。[147]また、預言者の妻たちが信徒たちの母であるとも述べられている。[148]
家族の人々が娯楽や休息を必要としたとき、預言者ムハンマド(彼の上に平安あれ)は彼らがイスラームの教えに適った娯楽を楽しむことができるように努力した。断食あけの祭りや犠牲祭には妻や娘たちも連れて行った。[149]ある祝祭日では、エチオピア人の出し物を見ることをアーイシャに許可し、[150]その手助けもした。家族の人々と冗談を言い合うこともあった。
預言者は自分の子供たちと同様、彼の庇護下で育っている子供たち、たとえばアリー・ビン・アブー・ターリブや

ザイド・ビン・ハーリサ、そして解放奴隷であったウンム・アイマンなどに対しても慈しみの心を持って接した。預言者が叔父アブー・ターリブの負担を軽減するため五歳のときからそばにおいて育てていたアリーは、父がマッカにいるにもかかわらず預言者の下で成長し、そして生涯彼から離れなかった。同様にザイド・ビン・ハーリサも、預言者の家族の中で成長している。妻ハディージャが奴隷として他の人から与えられたザイドを夫に贈ると、預言者はザイドを奴隷の身分から解放した。ザイドの父は息子を探し続け、ついにマッカで彼を見つけ出した。そのとき預言者が自分のそばにとどまるか、父と共に行くかの選択を彼に委ねたところ、ザイドは預言者と共にいることを選んだ。このことは、ザイドに対する預言者の振舞いが本当の父と変わらないものであったことを示している。また預言者は、父の残した奴隷でハディージャとの結婚の際に解放したウンム・アイマンも家族の一員と見なし、母に対するような態度で彼女に接した。預言者は妻や子供たち、そして身近にいる者たち、さらに使用人たちを殴ることは決してなかった。[151]マディーナで預言者の側に仕え最期のときまで尽くしたアナス・ビン・マーリクは、預言者はたった一度も怒りや苛立ちを表すことはなかったと伝えている。

預言者は女性たちの様々な相談にのっており、それにまつわる多くの記録が諸文献に残されている。預言者は女性たちの異議や要求も聞き入れた。もし預言者が常に命令口調で妻たちに指図し、彼女たちに相談もしなかったなら、女性たちの異議を聞き入れることなど決してなかったであろう。預言者は最初の啓示が下されたとき妻のハディージャに相談した。ハディージャは夫を慰め、ワラカ・ビン・ナウファルならばその問題に答えてくれるだろうと考え、彼の意見を聞きに行った。この出来事はハディージャの冷静さや的確な判断力をよく示している。最初の啓示が下されたとき妻が自分の助けとなったことを、預言者がのちになって忘れることは考えられない。

預言者はフダイビーヤ遠征の後、教友たちに犠牲を屠りひげを剃るように命じた。教友たちはフダイビーヤ条約の内容が一見ムスリム側に不利なものであったことから、誰もその命令に従わず、ただひたすら預言者の顔を見つめるばかりであった。そのことに落胆した預言者は、妻ウンム・サラマのテントを訪れその状況を彼女に話した。ウンム・

サラマは「アッラーの使徒よ、あなたがまず犠牲を屠り、ひげを剃ってください。そうすれば彼らは皆あなたに従うでしょう」と助言した。

預言者は妻の助言を受け入れた。すると教友たちも感情的になるのをやめ、彼に従ったのである。[152]

預言者は家では、一日を礼拝や祈りの時間、家族と共に過ごす時間、自分のための時間と三つに分けて過ごしていた。彼は、人が家族のために費やす時間は貴重なものであると考えていた。そして知り得たことを最初に話す相手が家族である、と人々に説いた。預言者は自分のもとを訪れる人々に、「あなたの家族のもとに帰りなさい。私が教えたことを彼らにも伝えてください」と言うのが常であった。預言者もまた家族に様々なことを教え伝えた。彼のこうした考え方から最も大きな影響を受けたのはアーイシャであった。

預言者は可能な限り家族を大切にし、簡単に離婚が行われないように努めていた。

二　結婚

成人した預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、高潔な人柄の持ち主として知られていた。そして二十五歳のとき、二度の結婚歴を持つ年上の未亡人ハディージャと結婚し、その後二十五年間にわたって幸福な結婚生活を送った。預言者と妻ハディージャの関係において注目すべき点は真の友としての強固な絆である。最初の啓示がもたらされたとき、彼はそのことをまずハディージャに告げている。ハディージャは理解ある落ち着いた態度でそれに対処している。彼女が亡くなった年は、預言者にとって最も悲しい年として、「悲しみの年」と呼ばれている。当時のアラビア半島では多くの女性と結婚するのが当たり前であったが、預言者は彼女の生前は他の女性と結婚することはなかった。ハディージャ亡き後も彼女との記憶に敬意を払い、二年半の間は独身で過ごし、その後サウダ・ビント・ザムアと結婚している。もし彼が性的快楽に囚われていたとしたら、彼がクライシュ族であり、さらに預言者であったことと

から彼には多くの求婚がなされ、五十四歳になるまで何回でも結婚することができたであろう。

マッカ時代はただ一人ハディージャを妻としていた預言者は、マディーナ時代には多くの女性と婚姻関係を結んでいる。彼が複数の女性と結婚するようなったのは五十三、四歳の頃からであり、それらの結婚には宗教的・社会的・経済的、そして道徳的な理由があった。つけ加えておくなら、重婚を制限するクルアーンの言葉（婦人章3節）はマディーナ時代の後期、すなわち預言者の死のおよそ二年前に下されたものである。重婚を制限するこの章句が下される前まではアラブ独特の伝統が支配的であった。当時のアラビア半島では複数の女性を妻とすることはごく普通の生き方であった。[153] 歴史家イブン・ハビーブはイスラームがもたらされた時期に十人の妻を娶っていた数多くの人の名を記録している。[153] 預言者もそうした当時の伝統に従って結婚したのである。したがって彼の結婚生活を考える際には、当時の政治的・社会的・文化的条件を考慮する必要がある。その時代には、仲間であれ敵であれ誰一人としてそうした結婚のあり方を非難する者はいなかったのである。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は多いときで十一人の妻と婚姻関係にあり、亡くなったときには九人の妻がいた。その中には夫を亡くし子供を連れて再婚した女性も少なくなかった。預言者は妻となる女性に支払われるべきお金を当時の伝統にのっとって支払った。ただ奴隷の身分であったサフィーアにはお金を支払う代わりに、彼女を奴隷の身分から解放している。[154]

預言者は、結婚できる女性の数を四人までと定めるクルアーンの章句が啓示されたのち、四人以上の妻を持つ教友たちに、その中から妻を四人選び、それ以外の女性とは離婚するように命じた。クルアーンは預言者だけには、それまで結婚していた女性すべてとの婚姻関係を継続することを許した。[155] ただそれ以後、他の女性と結婚することは彼にとっても合法ではないことを明らかにしている。[156] 預言者に特別に与えられたこの許可には、法的・政治的・社会的、そして教育に関わる多くの理由があった。クルアーンでは預言者の妻たちは信徒たちの母とされ、信徒は彼女たちと結婚することができないと定められていた。[157] 預言者が九人の妻たちの中から四人を選び、残りの妻たちと離婚してい

たとすれば、その女性たちは他の男性と結婚することができず、彼女たちにとってその離婚はたいへんつらいものとなっていたであろう。

預言者の結婚はイスラーム社会の教育において、重要な意味を持っている。特に女性たちに対するイスラームの考え方を周囲に広める上で、預言者の妻たちは大きな役割を果たしている。彼女たちは教友たちの妻たちの教育にも多大な努力をはらった。そしてムスリムの女性たちの育成に尽力し、イスラームを広める生徒たちを育てたのである。

預言者の妻たちは教育レベルが同じ段階にあったわけではない。また彼女たちのうち何人かは年をとっており、何人かは若かった。ただその中で、アーイシャの果たした役割には特別のものがあった。預言者とアーイシャの結婚の際立った特徴は、彼らが師と教え子の関係にあったことである。アーイシャは立派な教え子となり、夫ムハンマドの死後、彼女の家は多くの老若男女が様々な質問を携え知識を求めてくる学び舎のようであった。アーイシャは教友たちやそれに続く人々の灯明としての知識を伝えたのである。預言者のスンナ（慣行）を伝え、その意味するところを解説するだけではなく預言者の人となりが正しく理解されるように学問的評価や考え方も示した。アーイシャはファトゥワ（宗教上の布告）を出す七人の教友の一人でもあった。彼女はムハンマドから二千二百十件のハディースを伝えている。

また妻ハフサも読み書きができる教養と知性に富んだ女性であった。彼女も人々にイスラームを教え、よきムスリムの育成に尽力した。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の結婚は、献身的で忍耐強いムスリム女性たちの庇護や敬愛といった意味合いも持っていた。マッカ時代、ムスリムとなった女性のなかには拷問を受けた人々がいた。エチオピア、そしてのちにはマディーナに移住した女性の中には、夫を失い子供と共にあとに残された人が少なくなかった。ことに家族がマッカの多神教徒であった場合は、彼らのもとに戻ることもできなかった。預言者はそうした女性たちを保護し、その子供たちの面倒を見たいと申し出た。そして彼女たちと婚姻関係を結んだのである。サウダ・ビント・ザムア、ザ

イナブ・ビント・フザイマ、ウンム・サラーマ、ウンム・ハビーバはそうした妻たちであった。

また預言者の結婚は、ムスリムたちと敵対関係にあった部族をイスラームに招き、その部族との敵対関係を解消する目的でも行われた。ジュワイリーヤとサフィーアがその例である。ジュワイリーヤはムスタリーク族の長であったハーリス・ビン・アブー・ディラルの娘であった。彼女は戦いで夫を失いムスリム側の捕虜となったが、身代金が支払われたのち預言者と結婚している。このことを耳にした教友たちは、預言者の親戚と見なされるようになったムスタリーク族の捕虜たちを解放している。この結婚はムスタリーク族とムスリムとの長年の敵対関係を解消させ、彼らをイスラームに近づかせる目的を持つものであった。この結婚ののちムスタリーク族の人々は大挙してイスラームに入信している。サフィーアもまた、ハイバル遠征で捕虜となった人々の中にいた。彼女はユダヤ教徒の指導者フヤーイ・ビン・アフタブの娘であった。預言者は彼らとの敵対関係を解消するため、サフィーアと結婚し彼らと縁戚関係を結んだのである。

また預言者ムハンマド(彼の上に平安あれ)の結婚はイスラーム法を社会に定着させる目的を持っていた。ザイナブ・ビント・ジャフスとの結婚がその例である。ザイナブの最初の夫は預言者の奴隷であり養子であったザイド・ビン・ハーリサである。預言者はいとこにあたるザイナブをザイドと結婚させた。当時のアラブの因習によるなら、自由民である女性が奴隷の男と結婚することはできなかった。だがイスラームはすべての人間は平等であると説いた。預言者は古い因習や考え方を取り除くため、自らの近親者の結婚によってその理念の実現を図ったのである。しかしザイナブとザイドの結婚生活は幸福なものではなかった。そこでザイドは預言者に妻を離縁したいと申し入れた。預言者はその状況にひどく心を痛め、ザイドに「妻を離縁してはいけない。アッラーを畏れなさい」[158]と諭した。二人に結婚生活を続けさせるために預言者が行ったことはクルアーンにも記されている。だが夫婦の不和がどうしようもない状態にまで達したことで、最終的にザイドは妻を離縁せざるを得なくなった。

イスラーム以前の時代、養子の地位は実子と同じものとされ、実子が持つすべての権利を持っていた。アラブ社会

の伝統に従うなら、父親は息子の離婚した女性と結婚することはできなかった。イスラームはこの制度を破棄し、養子と実子は宗教上の兄弟関係にあたるものとした。それにより養子が離婚した女性との結婚は養父にとって禁じられたものではなくなったのである。預言者はザイナブや親戚の求めに応じて彼女と結婚した。彼女の美しさに惹かれたから、といった説もあるがそれは事実ではない。ザイナブは預言者のいとこであり、二人はいつでも会える関係にあった。もし預言者が彼女との結婚を望んでいたとしたら、ザイドと結婚させるようなはことはなく、何よりもまず自分が結婚していたであろう。

また預言者の結婚は、親しい友や周囲の人々と親戚関係を結ぶことによって、彼らとの結びつきをより強固なものとするためのものでもあった。そうした例がアブー・バクルの娘アーイシャやウマルの娘ハフサとの結婚であった。[159]

三　子供たち

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）とハディージャとの間には、二人の息子と四人の娘が誕生している。最初の子供カーシムは二歳で、アブドゥッラーも幼いうちに死亡している。[160]その他にマディーナ時代にはエジプト人のマーリヤとの間にイブラーヒームという息子が生まれている。一部に異論はあるが娘たちの誕生の順番は、ザイナブ、ルキーヤ、ウンム・ギュルスム、そしてファーティマであったとされる。

ザイナブは預言者の二番目の子であり、最初の娘である。預言者が三十歳のときに生まれたと記録されている。預言者は妻ハディージャの希望を入れ、彼女をいとこにあたるアブー・アル＝アスと結婚させている。この二人からはアリーとウマーマという子供が生まれている。ザイナブは父が預言者としての使命を受けたときに、母と共にイスラームに入信している。彼女の夫はそのとき入信しなかったが、ムスリムになったからといって妻を離縁することもなかった。そうした二人の結婚生活はバドルの戦いのときまで続いた。預言者はヒジュラの際、家族と共に彼女も同行させ

ることを望んだが、夫の方が別れることを嫌がったのである。

ザイナブの夫アブー・アル＝アスは、多神教徒軍の一員として参加したバドルの戦いで捕虜となった。ザイナブは夫の身代金としていくらかの財産と共に、結婚のときに母が嫁入り支度の一つとして用意してくれた首飾りを差し出した。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はその首飾りをザイナブに送り返し、アブー・アル＝アスを釈放した。ただし彼に、ザイナブと子供たちをマディーナに送ることを要求し、それを約束させた。アブー・アル＝アスは約束を守り、妻と子供たちをマディーナに送っていくためマッカを出発した。当時身ごもっていたザイナブは、マッカ郊外でムスリムではない男の攻撃を受け、ラクダから落ち流産している。その出来事によってザイナブは病をわずらいヒジュラ八年に死去している。[161]

そこで預言者はバドルの戦いの一ヵ月後、ザイナブをマディーナに連れてくるためにザイド・ビン・ハーリサと一人のアンサールの男をハラーム・モスクへ十キロの地点まで派遣した。ザイナブは子供たちを連れてこの二人と共にマディーナに無事到着し、父のもとで暮らし始めたのである。

一方、アブー・アル＝アスはヒジュラ暦六年、多神教徒のキャラバンの一員としてシリアへ赴き、その帰りに遭遇したイスラーム教徒の兵士の一団によってマディーナに連れてこられ、そしてイスラームを受け入れた。預言者はザイナブを以前の夫であった彼と再度結婚させている。[162] ザイナブはこの二度目の結婚からまもなく、流産したときの後遺症もあり、ヒジュラ暦八年に亡くなっている。

ザイナブの子供の一人アリーは、マッカ征服ののちに亡くなっている。娘の一人ウマーマは叔母にあたるファーティマの死後アリーと再婚している。アリーが殉教した後にムギーラ・ビン・ナウファルと再婚し、彼との婚姻関係が続いているときに亡くなっている。ウマーマはこの夫との間にヤフヤーという子を授かっている。[163] ザイナブの子孫は後述するルキーヤやウンム・ギュルスムと同様、現存せずその血筋は伝えられていない。[164]

ルキーヤは預言者が三十三歳のときに生まれたと記録されている。彼女はアブー・ラハブの息子ウトゥバと婚姻関

係を結んでいる。後述するがウンム・ギュルスムもアブー・ラハブの息子であるウタイバと婚姻関係を結んでいる。アブー・ラハブと妻は、彼らのイスラームへの態度を非難するクルアーンの棕櫚章が啓示され、しかもそれと相前後してルキーヤとウンム・ギュルスムがイスラームを受け入れたことにより、息子たちを彼女と別れさせようとした。結果として二人とも妻を離縁している。その後ルキーヤはウスマーンと結婚し、夫と共にエチオピアへと移住した。さらにのちにマッカに戻り、そこからマディーナへと移り住み始めた。ヒジュラ暦二年、バドルの戦いの準備をしている最中に彼女ははしかにかかった。そこで預言者はウスマーンを遠征に参加させず、病床の妻の看護に当たらせた。だがルキーヤは父の遠征中に亡くなっている。ウスマーンとの間に生まれた息子アブドゥラーは二歳もしくは六歳のときに亡くなっている。[165]

ウンム・ギュルスムはルキーヤより年下であることから考えると、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が三十四歳を超えた頃に生まれた子供ということになる。先に述べたとおり彼女は、アブー・ラハブの息子ウタイバと結婚した。だが親の強い反対により、ウンム・ギュルスムは離縁されてしまう。そこで彼女は聖遷のときまで父の家で暮らし、そして妹のファーティマや他の家族の人々と共にマディーナに移住した。姉ルキーヤの死後、ヒジュラ暦三年にウスマーンと結婚した。そしてヒジュラ暦九年、子供を産むことなく彼女は亡くなっている。預言者は「もう一人三番目の娘がいたとしたら、やはりウスマーンと結婚させていたであろう」と語っている。[166]

ファーティマは預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の最年少の娘であった。彼女の誕生した年については様々な説があるが、一般的には西暦六〇九年あるいは六〇五年の生まれとされている。諸文献には彼女の幼少女時代にまつわる言及は少ない。伝えられているもののうち一つが次のものである。

あるとき預言者がカアバ聖殿の近くで礼拝していたとき、多神教徒の男がひれ伏している預言者の背中に羊の内臓をぶちまけた。預言者はサジュダ（礼拝のとき床に額をつけて祈ること）の状態から頭をあげることができずにいた。そこに娘のファーティマが来て、預言者の背中の上にあるものを投げ捨て、多神教徒を厳しく咎めたのである。[167]

ファーティマは父ムハンマドの聖遷の少し後に、ウンム・ギュルスムやアブー・バクルの家族と共にマディーナに移住した。それからまもなくアリーは彼女との結婚を預言者に申し出た。ヒジュラ暦二年に、預言者はファーティマの意見を聞いた上で[168]アリーと結婚させている。彼女はその一年後にハサン、さらにその一年後にはフセインという子供を生んでいる。のちにもウンム・ギュルスム、ザイナブという女の子とムフシンという男の子を授かったが、ムフシンは幼い頃に亡くなっている。ファーティマのイスラーム文化への貢献としてよく知られているのが、保健衛生活動や社会的弱者の保護などの奉仕活動である。ウフドの戦いでは兵士たちに食料や水を供給し、傷病兵の治療を行い、父である預言者の顔の血を拭き清めたりしている。だが父の死を深く悲しみ、その死の六ヵ月後には後を追うように彼女自身も亡くなっている。預言者の子孫はファーティマの血筋から現在に至るまで続いている。[169]

イブラーヒームは、預言者とエジプト人マーリヤとの間にヒジュラ暦八年に生まれた男の子である。イブラーヒームの誕生に際し、預言者はマーリヤを奴隷の身分から解放している。イブラーヒームはヒジュラ暦一〇年に病死している。[170]

このように、預言者の子供たちの多くは若くして亡くなっている。著名な学者イブン・ハズムは、預言者の娘たちのうち誰一人として三十五歳まで生きた女性はいないと指摘している。ファーティマは二十五歳で、ルキーヤも同じような年齢で、ウンム・ギュルスムは二十二歳で亡くなっている。ザイナブについては、若いうちに亡くなったという記述が残っているだけである。[171]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）とその統治

一　統治における預言者の立場

まず述べておかなければならないことは、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の統治は公正、道徳、協議、誓約、そして適材適所という原則に基づいたものであったということである。アッラーから与えられたイスラームの布教という任務を果たし、また自分を信じつき従った人々を一つとするときにも、同様の原則が適用されている。イスラームが誕生した当時、預言者の一族はマッカの統治に関して政治的な役割を担っていた。預言者の父や叔父はマッカの町の会議のメンバーであったが、父アブドゥッラーは息子に継がせることのできるような権利は持っていなかった。祖父が遺した権限は叔父たちが継いでいた。したがってムハンマドは預言者としての活動を始める以前には、マッカの町の統治に関わる立場にはなかった。

ムハンマドは預言者となった以降も決して世俗的な権力や地位を求めるというようなことはなかった。実際、多神教徒たちが自分たちの偶像に手を出さないという条件で、彼を長にするという提案をしてきたときにも、「太陽を右の手に、月を左手に与えたとしても私はこの任務を断念しない」とかたくなに拒否している。こうした出来事は、預言者が世俗的な地位をまったく追い求めていなかったことを示すものである。彼はそんなことよりも、いつも信仰する集団の組織化を考えていた。ある集団、もしくは地域の統率者が預言者の周囲に集まるようになれば、自ずと政治的権限がもたらされるようになるのはごく当然のことであった。

マッカ時代、すなわちヒジュラ以前には預言者は小さな信仰集団の指導者に過ぎなかった。イスラームに入信した

マディーナの住民の一部は、アカバで彼に従うことを誓った。彼らの中から連絡係として十二人の代表が選ばれた。ヒジュラ後、マディーナで領土を得るとムスリムたちは独立した統治を行うことができるようになった。預言者の死後は、イスラーム諸国において統治者と人々との間で誓いが交されたが、統治者と人々との間に主従関係ができるようになったり、人々が統治者を選挙によって選ぶようになっていった。

ムハンマドを預言者として選んだのは疑いもなくアッラーである。つまり信徒が彼を預言者として選んだのではない。人々はそうした状況と立場を受け入れるのみである。預言者は自らをアッラーの使徒と認める人々から従属の誓いを受け取った。クルアーンでも言及されているように、[172] この誓いはそもそも預言者個人に対するものではない。彼を仲介としてアッラーへ差し出されたものである。この誓いは男性だけでなく女性も行った。この誓いはムハンマドへの従順を要求するものであった。クルアーンも多くの箇所でアッラーと預言者への従属を命じている。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の統治は協議を基本としたものであった。クルアーンもいくどとなく協議の重要性を説き、預言者に協議を行うよう命じている。[173] 彼はクルアーンの命令に従い、教友たちと協議を行っていた。アブー・フライラは次のように述べている。「預言者ほど友人たちと相談していた人は見たことがない」[174]

預言者が戦いの前やそのさなかに教友たちと協議を行っていた一例を次に挙げてみよう。バドルの戦いが始まる前、野営地が不適切だと感じたフバーブ・ビン・ムンジルは預言者のもとを訪れ、次のように尋ねた。「アッラーの使徒よ、ここはアッラーがあなたに野営を命じられ、前進も退却もすることのできない場所でしょうか。あるいはあなたの個人的な判断によって攻撃や防衛する上で適切だと見なされた場所でしょうか」預言者は自らの判断でその場所を決めたと答えた。そこでフバーブは「アッラーの使徒よ、ここは野営に適した場所ではありません。この地から兵士たちを移し、クライシュ族の陣地の近くの水のある場所に行くべきです」と進言した。預言者はフバーブに「その考えは正しい」と述べ、彼の提案に従ったのである。[175] こうした協議は世俗的な事柄だけでなく宗教的な事柄についても行われていた。

信徒たちにとって、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は唯一の、そして永遠の長であった。クルアーンも、信徒たちは預言者に従属するという義務を負っていること、人々の間に不和が生じたときの仲裁者も彼であると述べている。[176] また預言者に対する従順さはアッラーに対する従順さでもあると明示している。[177]
預言者は、各地の知事、仲裁者、教師、各地を巡回する教育の指導者、軍の司令官、税金の徴収係、使者、巡礼にまつわる仕事を行う係、イマーム、ムアッズィン（アザーンを読み上げる人）などを任命し契約を結んだ。
預言者は、イスラーム以前の時代のマッカの町に施行されていた法律の多くを廃止した。
預言者の統治を見ていくと、いくつかの基本的な原則を見出すことができる。その中で最大の目的は、イスラームを可能な限り多くの人に広めることにあった。それ以外の事柄はすべて、その目的を達成するための手段に過ぎない。預言者はその目的達成のためにはあらゆる困難に耐え忍んだ。そして公正さと徳をその活動の基本としていた。人々を区別することなく、すべての人に対して公正に、立派な徳に基づいて振舞っていた。イスラームが生まれた当時の社会には身分の差が存在していたが、イスラームの時代となってからは、その教えを受け入れる人はすべて平等だとされた。それに加え、ムスリムでない人たちの間の身分制度も廃止した。ウンマ（イスラーム共同体）の内部における平和の実現、外に対しては安全を保障することが預言者の統治の基本的な姿勢であった。事実、イスラーム以前の時代においては部族間の抗争、血の報復、キャラバンへの襲撃などが頻繁に起こっていたが、預言者の時代にはそれらはほとんど未然に防がれていた。預言者はムスリムたちが力を得て一つにまとまるために、マディーナへの移住を信徒たちに勧めた。移住はマッカ征服まで続いたが、マッカ征服後はもはやその必要性はなくなっていた。なぜならイスラームはもはやアラビア半島各地に広まっていたからである。それ以後は新しくイスラームを受け入れた地域が、いかにイスラームに順応し、そこでイスラームが根を張れるように支援し、イスラームにふさわしい環境を整えていくことが必要となっていった。そのために、預言者はイスラームの指導者やその他の任務を帯びた人々を各地に派遣していったのである。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は常に人々に敬意を払い接していた。預言者のやり方は、敵を壊滅することではなく、味方にすることにあった。敵の力を無力化することではなく、それをイスラームのためにいかに活用するかにあった。マディーナ時代の十年間で、イスラームの教えは二百万平方キロメートル四方の地域にまで広まっていた。多神教徒側の二百人以上の死者とムスリム側の百五十人近くの殉教者と引き換えに、イスラームの教えは急速に広まっていったのである。

先にも述べたように、預言者は当時の文明や技術の進歩をうまく取り入れている。同時に、敵の情報収集、自軍の機密保持、経済的な制裁、敵の同盟者を味方につける作戦、敵を彼らの敵により包囲させる作戦、敵を分裂させる作戦、敵の一部に接近する作戦などといった高度な戦略を用い成功を収めていた。人々には長所や優れている点に着目して接した。どれほど無慈悲な敵であったとしても、彼らがひと度イスラームに入信した後は名誉や体面を保てるようにした。新しく入信した部族の中から知事を選ぶときには、性格や生き方を詳細に調べ選任した。たとえば、物惜しみする性格は統治者の資質として不適格であるとしていた。ジャド・ビン・カイスの代わりにビシュル・ビン・ベラーがサラマ族の指導者に任命されたことはその一例である。サラマ族の一団が預言者のもとを訪ね、あなた方の指導者は誰かと尋ねられたとき、彼らは「ジャド・ビン・カイスです。ただ彼は少々物惜しみするところがあります」と答えた。すると預言者はそれを適切なこととは見なさず、「物惜しみすることよりも悩ましい病気があるだろうか。あなた方の指導者がジャド・ビン・カイスであってはならない。ビシュル・ビン・ベラーにするように」[178]と命じたのであった。

二　統治制度

a　知事の地位と町の統治

イスラームがマディーナ以外の地にも広まっていくと、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はアラビア半島の様々

な地域、町、そして部族へ知事を派遣するようになった。知事の他、ザカートを徴収するアーミルという役人も任命された。アーミルたちはザカートを徴収する一方で、国家収入となる戦利品や人頭税の徴収も行った。また預言者は何らかの理由でマディーナを離れなければならないときには、後に代理人を残した。自ら軍を率いて出兵できないときは教友の中から司令官を選んだ。

預言者は役人を選ぶ際には、その仕事に適した人材であるかを重視した。イスラームがもたらされる以前からの指導者がムスリムとなった場合には、彼らをそのままその地の知事としたが、新しい知事を任命することもあった。ザカートの徴収係は一般的にそれぞれの部族の中から選ばれた。知事の仕事は、自分たちの土地で預言者の代理人となり、裁判を司ること、公正さを守ること、治安を維持すること、紛争を未然に防ぐこと、礼拝の指導者になること、統治にかかわる仕事を行うこと、イスラームの布教に努めること、時にはザカートを集めることなどであった。中央から税の徴収係が派遣されていない場合には、そのための役人を任命した。

預言者が派遣した知事たちは以下のとおりである。

イエメン：預言者はササン朝のイエメン知事であったバーザーンがムスリムとなったことから引き続きその任務に当たらせていた。バーザーンの死後イエメンの各地に責任者が派遣された。バーザーンの息子シャフリを父の後継とし、アミール・ビン・シャフリを、自らの出身でもあるハムダーンに任命した。ザービド、アダン、そしてイエメンの沿岸地域にはアブー・ムーサー・アル＝アンサールを、ジャナドにはムアズ・ビン・ジャバルを、ハドゥラマウトにはジヤード・ビン・ラビード・アル＝アンサールを派遣した。シャフリ・ビン・バーザーンは、預言者が病気であったときイエメンにイスラームに対する棄教運動が起き、アスワド・アル＝アンシーによって殺害されている。

バーレーン：預言者はイスラームの布教とザカートや人頭税の徴収のため、ヒジュラ暦八年、西暦六三〇年にアラー・ビン・ハドゥラミーをバーレーンに派遣した。アラーは預言者の手紙をムンズィル・ビン・サヴァアに届けた。ムンズィルは預言者と何度か手紙のやりとりをしたのちにムスリムとなった。預言者はアラー・ビン・ハドゥラミーをバーレー

ンへ知事として送った。一部の文献では、彼はこの任務を預言者の存命中ずっと続けたとされているが、彼の後にアバーン・ビン・サイードが派遣されたとする説もある。

オマーン：預言者はアミル・ビン・アスをイスラームの布教と税の徴収のためオマーンに派遣した。預言者が亡くなったときアミル・ビン・アスはその地にいた。

マッカ：預言者はマッカ征服の後ムスリムになったウマイヤ家のアッターブ・ビン・アシードをこの地に知事として送った。日に一ディルハムの報奨を与えていた。アッターブはこの任務についたときには二十代であった。ムアズ・ビン・ジャバルも、クルアーンやスンア、法学を教えるためアッターブの側近として任命されている。[179]

ターイフ：預言者はマディーナに訪れたサキーフ族の一団のうちの一人ウスマーン・ビン・アブー・アル＝アスをターイフに知事として派遣した。アブー・バクルはマディーナ滞在中の一行の中で最も若かったウスマーンに注目している。「私はこの若者を有能だと見ている。他の者たちよりもクルアーンをよく暗記している。教えの基本を実践する際、非常にはつらつとしていて誠実である」と褒め称えていた。そこで預言者は彼をターイフに派遣したのである。ウスマーンはアブー・バクルの時代にターイフの知事であったアブー・アル＝アスをオマーンとバーレーンへの知事として派遣している。

ナジュラン：預言者はナジュランのハーリス・ビン・カアブの一族のもとにアムル・ビン・ハズムを知事として派遣している。そしてそこでなすべき事柄を記載した指令書も与えている。アムル・ビン・ハズムは預言者が亡くなったときもナジュランにいた。

預言者は統治や財政について高い能力を備えた知事たちを任命すると同時に、様々な地域や部族に税やザカートを集める役人を派遣した。ザカートが義務とされたばかりの頃には、豊かなムスリムたちは自ら預言者のもとにザカートを持参していた。しかしイスラームがアラビア半島の各地、そしてマディーナから遠い地域にも広まったことにより、ザカートを集める役人が任命されるようになったのである。

徴税官が派遣された地域は以下のとおりである。アディー・ビン・ハーティムはターイ族及びアサド族のもとへ、マーリク・ビン・ヌヴァイラはタミームのバーニ・ハンザラ家へ、クダーイー・ビン・アミル・アル＝ドゥエリとシーナン・ビン・アブー・シーナンはアサド族へ、アブドゥッラー・ビン・アブー・ラワハとサワード・ビン・ガズィーヤ・アル＝バラヴィーはハイバルに、ジヤード・アル＝バーヒリーはバーヒラ族に、サーダド・ダウシーはダウス族に、イムリウ・アル＝カユス・ビン・アスバグはカルブ族に、ジブリカン・ビン・バドルはサアド家に、アムル・ビン・サーイドはタイマに、ウヤイナ・ビン・フスンはファザラ家に、アブー・スフィヤーンはナジュランに、ヤラブ・ウマイヤはジャナドに、ワーリド・ビン・ウクバはムスタリク家に派遣された。

知事たちは報酬を中央から受け取っていた。彼らは自らの一存で地方の歳入から報酬を取ることはできなかった。預言者は自ら知事を任命したように、彼らの仕事を直接監督していたのである。[180]

b　巡礼団の首長

この任務はマッカ征服ののちに登場している。マッカ征服の年には預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は特に巡礼団の首長を任命せず、その仕事をマッカの知事アッタブ・ビン・アシードに行わせている。ヒジュラ暦九年、西暦六三一年に巡礼が義務とされ、預言者はアブー・バクルを巡礼団の首長に任命し、三百人の巡礼者たちと共にマッカに送った。翌ヒジュラ暦一〇年には預言者自らが首長となり巡礼を行った。預言者亡き後は、その任務を安全に遂行できるように、カリフたちがその責務を負った。カリフたちは自ら首長となるか、自ら行けない場合には他の人物を首長として任命した。[181]

c　使者

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が周囲の国々に使者を送るようになったのは、マディーナ時代の初期にさ

かのぼることができる。マッカの多神教徒たちはエチオピアの皇帝ナジャーシーに使者を送り、移住していたムスリムたちの身柄を引き渡すよう求めていた。預言者は多神教徒たちのそうした動きを封じ込めるために、またナジャーシーが移住者に有利な判断を下せるように、当時まだイスラームに入信していなかったアムル・ビン・ウマイヤ・アド・ダムリーをナジャーシーのもとに遣わした。それはバドルの戦いの直後の出来事であった。このことから明らかなように、預言者は使者を送る際、ムスリムである否かを問わずその任務に最も適した人間を使者に選任していた。このことは預言者が役人を派遣する際の基本方針が「能力」であることを改めて示している。

先にも見てきたように、預言者はヒジュラ暦六年、西暦六二八年に成立したフダイビーヤ条約以降、六人の支配者のもとに使者や手紙を送っている。彼は教友たちの中から最も適切で能力のある人間を使者に選んだ。使者には道徳心や振舞いの美しさ、話術、説得力、誠実さ、知識といったものが求められた。政治的な目的を持って派遣された使者たちの中には、当時まだイスラームに入信していなかった人々も含まれていた。たとえば、アムル・ビン・ウマイヤ・アド・ダムリーは先に述べた任務でエチオピアに派遣されたときにはまだイスラームに入信していなかった。預言者はシリア、イラク、エチオピアに使者を送る際には、以前そこに行ったことのある人物を選んだ。また使者が派遣先の言葉を知っているかどうかということも重視した。宗教的任務を帯びて派遣された使者はすべてイスラームの教えに従い、宗教上の決まりを注意深く遵守する教友たちであった。[182]

d　書記

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は文盲であったため、啓示されたクルアーンの言葉を文字に記すこと、特にマディーナ時代近隣諸国や部族の長に手紙を書くこと、アラブの諸部族との間で結ばれる条約を記録することなどのために、読み書きのできる教友を書記に任用していた。

諸文献には、預言者の啓示、手紙、条約などを記録していた書記たちの名前が、何ら区別されることなく列挙され

ている。他方で啓示を記録していた書記と、それ以外の書記の名前を区別して記している書物もある。書記の数については様々な説があり、十人とする記録もあれば、三十人以上、さらには四十三人いたとする記録もある。ウスマーン、アリー、ウバイ・ビン・カーブ、ザイド・ビン・サービト、ハリド・ビン・サイード、アブー・バクル、そしてウマルが書記として最もよく知られている人々である。[183]

e 司法

マディーナ憲章には、そこに加わった集団の政治的、軍事的、そして経済的な分野での規範が明文化されている。それは法的な側面からも意義のあることであった。個人や部族の諸権利を自らが守るという原則が廃止され、法の執行者として中央政府が権限を持つようになった。アッラーとその使徒のスンナ、言い換えるならクルアーンとハディースが審理の源泉として受け入れられた。各種の訴訟や揉め事は預言者によって解決に導かれた。預言者は罰則を伴う法的な裁きをクルアーンの判断に基づいて行った。彼のもとに連れて来られた窃盗・姦通・泥酔・殺人・傷害といった罪を犯した人々は、クルアーンが定める罰則に従って罰せられた。裁きが下されるときには、その後数世紀にわたって適用されることになる諸原則が同時に示されていった。

罰を伴う裁判だけではなく預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）には、法的な解決を求める様々な問題が持ち込まれた。それは遺産相続、土地問題、水の分配の問題、水の権利の問題、血筋の問題、借金の問題などである。

預言者の人生で起こった出来事や、彼が裁いた出来事などは記録に残されている。イブン・タラー・アル＝アンダルシーの著した『使徒の契約の書』はその一例である。また一部の預言者にまつわる書物（たとえばシャーミーの『シーラ』という著書）には、預言者が出した裁きや判決に一項目が割かれている。

預言者が派遣した知事たちは、赴任した土地で時には法的業務も担っていた。また預言者は法的業務を担当させるためだけに、教友を地方へ派遣することもあった。マディーナでの訴訟が増えたことから、それまで預言者自身が裁

判官として判決を下していたものの一部を、教友たちに任せるようにもなった。また預言者は控訴する権限も持っていた。二人の兄弟の所有する土地に建てられた家がどちらの財産かをめぐって、相続人たちの間で衝突が起きた。彼らはその問題の解決を預言者に求めた。そこで預言者はその訴訟のためにフザイファ・ビン・イェマーンを任命した。フザイファはその兄弟の家に赴き、詳細を調べ、証人たちや事情を知っている人々の話を聞いた。そこから導いた結論を預言者に報告したところ、預言者もフザイファの判決を支持したのである。

預言者は法的な事柄を熟知し、双方の証拠や計略を見抜く力を持った教友たちを裁判官に任命していた。年長者であることを条件とはしなかった。ザイド・ビン・サービトは彼らよりもさらに若かった。預言者ムハンマド(彼の上に平安あれ)の時代にはウマル、アリー、ムアズ・ビン・ジャバル、アブドゥッラー・ビン・マスド、ウバイ・ビン・カアブ、ザイド・ビン・サービト、アブー・ムーサ・アル＝アシュアリー、ウクバ・ビン・アミル、フザイファ・ビン・ヤマーンなどが裁判官を務めた。預言者によって最初に裁判官に任命されたのはアリーである。彼は裁判官としてイエメンのナジュラン地方に派遣された。預言者はアリーに、告訴した側と告訴された側双方の訴えを聞くことなく判決を下さないように求めた。ムアズ・ビン・ジャバルもクルアーンやイスラームの基本を教えることと共に、裁判官としての任務を帯びてイエメンに派遣された。預言者はウマルに自分の前で判決を下させたこともあった。イスラーム以前の時代は、同じ罪を犯してもそれに対する罰が、罪人の所属する部族や一族の名のもとで差をつけられていたが、イスラームでは血筋や家柄、出自にかかわらず、法の前ですべての人々に等しい権利が与えられた。

預言者の時代には、裁判のための特別な建物や日時は定められていなかった。預言者はモスクや市場、家で彼らを迎え裁定を下した。預言者モスクの一部が裁判に使われていたとも伝えられている。預言者はマディーナとその周辺の法的な業務に携わり、遠くアラビア半島の各地からも訴訟が持ち込まれていた。

イスラーム国家では、イスラーム教徒でない人たちは宗教的、法的な事柄において自治権を持っていた。自らの司

法制度の中で自らの法に基づいて生きていた。イスラーム教徒でない人たちから預言者に訴訟が持ち込まれたときには、彼ら自身の法が適用された。イスラーム教徒でない人々とイスラーム教徒との間のもめごとについては、イスラームの法廷が裁く権利を持っていた。

サフワン・ビン・ムアッタルはハッサン・ビン・サービトから中傷されて逆上し、彼を剣で傷つけた。その出来事を知らされた預言者は双方を呼び、それぞれの主張を聞いた。そして相手を挑発したことについてハッサンを非難し、一方で罪は明らかであることからサフワンの身柄を拘束、もしハッサンがその傷がもとで死ぬことがあればサフワンに報復が行われると判決を下した。のちにサアド・ビン・ウバーダが彼らの間に入り、ムハンマドが何よりも許しを好むが、法の前の平等という原則に基づきやむなくそのような裁きを下したと伝え、ハッサンと親族を説得し訴訟を取り下げさせた。彼らが預言者のもとに来て、訴えを取り下げると表明したため、サフワンは釈放された。預言者はそれを喜びハッサンに邸宅と、エジプトの王から預言者に贈られた奴隷の一人も与えた。そしてサアドもハッサンに庭園を与えた。[184]

f　軍事組織

預言者ムハンマド(彼の上に平安あれ)は、自らを守るため、そして必要に応じイスラーム布教の障害を取り除くため、軍隊の先頭に立ち勇敢に戦った。彼の存命中には、常備軍は存在しなかった。また地域の治安に携わる警察組織もなかった。武器を携えたムスリムたちが宗教上の奉仕や兵士としての任務を負っていたのである。遠征や防衛の必要性が生じたときには、預言者は志願兵を募り、その名前が記録簿に登録された。遠征の日が来ると志願兵たちは武器や乗り物の動物、食糧などと共に町の外の広場に集まった。預言者はそこへ行き、兵士たちを視察した。そして遠征のたびに自ら必要な兵士の数を決定していた。自力で戦いの用意ができない者には、国家がその準備を行った。兵士の招集は部族の長を通して行われた。遠征には目的地までの最短かつ最も安全なルートを知悉した道案内人がつけられ

た。適切な人物が見つかると彼が道案内となり、その案内によって軍は進んだ。
預言者が遠征軍の司令官を任命した。もし預言者自らが遠征に加わるときには、彼に従う形で司令官が任命された。軍隊は伝統的な形式にのっとり、前方、後方、右翼、左翼、そして中央の五つの部隊から成っていた。
軍や遠征部隊の集合や編成はそれぞれの部族に任された。
軍の中には絶対的な階級はなかったが、様々な命令伝達系統が存在していた。
軍の陣地は、昼夜を問わず見張りによって守られていた。敵側の情報は、遠征に出る前に捕虜を尋問したり、先遣部隊を派遣し集められた。先遣部隊による敵の追跡や待ち伏せ、スパイ活動といった戦術がとられた。預言者は情報収集のためにスパイを用いたが、同時に敵のスパイに対しても十分な警戒を怠らなかった。ウサーマ・ビン・ザイドを司令官として軍をシリアへ派遣したときには、事前に敵の情報を探るためにスパイを送り、軍隊には案内人をつけている。[185] 敵の血を流すことなく降伏させることができるよう様々な措置をとっていたのである。
預言者は敵を惑わせる戦略を用いていた。マディーナを離れる際には、真の意図以外に別の目的があるように見せかけた。進軍の当初は敵をあざむくために本当の目的地とは異なる方角に軍を進め、のちに方向を変えたのである。敵が思いもつかないような人通りのない道を選んだ。タブーク遠征以外、遠征の目的は秘匿されていた。
預言者は、聖遷のときもそうであったが、戦いに出るときや遠征軍を派遣するときは目印として旗を掲げた。
戦いを始める前には、必ずイスラームへの招きを通して、和平に向けての敵の説得が試みられた。預言者が遠征に参加しないときには、代理の司令官にこのやり方に従うよう強く求めた。戦いは主に一騎打ちの形で行われた。預言者は風や太陽が戦っている兵士たちに与える影響を熟知していた。当時の戦いは、塹壕の戦い、ターイフの戦い、ハイバルの包囲を除き、その多くが半日ほどで決着をみた。預言者は戦いに際して、太陽の光が兵士たちの目を射ないように軍を展開した。また敵軍に対し地理的に優位に立てる場所を選んだ。
戦いでは、防具としてよろい、盾、かぶと、攻撃用の武器として剣、弓矢、槍、乗り物として馬やラクダが用いられた。

兵士たちは味方を敵から区別するために暗号を定めていた。当時はまだそろいの軍服を着用することはなかったからである。

敵の生命や財産を損なうことは、戦いにおいては自然なことである。敵は殺害されたり、捕虜とされることがある。しかし、捕虜の残虐な扱いや死者への冒涜は預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）によって禁じられていた。死者や生命を持つすべてのものを焼くことは禁じられていた。捕虜であれ死者であれ、その体の一部を切り取ることも禁じられた。そのような行為は人の尊厳を踏みにじり、怒りや憎しみをもたらすものだからである。兵士が敵の体を切り取ることを望んだとき、預言者は「私はそれをしない。私が預言者であっても、アッラーは私を同じように罰せられるだろう」[186]といさめている。また預言者は捕虜に拷問を行うことも禁じている。[187]

戦闘員以外の市民、すなわち子供や老人、宗教者、女性など戦いに加わっていない人々を殺害することは禁じられていた。捕虜に対しては死刑の他、身代金と引き換えに釈放すること、ムスリムの捕虜と交換して釈放すること、その他の条件をつけて釈放すること、奴隷とすること、そして何も求めず無条件で釈放することなどの措置がとられた。預言者の時代、最も多く行われたのは無条件で釈放することであった。預言者は捕虜を丁重に扱うことを命じ、虐待は厳に禁じた。たとえ捕虜から情報を聞き出そうとしているときであっても、彼らを苦しめるような手段をとることを固く禁じた。[188]

経済活動

一　預言者と労働

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、その働き方においても常に人々の模範であった。自ら率先してクルアーンの中の労働にまつわる教えを実践した。誠実であること、信頼できる人であること、公正であること、言行が一致していることといった基本的な原則がここでも貫かれている。働くこと、生産活動に加わること、家族を支えること、貧しい人を援助することを、アッラーの道において奮闘努力することや昼間断食をして夜の礼拝をすることと、同等の価値があると見なしていた。[189] 預言者の労働にまつわる言葉には次のようなものがある。

「誰であれ、自分の手で稼いだもの以上に尊いものを口にすることはない」[190]

「アッラーよ。怠惰であること、臆病であること、老いがもたらす無力感、物惜しみすることなどからあなたに庇護を求めます」[191]

「正しい言葉を話し、常に信頼を置かれている商人は、来世において預言者や誠実なしもべたち、そして殉教者たちと共に過ごすだろう」[192]

「人が飲んだり食べたりするものの中で、最も尊いのは働いて得たものである」[193]

「あなた方の中で肩に薪の束を背負っている者は、他の人にものを乞うている人よりもよい人である」[194]

最悪の状況においてさえ、働いていることの方が他人の世話になるよりもいいと説く預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、こうした言葉によって人々に働くことを勧め、怠惰であることをいましめ、勤勉な人が現世、来世を

問わず幸福な人であると伝えている。

預言者は人々に働くことを勧めると同時に、自ら率先して日々の生活で実践していた。預言者は幼少の頃から晩年まで働き続けた。よく知られているように預言者は、少年時代には羊飼いとして働き、成長してからは交易に従事した。十二歳のとき、叔父アブー・ターリブと共に長い交易の旅に出ている。二十五歳のときにはハディージャのキャラバンをシリアまで往復させている。その交易活動を通して預言者は、同業者やマッカの多くの人々から信頼を得ていた。預言者のそうした活動は生活の糧を得るためのものであった。そのような仕事に加え、カアバ聖殿の工事といった社会的な活動にも従事していた。

ムハンマドは預言者としての使命を受けてからも、様々な立場で働き続けた。預言者はアッラーによって与えられた布教という任務を果たすため、時には国家の統治者として、時には司令官として、そして時には一人の労働者としていかなる困難にも耐え働いた。マッカはもちろんのこと、その外の世界においても、イスラームを広める活動を行った。預言者はクルアーンで、「書や英知や、人々が知らない知識を教える者」として評価されている。人々にイスラームを教えるという大きな目的を達成するため、様々な段階において教友たちの教師としての務めも果たした。

先に述べたように預言者は、時には一介の労働者として働いた。聖遷の途上立ち寄ったクバーでモスクを建設したとき、礎となる最初の石を置いたのは預言者であった。預言者はそれだけではなく、一労働者として工事にも加わった。そんなある日、預言者が持ち上げるのにもひと苦労するような重い石を運んでいるのを見た教友が、「アッラーの使徒よ、その石を私にお渡しください」と言った。だが預言者は「いや、あなたは他の石を運びなさい」と答え、モスクの建設工事が終るまで現場から離れることはなかったのである。

同様に、マディーナの預言者モスクの建設に当たっても預言者が最初の石を置いている。そこでは移住者たちとアンサールたちが力を合わせて働いた。クバーのときと同じように、あるとき一人のムスリムが「アッラーの使徒よ、その石を私にお渡しください。私が運びます」と声をかけた。しかし預言者は「あなたは他の石を運びなさい。私は

あなたたちの誰よりもアッラーを求めているのだから」と答えている。預言者はどのモスクの工事でも重い石を背負い、日干しレンガを服に包み運んだ。そのとき、「本当の生とは来世における生なのである。アッラーよ、移住者たちとアンサールたちを祝福してください」[195]と祈り、その働きぶりによってムスリムたちを励ました。ウンム・サラマが伝えるところによれば、モスクの建設に当たって預言者自身が工事に加わって働く必要はまったくなかったが、預言者はあえて重い荷を運んでいた。その姿を見たムスリムたちは、何もしないでいることはよくないと思い、それぞれの仕事に一層励んだのである。彼は塹壕の戦いのときも、自ら進んで塹壕を掘る作業に参加した。預言者のためにトルコ式天幕が用意されていたが、預言者はそこから出て塹壕を掘ったのである。[196]土を掘り岩を砕き運んだ。必要に応じて破れた服を繕い、靴を修理した。[197]

　預言者はどんな作業でもいい加減に終えることなく、いつもきちんと仕上げた。そして次のように話している。「仕事をするときには、それを完璧に成し遂げなさい」[198]

　預言者はムスリムたちに真面目に働くことを勧めている。仕事がない人には道具を与え、それで薪を切り、市場で売るように勧めている。一人のアンサールが預言者を訪ね、自らの貧しさを訴えた。そして「アッラーの使徒よ。私の留守の間に、家族の誰かが息絶えているのではないかと心配しています」と言った。預言者が「家を見て何か売れるものがないか探してきなさい」と言うと、その男は敷物とコップを持ってきた。預言者が「この二つの品物を一ディルヘムで私から買う者はいないか」と尋ねると、一人の男が「私が買います」と名乗り出た。「もっと高い値をつける者はいないか」と再び呼びかけると、他の一人が「私が二ディルヘムで買いましょう」と応じた。すると預言者はその男に「これはあなたのものだ」と言って、その二ディルヘムを渡し、「一ディルヘムで家族に食べ物を買い、残りの一ディルヘムで斧を買ってきなさい」と言った。そうして男が斧を手にして戻ってくると、預言者は「谷へ行き、低木一本残すことなく木を切り出し、余すところなく薪をつくりなさい。そして十日間は戻ってこないように」と命じた。彼は言われたとおりに行い、後日預言者のもとを訪れ、「あなたが命じてくださったことが恵みをもたらしました」と

話した。預言者は「これはあなたにとって、審判の日に現世で物乞いをしたことがシミとして現れてくることよりもよいことである」[199]と語ったのであった。

最初クバーモスクで、その後ビラールの後任として預言者モスクでムアッズィン（礼拝を呼びかける人）を務めたサアド・ビン・アーイズという名の教友が、ある日預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）に自分の貧しさを訴えた。預言者はサアドに商売をしてはどうかと助言した。サアドはその助言に従い、サラムという木の葉を買ってそれを売り利益を上げた。その成功を預言者に報告すると、預言者は彼にその商売を続けるように勧めたのである。[200]

預言者は状況に応じ、障害を持つ人々にも働く機会を与えた。彼らが容易に商売に取り組めるように法律を定めた。これについて例を一つ挙げてみよう。商人であったムンキズ・ビン・アムルという教友が精神を病み、うまく話すことができなくなった。それでも彼は商売を続けていたが、人に騙されやすくなった。ムンキズは預言者のもとを訪れ、自らの上に起きたことを話した。それを聞いた預言者は、彼に働くことをやめずに商売を続けるよう励まし、やさしく商売する方法を探った。そして取引を行うとき、「だまさないでください」と告げること、三日間は返品できることを相手に伝えなさいと命じたのである。ムンキズはウスマーンの治世になっても、預言者が彼に教えた商売のやり方を守り続けていた。[201]

時間を無益で意味のないことに費やさない。これもまた預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が日常心がけていたことであった。こうした考え方は、預言者がいかに勤勉な人であったかをよく表している。そうした中で預言者はどのようにして休息をとっていたかどうか気になるところである。預言者は必要に応じて休息時間をとっていた。聖遷の直後、預言者はマディーナの人々の従来からの祝日にかえて、イードゥ・アル＝フィトル（断食明けの祭り）とイードゥ・アル＝アドハー（犠牲祭）を新たな祝日として定めた。祝日にはイスラームで許されているお祝いの娯楽や民族舞踊、結婚式の宴などが催され、その宴ではお客に食べ物が振舞われた。また馬やラクダの競走が行われた。

預言者はお金が市場に出まわることに重きを置き、その件については次のように語っている。「畑や家を売ったお金

を同様のものに投資しないのであれば、その恵みを目にすることはないであろう」[202] 彼は商売を奨励し、自ら積極的に取引を行っていた。

預言者は交易を奨励した。預言者の「糧の九割は交易にあり、残りの一割は羊を飼うことにある」[203] という言葉は、交易が生きていく上でいかに重要な仕事であるかを示すものである。国の内外で行う交易は、一国の経済に大きな役割を果たす。預言者は商業を奨励することによって、文明的な生き方を奨励したのである。なぜなら交易は定住生活を促進し、生産を増大させるからである。預言者の近くにいた人々の多くも商業に従事していた。たとえば四人のカリフはすべて商人であった。アブー・バクルは預言者が亡くなる一年前に交易のためにブスラに赴いている。[204] また預言者は商業と並んで農業も奨励した。たとえば木を植えることを奨励するハディースがあるが、それはとりもなおさず農業を奨励するものである。

預言者は様々な職業に従事する人々と話をし、仕事に対する熱意の持ち方、様々な職業の就労規則、仕事上での判断の仕方などを教えた。もちろん預言者は製造業にも重きを置いていた。預言者の時代に広く知られていた職業としては、織物屋、鍛冶屋、天秤屋、両替商、薬屋、仕立て屋、貴金属商などであった。

二　経済制度

経済に関する事柄においても預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）に対し、多くのクルアーンの言葉が啓示されている。イスラーム以前の時代のいくつかの商習慣は廃止され、またその一部には改良が加えられ、新たな制度となった。ヒジュラの後、マディーナの市場では多神教徒やユダヤ教徒たちが力を持っていた。彼らは自らの宗教の考え方や、イスラーム以前の時代の慣習に従って商売を行っていた。預言者はマディーナの市場を視察し、そこで行われていた商習慣がムスリムの市場としてふさわしくないと指摘した。イスラームの商業にまつわる規範にのっとって物を

売買するためには、ムスリムが自分たちの市場をつくる必要があると見なしたのである。そこでベニー・サーイダ地区にあった空き地を利用して市場を開設した。その市場では一部の商人が特定の区域を独占することは禁止され、またそこでは税金の徴収は行われなかった。経験豊富な商人でもあった預言者は、税金を徴収しないことによって新たな売り手がその新しい市場に集まってくることを知っていた。なぜならユダヤ教徒のカイヌカー族は、自分たちの市場をいくつかの区分に分けて有料で貸し出しており、しかも税金が徴収されていたからである。その結果、商人たちはムスリムの市場を選び多くの使用者を得たのである。預言者はマディーナの市場を管理するために責任者を選出した。その一人はウマル・ビン・ハッタ―ブ、他の一人はサムラー・ビント・ノハイクという教友であった。またサイード・ビン・アルアスをマッカの市場の責任者に任命している。

イスラームは商業活動を推奨しているが、利子は段階的に廃止した。商売を含めいかなる類の借金であろうとも、それに対して利子を取ることは禁じられたのである。この件についてはクルアーンのマッカ啓示の中で警告されている。[205]

利子は当時マッカやターイフと同様にマディーナでも、広く人々の間で商慣行として行われていた。預言者自身、ユダヤ教徒たちが高利でお金を貸し人々を苦しめているのを身近に見ていた。ヒジュラ暦五年には、クルアーンのイムラーン家章第130節の啓示によって利子が禁じられた。さらに利子に関する最後の啓示であるクルアーンの雌牛章第275節から279節の啓示により、その禁止はより強固ものとされた。預言者は各地域に配布した通達に利子を禁止する項目を載せ、すべてのムスリムがそのことをよく理解し守るよう促した。別れの説教においても商いについて言及することを忘れず、人々に利子の禁止を重ねて伝えたのである。

預言者はイスラーム以前の社会でしばしば見られた不正や搾取につながるような取引を厳しく禁じた。また商品の売買は、クルアーンの言葉にのっとった方法で行うようにした。人をだましたり、まぎらわしい売買は禁止された。ハディースの諸文献には、商品の売買についての預言者の言葉や実践を集めた特別の一章が設けられている。

預言者は商品の値上がりを期待して品物を貯めこみ、売り惜しみすることを禁じている。なぜならそれは価格を人為的に吊り上げることであり、通常の市場価格を超えた値段となるからである。特に生活必需品を買い占めることは社会全体に大きな影響を及ぼし、それが長く続けば社会全体が困難な状況に陥るからである。預言者は商品を高く売るために売り惜しみする人々を非難している。[206]

また預言者は、商品の仕入れ値を安く抑えるため、村人や生産者、そして製造者たちを町の外で迎え接触することを禁止している。[207] 当時、都市の商人たちは市場価格を知らない異国のキャラバンを町の外で出迎え、運んできた品物を安く買い叩き、貯めこみ、そして高く売って法外な利益を得ていたのである。預言者は生産者たちがそのような目端のきく商人によって騙されないようにそうした行為を禁じ、それを監督する責任者を任命した。もし預言者がそうした措置をとっていなかったなら、生産者はその努力に見合うだけの対価を得ることができず、ひたすら商人たちが不正な手段で利益を得ることになっていたであろう。

預言者は商品の価格を統制することはなかった。商品の価格は需要と供給に応じ、自由な競争によって定められた。誰かが商品を市場価格よりも高く売っている場合には、その人が価格操作を行っているとされた。

預言者はそのような策略を禁じ、それは誤った悪い行為であり、現世でも来世でもその責任を問われるとしている。そのことについて「私たちを騙そうとする者は私たちの仲間ではない」[208]とも語っている。

品物の取引においては商人に誠実さを求め、正直に振舞う商人は預言者や殉教者たち、誠実な友人たちと共に来世において復活するであろうと告げている。[209] 預言者は商売をやりやすくする人々のためにドゥアーを捧げている。[210] また利益を得る際に用いてはいけない手段や、財産を費やすときに注意すべき原則などを明らかにしている。たとえば、不法な手段、窃盗、強奪などによって利益を得ることを禁止している。合法的な取引であっても、不正を防ぐために秤を正しく用いるようにと命じている。資産を費やすことについても中道を行くことを求め、浪費や過度な物惜しみは適切ではないとしている。

預言者は消費者の保護のためにも様々な対策を講じている。たとえば製品の質の検査を行っている。腐ったり壊れた商品を売ること、質の悪いものをよいものに混ぜて売ることを禁止している。かごの下に質の悪いものを隠して売ることを非難している。不良品を、支障があるという事実を隠して売ることは合法ではないとしている。価格を吊り上げることを禁止している。重さはマッカの基準、量はマディーナの基準とした、と伝えられている。[211] 重さを正確に量れるかどうかという点でも検査を行い、市場で使われていた異なる基準や単位を一つに統一している。

預言者はまた雇用者と被雇用者の関係も重視した。イスラーム以前のアラビアでは、労働の対価を支払って仕事を行わせることが一般的に行われており、預言者はそのこと自体を否定するものではなかった。ただ、働く者への過重な労働や、賃金の支払いの遅延、紛失物の代金を働く者の責任ではないのに本人に支払わせるといった不正を禁じた。働く者たちに公正に振舞い、兄弟のように接することを命じた。そしてそうした規範を預言者自ら率先して実践していた。[212] 預言者に次のような言葉がある。「労働者にはその賃金を汗が乾かないうちに支払いなさい」[213] 預言者は最後の審判の日に、自ら三つのタイプの人間の敵となると述べている。その中の一人が人を働かせて賃金を支払わない人である。[214] 預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の時代の国家の歳入は、戦利品の五分の一、人頭税、そしてザカート（喜捨）などからなっていた。非イスラーム教徒との戦いによって得られたあらゆる種類の財産と捕虜は戦利品と呼ばれた。クルアーンでは戦利品という意味のアンファールという言葉が用いられ、クルアーンの戦利品章の最初の節で、戦利品はアッラーと預言者に属するものであると述べられている。その後、戦利品の分配に関する節が啓示された。[215]

「戦争で得たどんな物も、五分の一は、アッラーと使徒そして近親、孤児、貧者、そして旅人に属することを知れ」

戦利品は、戦争捕虜、土地や動産という形の三つに分類される。また戦争捕虜は非ムスリムの成人男性、女性、子供の三つに分けられる。

ムスリムが戦争や平和的な手段で取得した非イスラーム教徒の土地についての取扱についても述べてみたい。預言者はクライザ族、ハイバル族、ワーディ・アル・クラー族から獲得した戦利品を、先に述べた戦利品章第 41 節に従い、

五分の四を兵士たちに、五分の一をこの節で言及されている人々に分配した。ただし、ハイバル族とワーディ・アル＝クラー族の土地は小作人に耕作を続けるという条件で与えている。ナディール族とファダク族の土地は平和的な手段によって獲得したものであり、クルアーンの集合章第6―9節に従ってアッラーの使徒のものであるとされた。預言者は手にした財産を貧しい人々の救済や国家防衛の費用として用いた。預言者の親戚であるズィルクルバ家、ハーシム家、ムッタリブ家が迫害を受けた時代には、彼らには戦利品の五分の一が分配された。また預言者はアッラーのものとされた財産を、カアバ聖殿のために用いたとも、国家の財政に用いたとも伝えられている。[216]

人頭税とはイスラームの国家に住むイスラーム教徒ではない人々に課せられた税である。人頭税は精神的、経済的に問題がなく健康な非イスラーム教徒の成人男子から徴収された。ただし障害者、高齢者、何らかの理由で働くことができない者、そして貧しい人々は人頭税を免除された。彼らは人頭税を納める代わりに、生命や財産、信仰の自由が保証された。預言者は誓約を結んだ非イスラーム教徒にそうした権利を与えていた。ヒジュラ暦九年、西暦六三〇年のタブーク遠征の際に下されたクルアーンの悔悟章第29節では、啓典の民がもしイスラームを受け入れないのなら人頭税を支払うこと、そしてもしそれもまた拒むならば彼らと戦うことになると明言されている。人頭税に関する節が啓示されたことで、その年預言者はアイラ、アズルー、ジャルバー、ドゥマトゥ・アル＝ジャンダル、翌年にはナジュラン、イエメン、バーレーン、マクナー、タイマー、ハジャルの非イスラーム教徒に人頭税を支払うことを条件に誓約を結んでいる。これらのうち、アイラ、アズルフ、ドゥーマトゥ・アル＝ジャンダル及びナジュランの住民はキリスト教徒であり、タイマ、マクナーの住民はユダヤ教徒であり、バーレーン、ハジャル、そしてイエメンの住民の一部はユダヤ教徒やキリスト教徒、一部はゾロアスター教徒であった。

人頭税の額は時代や地域によって異なった。人の頭数に応じて、もしくは全体として課せられていた。預言者はバーレーン、イエメンの人々と、一人当たり年に一ディナール、あるいはそれに相当する民族衣装を支払うという条件で盟約を結んでいる。アイラの人々には全体で年に三百ディナール、ジャルバーとアズルーの人々とは百ディナールの

人頭税を支払う条件で盟約を結んでいる。当時アイラには三百人、ジャルバーとアズルーには百人の人頭税の対象となる男性がいたことが記録されており、それはすなわち一人につき年に一ディナールの税金であったと見なすことができる。ヒジュラ暦一〇年にナジュランの人々との間に結ばれた盟約では、二回に分けて支払う条件で二百着の衣装を差し出すと定められている。預言者の時代には、人頭税は直接対象者から徴収されたり、一族の長や有力者を通して集められることもあった。当時税金を集める専門の人間は存在せず、ザカートを徴収する係の人間がその任に当たっていた。クルアーンではザカートや戦利品の使途について細かい規定があるが、人頭税については詳細に述べられていない。したがって人頭税はザカートのように一定の形で用いなければならないという規定はなく、公共の利益に適い必要とされるところに使うことができた。[217]

国家の歳入の一つであるザカートは、義務とされる行為でありムスリムたちの財産から集められた。金や銀、現金が定められた量に達していると、その四十分の一がザカートとして支払われることになる。動物に対するザカートは、その種類や数によって異なってくる。詳細はイスラーム法学の諸文献に記されている。土地に対するザカートはオシュールと呼ばれる。これは雨水を得ることができる土地の場合は収穫物の十パーセント、水を撒かなければいけない土地の場合は収穫物の五パーセントの割合であった。ザカートはヒジュラ暦二年に義務とされ、それ以来預言者の手によって集められ、必要なところへ分配された。当初は豊かなムスリムたちが自らのザカートを持参し預言者に直接手渡していた。しかしイスラームの教えがアラビア半島の各地に広まると、預言者はザカートを専門に集める係を任命した。ザカートが与えられる対象についてはクルアーンの悔悟章第60節で次のように記されている。「貧しい人々、困窮者、これ（施しの事務）を管理する者、および心が（真理に）傾いてきた者のため、また身代金や負債の救済のため、またアッラーの道のため（に率先して努力する者）、また旅人のためのものである」

社会的・文化的活動

一　社会の構造

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の時代のイスラーム社会は、大別するとイスラーム教徒と非イスラーム教徒から構成されていた。イスラーム教徒の多くはアラブ人であったが、それ以外の民族の集団も存在した。エチオピア人、イラン人、ローマ人などである。同時に、様々な民族の出身である奴隷や解放奴隷もいた。預言者の教えは皮膚の色や言語、民族、文化を問わず、すべての人々に対し開かれたものであった。マッカ時代、そしてマディーナ時代の初期には、預言者からの呼びかけに応えてきたのは部族単位ではなく個人個人であった。しかし部族という存在が支配的であり、身元証明なども部族に帰属する形で行われていた部族社会では、個人をイスラームへと導いていくことはたいへん困難なことであった。部族から離れることは一種の自殺行為であると見なされた。部族から離れてしまった人は盟約を結んで他の部族の保護下に入る必要があった。このような社会状況にあって個々人をイスラームへと導いていくことはきわめて困難なことであり、換言するならば、そのような状況にあった個人がそれでもなおイスラームを受け入れるのには、大きな自己犠牲や勇気を必要とした。預言者はイスラームの教えを受け入れた人々の間に、新たに相互扶助の結びつきを形成させ、アッラーへの信仰と預言者への服従によって成り立つ新しい共同体をつくり出した。そしてすべての信徒は兄弟であると宣言した。民族的な出自が何であれ、階級が何であれ、信徒は皆平等であると告げたのである。新しい共同体は部族を超越すると同時に、それを包括するものでもあった。ある意味では、イスラームの支配下において平等な権利を有する市民権が与えられたのである。しかし新しい共同体において部族の

存在が完全に否定されたわけではなかった。そもそも預言者が目的としたのは、部族という存在を消滅させることではなかった。個人が部族に所属することを妨げるものは何もなかった。さらにヒジュラ暦九年から一〇年にかけての時代には部族単位でこの新しいイスラーム共同体に加わる例が増えてきた。預言者は部族の名のもとにマディーナを訪れる代表団を受け入れた。[218] 部族の長や有力者たちは、その部族という集団を維持したままでマディーナを訪れ、この新しい共同体に加わっていったのである。預言者は部族のこうしたあり方を主に戦役のときに有効に活用した。初めて出会う人と知り合うには、あなたはどの部族に属しているのですかと尋ねればよかった。ただし、所属する部族によって優劣がつけられることはもはやなく、優劣はただアッラーを畏れる心によってのみつけられた。

次に政治的観点から、指導者としての立場を失った人々に対して取られた措置について簡単に触れてみたい。かつて部族の有力者であった人々は、預言者によって同じ部族や地域の知事や役人などに任命された。また彼らは、遠征などのときに各部族と連絡をとる部族の代表者にも任命された。しかし、一部の部族では前任者に代わり新しい人物が役人となった。たとえば、マッカのクライシュ族とターイフのサキーフ族には新たな人物が代表者として任命された。イスラームを受け入れた有力者たちは、たとえ新たな任務が与えられなくとも、預言者によって常に重用された。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の時代には、カースト制度のような生まれによる身分制度に代わって、努力や働き次第によって社会的立場が決められるようになった。人を役人などに登用する際にも、何よりその人の能力が重視された。奴隷も解放奴隷も自由人も、貧しい人々も金持ちも、強い者も弱い者も、女性も男性も、若者も年寄りも信仰する者は皆等しく平等であるとした。このようにして預言者は、アブー・バクル、ウマル、ウスマーン、ハーリド・ビン・ワリードのような、それぞれ異なる生まれや育ちや性格を持つ人々を、一つの共同体にまとめていったのである。

イスラームの登場によって、アラビア半島は一つの勢力のもとにまとまり、血の報復、仇討ちといったものが禁じられるようになった。それまで広く行われていた血の報復は廃止され、罪を犯した者だけがその罪を問われ罰を受ける、

という原則が適用されるようになった。強盗、飲酒、賭博、売買春、窃盗、孤児の財産の略奪、流血、報復、詐欺、憎悪、妬み、うぬぼれ、中傷などといった個人や集団に害を及ぼす行為が禁止された。不和が生じたときの仲裁は占い師に頼むのではなく、預言者や彼が任命した役人が行うようになった。

イスラームを受け入れず、ズィンミーという名称で呼ばれていたユダヤ教徒やキリスト教徒、少数ではあるがサービア教徒やゾロアスター教徒などは人頭税を支払うことにより自由な市民として生活を保障されていた。預言者はイスラーム教徒が多数を占める社会の中で、異教徒たちにも信教の自由を許し、生命と財産を保障したのである。ヒジュラの直後、預言者は多神教徒やユダヤ教徒と盟約を結び、そうしたことを実践する第一歩を踏み出した。このときに至って多様な宗教、多様な文化的集団が共に生きていくことが可能となる社会が成立した。のちにアラブ人の多くがムスリムとなり、ユダヤ教徒が町を追放されたことによって、マディーナはムスリムだけが住む町となった。他の町では様々な宗教を持つ人々が住み続けていたが、住民との間に結ばれた盟約により、非イスラーム教徒であっても自らの宗教を信奉し自らの文化を守りながら、イスラームの共同体の中で暮らしていくことができたのである。[219]預言者は、そうした人々を迫害する人間、彼らの権利を侵害する人間、彼らに過度な任務を与える人間、彼らから略奪する人間は、審判の日に自らの敵となると告げている。[220]盟約によって預言者は彼らの生命、財産、宗教、崇拝行為、礼拝所、そして宗教的地位を保障した。[221]盟約を結んだ相手を殺した人間は天国に行けないとも述べている。[222]

預言者の時代において、マッカ征服までの間にアラビア半島で起きた様々な出来事は、人々の移住を促しマディーナの人口は増え続けた。その頃でもなお人々は遊牧と定住という二つの生業形態に分かれて暮らしていた。だが人々がどのような暮らし方をしていたにせよ、預言者は文化的に統一された共同体の形成を意図していた。そして人々の移住による人口増加に伴い、マディーナは文化的な都市へと発展を遂げていった。

二　教育

アッラーを信仰する社会の形成を目標としていた預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、学問、教育、養成をたいへん重く見ていた。預言者はその数々の活動や言葉を通して、教師が教え生徒が学ぶという教育がいかに重要であるかを示した。ハディースにおいても、預言者の教育を奨励する例がいくつも挙げられ、それと同時に何も学ぼうとしない姿勢を戒める数多くの言葉が存在する。

預言者に最初に下されたクルアーンの言葉は「読め」であった。読むこと、学ぶことは預言者とそのウンマ（イスラーム共同体）へのアッラーの最初の命令だったのである。またクルアーンには、学問を奨励し、学者を讃える章句が多く存在している。クルアーンでは、預言者の布教の任務は教え育てることにあると記されている。イムラーン家章第164節では次のように述べられている。「本当にアッラーは、信者たちに対して豊かに恵みを授けられ、かれらの中から、一人の使徒をあげて、啓示をかれらに読誦させ、かれらを清め、また啓典と英知を教えられた」[223]預言者も自らの使命についてハディースで次のように語っている。「アッラーは私を教師として遣わされた」[224]したがって、人々をよきムスリムになるように教育していくことは彼の預言者としての任務の一つである。クルアーンと預言者の奨めによって、人々の中に読み書きを学びたいという意欲が高まった。そして人々は様々なことを学ぼうと、預言者や教友たちのもとへと集まり始めたのである。

この観点から、預言者の教育に関する活動について触れてみたい。預言者はマッカ時代から、自らに啓示された言葉を書き記し、保存することに重きを置いていた。またクルアーンの章句を書き写して広めることも奨励した。マッカ時代の初期には、ダール・アル＝アルカームが教育の場として使われていた。そこではクルアーンの読み書きが行われ、学んだことが実践された。イスラームを学びたいと思った人々はそこに来たのである。預言者は聖遷の二年前、アカバ地区のモスクでムスリムとなり、マッカを訪れたマディーナの人々の教育にも携わった。また彼らの要求に応じ、クルアーンやイスラームについて教える教師をマディーナへと派遣した。

聖遷の後、マディーナにおける預言者の最初の重要な仕事は、崇拝行為を行う場であり、同時に教育の場ともなるべき預言者モスクをつくることであった。モスクのスッファと呼ばれる場所に滞在していた教友たちは、クルアーンの読み書きを学んでいた。イスラームの教えを学ぶために各地からマディーナを訪れていた人々もそこに滞在していた。その数は一時期四百人にも達していた。預言者はスッファで自ら教えると同時に、クルアーンの読み書きを教える教師も任命した。ウバーダ・ビン・サーミットという名の教友は、そこでクルアーンを教えていた教師の一人である。[225] またムスリムだけではなく、多神教徒の教師もアラビア語の読み書きを教えていた。バドルの戦いでムスリム側の捕虜となり、身代金を支払う財力がなく、かつ文字の読み書きを知っていた者は、十人のムスリムの子供たちに文字を教えるという条件で解放された。ザイド・ビン・サービトはそのようにしてアラビア語の読み書きを学んでいる。そうしたやり方は当時の状況を考えるならたいへん大きな進歩であった。我々はアフマド・ビン・ハンバルが伝えるハディースによって、多神教徒の捕虜がどのようにして文字を教えていたかについてうかがい知ることができる。それによると、ある日生徒の一人が泣きながら父親のもとに戻ってきた。父親がなぜ泣いているのかと尋ねると、子供は教師が自分を殴ったと訴えた。それを聞いた父親は「なんて奴だ。バドルの報復をしているに違いない」[226] と怒った。のちに述べるように、預言者は教育において暴力を振るうことを認めなかった。しかし多神教徒の教師のこの振舞いから、イスラーム以前の慣習として教師が暴力を振るっていたことが読み取れる。ただしこの出来事を預言者が知っていたかどうか、知っていたとすればどのように対処していたか、ということについては伝えられていない。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は預言者モスクに学びに来る人々を、アッラーの道のために奮闘する人々と同じくらい立派であると見なした。[227] しばらくすると、預言者モスクやスッファだけではそうした人々の要請に応えることができなくなり、新たな教育の施設が用いられるようになった。諸文献は預言者の存命中にマディーナでは預言者モスクの他に九つのモスクがつくられていたと伝えている。それらのモスクで預言者は説教を行い、礼拝を捧げると同時に教育活動も行っていたのである。

預言者は教育活動を決められた施設以外でも行っていた。必要となれば場所や時間を選ぶことなく活動した。その一例を紹介しよう。ある旅の途中、預言者はラクダに乗り近づいて来る人が、自分に用があるらしいと推察した。挨拶を交わした後、どこから来てどこへ行くのですかと尋ねた。彼はアッラーの使徒に会いたいのだと答えた。ムハンマドは自らが預言者であることを告げると、男は「信仰とはどういうものですか。私に教えてください」と教えを乞うた。預言者は「アッラー以外に神はなく、ムハンマドがその使徒であることを証言し、礼拝を行い、喜捨を行い、ラマダーン月の断食を行い、アッラーの家を巡礼することです」と答えた。男はそれらを受け入れると言った。そこで思いもかけない出来事が起こった。彼が乗っていたラクダの足がネズミ捕りの罠にかかり、ラクダが転倒し、彼は地面に落ちて死んでしまったのである。預言者は彼を洗い清め、布で覆い、埋葬にもかかわったのであった。[228]

預言者は学ぶことにおいて男女を区別しなかった。男性への教育と同様に女性の教育にも携わり、特別に日を定めて女性の教育に当てた。また女性の教師もいた。ウンム・スライマーン・ビン・ハイサマは預言者の妻のハフサに文字を教えている。預言者の妻たちは若い女性たちの教育に携わっている。彼女たちは家を訪れる女性たちに文字を教え、その女性たちも他の人たちに学んだことを伝えていった。アーイシャやウンム・サラマを筆頭に、預言者の妻たちや他の女性たちも教育に大きな役割を果たしている。アーイシャは積極的に学ぼうとするアンサールの女性たちを賞賛している。[229] このことからも、彼女が女性の教育に大きな関心を抱いていたことがわかる。教友たちも自らの娘たちの教育にかかわった。たとえばサアド・ビン・アブー・ワッカスは自分の娘に文字を教えている。また預言者は教育において奴隷たちも区別することはなかった。ハディースには預言者の次のような言葉が伝えられている。「誰であれ、女の奴隷にも教育を施し、教養を与え、そして彼女を解放し結婚させるなら、その者には二つの報奨があるだろう」[230] 預言者は教育を授ける人たちは、教育を受ける側が学びやすいようなやさしい方法で、忍耐強く教えなければならないと述べている。また教育の場で怒ったり暴力を振るったりしてはいけないとも語っている。「難しくせず、わかりやすい方法で教えなさい。怒りを覚えたときには口を閉ざしなさい」と言い、「怒りを覚えたときには口を閉ざしな

さい」という言葉を三回繰り返している。[231]

教友たちが教育者としての預言者に抱いていたイメージはこの上なく良いものであった。教友ムアーウィヤ・ビン・ハカム・アススレミは次のように語っている。「私はアッラーの使徒よりもよいやり方で教えてくれる教師を知らない。私を非難したり、殴ったり、中傷することもなかった」[232]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の活動においては書くことが重要な位置を占めている。預言者はクルアーンの言葉を書き取らせた。マディーナ条約も文書として書きとめられている。最初の人口調査も記録として残され、すべての契約が文書に書き表された。国家の歳入や歳入の予想、その評価や徴収なども文書で表している。遠征に向かう際には兵士たちを広場に集め名前を記帳させ、軍の統率する数を記録している。

預言者は各家庭の年少者たちに弓の引き方、泳ぎ方、計算方法、治療の仕方、クルアーンの読み方をはじめとする身体的、精神的な各分野について学ぶことを奨励し、ときにそれを命じていた。預言者の時代には、あらゆる世代、すなわち子供も若者も老人も学ぶことができた。イスラームを受け入れた地域には教師が派遣された。それによってマディーナの住民の間で文字の読み書きができる人が増えただけではなく、預言者の存命中そして死後においても、ムスリムが征服した地域では急速に文字が広まっていったのである。

教友たちの中には、ペルシア語、ギリシア語、コプト語、アムハラ語、ヘブライ語、アラム語がわかる人々がいた。預言者はあるときザイド・ビン・サービトに、「あなたはアラム語がわかりますか。私に手紙が来ています」と尋ね、ザイドが「私はわかりません」と答えると、預言者は「では、アラム語を学びなさい」と命じた。そこで彼はヘブライ語とアラム語を学んだのである。[233]

為政者や役人を養成するための特別の学校は存在しなかった。義務であったクルアーンを学ぶ場で学問を修めた者が役人として採用された。

預言者は知識を広めることを奨励し、自分が学んだことを他の人々にも教えることを望んだ。[234] たとえば地方からマ

ディーナに出て来てしばらく滞在しイスラームを学んだ人々に、地元に戻り学んだことを伝えるよう要請した[235]。またアブドゥルカユスの人々にも、マディーナで学んだ信仰と知識を忘れることのないようにと注意を促している[236]。これは預言者が知識と信仰は切り離せないものであると考えていた、という点で注目すべき重要な例である。

預言者はこうした活動を熱心に、かつ細心の注意を払って行い、無知な伝統や慣習の中で生きていた人々を一人ひとり教育し、そうした人々から成る新しいイスラームの社会をつくり上げたのである。この偉大な変化は教育によって可能となったのである。預言者が養成した人々の中から、ハーフィズ（クルアーンをすべて暗記している人）や学者、裁判官、知事、軍の司令官、国家の役人などが育っていった。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の教育は、まぎれもなく時代の要請、すなわち新しい時代を生きる人間を教育する必要性、そして学びやすい教育方法によって実現したものである。現在においても教育の内容や方法は、十年や二十年、いやそれよりも短い間に変化していくものである。にもかかわらず、預言者はどの時代でも通用する普遍的な教育の方法を用いていたことは重要である。預言者が採用していた方法は、次のようにまとめてみることができよう。

読み書きに重きを置く。

教育において暴力を用いてはならない。

教育の内容が実践を伴うものであれば、まず自ら手本を示して教える。

一つの項目を完全に理解することなく次の項目には移らない。預言者はクルアーンの十節を十分理解することなく、

次の十節へと進むことはなかった。[237]

生徒のやる気をなくさせてはいけない。

教える相手の年齢、能力、身につけている知識や文化のレベルを考慮する。

質問を投げかけ、注意をひき、それから答えを与えること。

能力を高めさせていくこと。

社会に示された規範をよりよく理解するために、必要であればその理由を説明すること。

教育の内容はたとえや比喩、ときには身振りや手振りを交え、あるいは絵などを用いてわかりやすく説明すること。

無意味な質問をしりぞけ、積極的に質問することを奨励すること、そして納得のいく答えを与えること。

教友たちが教えることに慣れるよう、預言者自身がいるところでもときには彼らを信頼して教育を任せ、彼らの責任感を育み将来へ備えること。

質問に正しい答えが返ってきたときには、よくできたとほめて励まし、はっきりと評価してあげること。

必要であれば懇切丁寧に何度も繰り返し教えること。

場合によっては先に要約を述べ、後で解説すること。

必要であれば教えたことを書きとめさせること。[238]

三　家族

家族を社会の健全な基盤であると見なしていた預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、結婚を難しい制度でなく容易なものとした。そして今日知られている結婚の形態以外はすべて廃止した。婚姻手続きを経ない男女の関係を禁止し、それに従わない者には罰則が定められた。イスラーム以前の時代は女性は子供を生んで初めて家族の一員として認められたが、イスラームの時代以降はニカーフ（婚姻手続き）によって家族とされた。親や子供の権利、また親が子供を養育する義務などが定められた。イスラームの時代の初期には依然として残っていた養子制度は、マディーナ時代に啓示されたアッラーは養子を真の子供としては認めない[239]という言葉によって廃止された。孤児は生みの父親との関係を重視しなければならない。[240]孤児の世話や養育には大きな国家予算があてがわれた。孤児たちの世話は彼らの親戚たちの責任ともされた。家族が離散することのないようにそのような方策が採られていたのである。また養子であることによる結婚への妨げも取り除かれた。

家族の中で女性は独立した人格を有する存在である。経済的な観点からも女性は独立している。預言者は女性を男性に従属する財産や奴隷のような存在としてではなく、同等の権利を持つ人間であるとした。男性は一家の長であるが、

女性に対して絶対的な支配者や独裁者では決してない。女性の権利を認め、女性に遺産相続権も与えている。夫は妻の権利を侵害することはできない。夫の前で女性は哀れで無力な存在ではない。イスラーム以前には無制限に多くの女性を妻とすることができた。イスラーム以降は家族の基盤は一対一の結婚の上に築かれるようになり、状況に応じて男性は四人まで妻を娶ることが許された。すなわち、複数の女性と結婚することは命令でも義務でもなく、一定の条件のもとで許されているにすぎない。事実、このような結婚を許可しているクルアーンの婦人章第３節では、複数の女性と結婚した場合には妻たちを平等に扱い、公正さを保つことができない場合は、一人の女性とだけ結婚するようにと定められ、一人の女性との結婚が奨励されている。四人までの女性との結婚を認めているイスラームは、そのような結婚の形態を決して勧めているわけではない。[241]婚姻という契約は、一方的に男性の側によってのみ行われるものではなく、男女双方によって行われるものである。家庭は愛情、慈しみ、いたわりの上に築かれるものである。イスラーム以前の時代に行われていた、様々な理由から子供を殺すことが禁じら、ことに女の子を生きたまま埋めて殺してしまう悪習は厳しく禁じられた。クルアーンには、夫婦間、親子や親戚との結びつきを大切にし、家庭を守るための多くの規範が述べられている。

四　イスラームの祝日のお祝い、娯楽、結婚式

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、人々がイスラームの教えに抵触しない楽しみを求めていると考えていた。マディーナへの聖遷後、その地の住民が年に二回の祝日を祝っていることを知った預言者は、「アッラーはあなた方のために、その二つの祝日をより尊いもの、犠牲祭（イード・アル＝アドハー）と断食あけの祭り（イード・アル＝フィトル）へと変えられた」[242]と人々に告げた。

預言者はイスラームの教えに適う形でお祭りを祝うことを許可した。断食明けの祭りや犠牲祭の期間中は、戦いが

行われていない限り武器を持つことを禁じたという伝承も残っている。[243] おそらくそれは、武器による事故を防ぎイード（祭り）の楽しい雰囲気を壊さないようにとの目的で定められていたのであろう。

預言者は、イスラーム以前の時代の多神教徒の迷信に基づいたお祭りを祝うことを禁じていた。たとえばフナインの戦いに向かう途上、一部のムスリムたちは緑の大木を見つけた。多神教徒たちは毎年その木のもとに集まり、武器を木に吊るし、そこで犠牲を捧げ、一日中娯楽に興じていた。彼らは深く考えることなく、その木のもとで多神教徒たちと同じように楽しみたいと預言者に言ったのである。それに対し預言者は「かれらは言った。『ムーサーよ、かれらが持っている神々のような一柱の神を、わたしたちに置いてくれ。』かれは言った。『本当にあなたがたは無知の民である。[244]』というクルアーンの一節を読んだ。そしてそれがイスラーム以前の時代の習慣であることを告げ、「あなた方はイスラーム以前の人々の習慣に従うのですか」と問いかけたのである。[245]

宗教的、社会的な側面を共に持つ断食明けの祭りや犠牲祭は、預言者の存命中は、広場で女性たちも参加して行われるイードの礼拝によって始まった。最初の犠牲祭の礼拝はヒジュラ暦二年のズー・アル＝ヒッジャ月の十日に行われた。[246] 預言者は広場で犠牲を屠り、イードの日が多くの人々によって盛大に祝われることを望んだ。観客の安全を講じることを条件に、剣を用いた民族舞踊が催され、預言者はアーイシャと共に預言者モスクの庭で、エチオピアの舞踊団が踊る剣の舞を観賞した。また預言者自身は見なかったが、アーイシャのそばで女奴隷たちが楽器を鳴らして踊った。預言者が断食あけの祭りで、礼拝に参加する前にナツメヤシを食べていた習慣はスンナとなり、それはイードの日にご馳走を振舞うという習慣を生み出した。祝賀も行われた。初期のムスリムたちが、おそらく預言者が「アッラーよ、ムハンマドとその家族を、そしてウンマをご承認ください」と言ったことにちなみ、「アッラーが私たちとあなた方をご承認してくださいますように」というドゥアーで祝ったと伝えられている。[247]

預言者の時代の娯楽の一つが動物のレースであった。ここで重要なのは、レースに用いた動物は馬やラバ、ラクダといった互いを攻撃しない種類の動物であったことである。預言者はそうした動物のレースを奨励した。訓練されて

いない馬の競走の距離は約千六百メートルで、サニアトゥ・アル＝ワダーからバーニ・ズライクモスクまでであった。競走のために特別に訓練された馬の場合の競走の距離は約十キロであり、ハフヤーとサニアトゥ・アル＝ワダーの間を走った。[248] レースの勝者には賞品が与えられた。レースには老若男女が観客となって参加し、レースの興奮を味わい楽しんだ。

その他にも徒競走が行われていた。戦いの武器である弓矢は平時には重要な娯楽の道具であった。宴やお祭り、軍の遠征や交易のキャラバンの出迎えなどのときに楽器や太鼓を鳴らした。その他の娯楽として水泳、戦いの踊りの披露やその観賞、狩やレスリングなどの競技やその観覧などがあった。

預言者は結婚を広く世の中に知らしめること、またそのときに楽器を演奏したり歌を歌ったりして祝うことを勧めていた。招待客にご馳走を振舞うことも奨励した。預言者は人の生物的・社会的欲求を熟知し、人がいき過ぎることなく、合法の範囲内で娯楽という欲求を満たそうとすることを許していたのである。楽しむことは宗教的に許されないことだ、といった考えを持つ人もいた。だが預言者はそうした人々に、「人々の楽しみを妨げないでほしい。いまは祭りのときだ」[249] と注意した。ただし、預言者が人々に娯楽として許していたものはあくまでハラール（勧められていること）のものであり、その中にハラーム（禁止されていること）のものは決して含まれていなかった。

五　医学と健康

病気は人類の歴史と共に存在し、それを克服するための医学が発達してきた。イスラーム以前の時代のヒジャーズ地方には、ハーリス・ビン・カラダのようなイランで医学を学んだ医者がいたが、アラブ人の間では迷信的で誤った医術が蔓延していた。たとえば、人がヘビに噛まれると、その毒が体中に回らないようにと、その人が眠らないように頭上に鐘を吊るし鳴らしていた。斜視の人がいれば、粉を挽く水車の石を見せて治そうとした。ペストにかからな

いようにするためにロバのように嘶いたり、病人は占い師のもとへ連れて行き、まじないを行わせた。神殿の偶像に犠牲を捧げ、それによって病人の体に入り込んだ悪魔を追い出し、病人を治療しようとした。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はこうした誤った、迷信的な治療法を取り止めさせ、医療に新たな見解を導入した。すべての病気にはそれぞれ固有の治療法があり、その治療法を探求することを推奨した。それに従わない者が治療を行い、患者に被害を与えた場合、治療を行った者は賠償金を支払わなければならないと定めた。病気になったときにはよい専門の医師に相談するようにと言った。伝染病が流行っているときは、感染地区には入らないこと、また感染地区にいる人はそこから出てはいけないこと、そして常に体や手、歯を清めるようにと教えた。預言者は晩年死の床にいるときですら歯を磨くことをおろそかにせず、ミスワーク（歯を磨くための小枝）を使うことを決して欠かさなかった。[250] その他、預言者は食べ物はよく洗い身の回りを清潔にしておくこと、過不足なく飲んだり食べたりすること、食事の前後に手を洗うこと、病気になったときは治療を受けるようにと説いている。また医者に対しては病人に様々な治療法を示し、病状に適した薬を処方したり血を抜くことなどを求めている。

預言者の医学にまつわるハディースには、一般的な医療に関するもの、予防医学に関するもの、治療に用いる薬に関するものの三つがある。それらの多くは、当時のアラビア半島で行われていた誤った医療を正し、医療を発展させる上で重要な役割を果たした。それらはのちに中世の医療をリードしたイスラーム医学の基盤を形成していくものでもあった。アブー・バクル・ラージーやイブン・シーナー、そして彼ら以降に登場した著名な医師たちの出した科学的解釈の根底にあったものは、クルアーンの医学に関する章句であり、預言者のハディースであった。

著名なハディース集には預言者の医学に関する多くの言葉が存在する。その中には『医学の書』という題名で独立した一章となっているものもある。また『預言者の医学』という題名の書物もまとめられている。予防医学、治療法に関するハディースには次のようなものがある。

「誰であれ、医学の知識もないのに医療行為を行ったなら、自らがもたらした被害を賠償しなければならない」[251]

「サアド・ビン・アブー・ワッカースが病気になったとき、預言者は彼を訪問し『ハーリス・ビン・カラダを呼びなさい。彼はよい医者である。そして、あなたを治療させなさい』と言った」

「アッラーは、病苦を与えられた場合、その治療方法も与えられる」[252]

「ある場所でペストが流行していると聞いたときには、その地を訪れてはいけない。自分の住む土地でペストが流行している場合は、その地を離れてはいけない」[253]

「あなた方に何があったというのか。歯が黄色くなっているのに私のそばにやって来る。ミスワークを使用しなさい」[254]

六　文学

a　演説

演説は預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が人々をイスラームに招き、聞き手を説得するために用いた手段である。それは金曜礼拝やイードの日などの定められた日に行われるものから、日時の限定なく行われていた演説もある。後者の例として、戦いを前にした兵士たちへの呼びかけを挙げることができる。また人々に何かを教えようとし、相手から質問されたときなどにも説教や討論が行われた。たとえばナジュランのキリスト教徒たちとの間で行なわれた討論などがそれに当たる。預言者としての活動の初期、サファーの丘でマッカの人々に対し、アッラーの他に神は存在しないと語ったのは、預言者の最初の説教とされている。

預言者の布教という任務においては、演説は目的ではなく手段の一つであった。そのため演説は簡潔な言葉で行われ、文学的表現や重々しい言い回しで言葉を飾ったり、芸術的な趣向が凝らされることはなかった。文学的表現を競い合う大会に参加することはなく、タミーム族によって提案された演説大会も受け入れなかった。[255]

預言者は演説の多くを「アッラーに讃えあれ。アッラーに感謝し、庇護を求めます」、もしくは「アッラーを讃え感

謝します」という言葉で、ときには「アッラーのしもべたちよ、アッラーのご意志に反することを避けるようにしてください」という言葉で始めた。そしてアッラーに感謝を捧げた後で、「人々よ」という呼びかけを行った。預言者が「人々よ」と呼びかけたことは、そのメッセージがムスリムだけにとどまらず、すべての人々を対象としていたことを示している。演説の冒頭には必ず「アッラーに感謝します」という言葉が唱えられた。ただしイードの日の説教ではタクビール（「アッラーフ・アクバル（アッラーは偉大なり）」と唱えること）が最初に行われた。[256]

預言者の演説は、偶像崇拝やあらゆるイスラーム以前の時代の信仰を放棄することを呼びかけ、すべての人々を闇から光へと導き、イスラームへと招くものであった。そしてイスラームの信仰の素晴らしさや人が現世と来世で幸福となる道、ジハード（アッラーの道において奮闘努力すること）の意義などを含んだ内容となっていた。最後の巡礼で行った説教は特に有名である。この説教の内容についてはすでに述べてあるのでここでは触れない。預言者の演説は、物質的、精神的を問わず人が生きていく上での切実な問題にかかわるものであり、個人や集団が抱える問題を解決するためのものであることは明らかである。預言者はいつも演説を短く切り上げ、また人々にもそのように勧めていた。[257]

預言者は演説をするとき、声の出し方や話し方を聞き手の数や態度、話の内容に応じて変更した。聞き手が少なく、特に対話という形の説教の場合、よく座って話をした。声がよく届くように必要に応じて立ち上がり、話す場所や時間、立場によっては説教台や乗り物の上、あるいは高い岩の上から呼びかけた。それは聞き手が預言者をよく見ることができ、また声がよく届くようにという配慮からであった。サファーの丘から人々に呼びかけたときには、そこの一番高い岩の上に立った。マッカの征服の際には、カアバ聖殿の階段にのぼって演説した。別れの説教とミナーでの演説はラクダのあぶみの上で行った。

預言者は必要に応じて身振り手振りを交えて演説した。聞き手の状況を常に考慮し、話すときに一人の人物だけを見つめたり、一点を見つめたりすることはなかった。話を必要以上に長くすることもなかった。下書きした原稿を読むことはなく、いつも即興で話した。それにもかかわらず言葉につまったりすることはなかった。質問はいつでもど

んなときでも受けつけた。モスクや家でも、路上や説教台でも、演説の途中や旅の途中でも、夜中や病気のときにでも、あるいは混雑した人々の中でも質問を受けつけた。なぜなら質問をした人は、そのときまさに学び知識を吸収したいと思っていたからである。質問への答えが啓示の中にない場合には啓示を待った。預言者と話している人が言葉を終える最後まで必ず耳を傾けた。わかりやすく明瞭に話をした。預言者のこうした特性は、子供時代の多くの時間を乳母であるハリーマの一族の中で過ごしたことに由来している。ハリーマの一族であるサアド族は、アラビア半島の中で最も明瞭な言葉を話す部族の一つであった。預言者はそこで少ない言葉で多くの意味を表現する能力を身につけた。彼の簡潔な言葉と話し方を言い表す「ジャワーミウル・カリム（ひと言の中に多くの意味が含まれている）」という表現は、預言者自身によってもその特徴を示す言葉として用いられている。[258] 事実、諸文献には預言者の話をする能力については多くのハディースが存在する。[259]

教友たちの中にも立派な話し手がいた。様々な部族の訪問団が預言者と話をするとき、預言者はときにその相手を教友たちの中の話し手に委ねることがあった。サービト・ビン・カイスはそのような話し手の一人で「預言者の弁士」として知られていた。[260]

b　詩

イスラームが誕生した当時のアラブ社会における詩の重要性と大きな影響力については先に述べたとおりである。詩はイスラームの時代となってからも、ムスリムと多神教徒たちの関係において重要な役割を果たしていた。多神教徒たちは預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）を「気狂い詩人」[261] とやゆしていた。クルアーンはこの言説を否定し、それは多神教徒たちが嘘をついているからだとしている。預言者は詩人ではなかった。クルアーンでは「われはかれ（預言者）に詩を教えなかった。それはかれに相応しくない」[262] と述べられている。多神教徒たちの主張に対し、クルアー

ンは偶像崇拝の時代の詩人や詩、そしてそれらに従う者を次のように非難している。「また詩人たちのことだが、（悪魔に）唆された者たち（だけ）が、かれらに従う。あなたは、かれらがすべての谷間をさ迷い歩くのを見なかったのか。またかれらは、自分の行いもしないことを口にするではないか」[263] ただしその後で、詩人たちの中でも「信仰して善行に勤しむ者、またアッラーを多く唱念し、迫害された後には自らを守る者」[264] は別であるとし、悪事を唆さず、よい目的のためにつくられた詩は、その前の言葉で非難されている詩とは区別している。すなわちクルアーンでは、芸術の一分野としての詩や詩人についてではなく、詩が人を悪い方へ逸脱させるという側面を非難しているのである。そしてクルアーンは詩ではなく、預言者は詩人ではないと指摘している。

多神教徒たちは詩が、イスラームの力を強めていくことを恐れ、詩人たちがムスリムとなるのを妨害した。飲酒や賭博、女性を好んだ著名な詩人アーシャーは、預言者を讃えて詠んだ定型詩を彼に捧げ、ムスリムになる決意をしてヒジュラ暦六年（西暦六二八年）にイエメンからヒジャーズ地方へと移って来た。それをクライシュ族の多神教徒たちは脅威に感じた。この詩人のものの見方を熟知していたアブー・スフィヤーンは、イスラームが飲酒・賭博・姦通を禁じていることを彼に告げ、その訪問をやめさせ帰郷させようと試みた。さらに多神教徒たちは、近々自分たちはムスリムたちを打ち負かすであろうと伝えた。もしすぐに打ち負かすことができなくても一年後に再度試みる予定であると詩人に伝え、彼に百頭のラクダを贈り帰郷させた。しかしアーシャーは、自分の村に着く直前に落馬し命を落としている。[265]

イスラームは音楽や詩のすべてを禁止しているわけではない。それらの中で人々を誤った道へと誘う内容のものを否定しているにすぎない。預言者は人を悪事に誘ったり混乱を引き起こすような詩について、教友たちに警告を与えている。預言者は詩にいくらでも英知を見出すことができる、ということを次のような言葉で表現している。「詩のいくつかは、英知である」[266]

預言者は詩の中の気に入った言葉について語ることがあった。たとえば著名な詩人ラビドゥの言葉について次のよ

うに語っている。「詩人たちの語った言葉の中で最も正しい言葉は、ラビドゥの『アッラー以外のすべては迷信』[267]というものである」

また預言者はムスリムではない詩人たちの詩でも、よい徳によって書かれた詩を教友たちから聞いたときには、その詩の内容が気に入ったと伝えることを忘れなかった。たとえば、イスラームが誕生した時代に生きつつもムスリムにはならなかったウマイヤ・ビン・サルトゥの詩を耳にして、「ウマイヤはもう少しでムスリムとなるところであった」[268]、「ウマイヤの舌は信仰を得ていた。しかし心はクフル（不信仰）から救われることはなかった」[269]と感想を述べている。

預言者とムスリムたちは、マッカ時代にもマディーナ時代にも、多神教徒たちの武力による攻撃に加え言葉による攻撃にもさらされていた。言葉による攻撃の顕著な例として、アブー・スフィヤーン・ビン・ハーリスやアブドゥッラー・ビン・ジバラ、ドゥラール・ビン・ハッターブ、フバイラ・ビン・アブー・ワフブ、アブー・アッザのようなクライシュ族の詩人たち、あるいはウマイヤ・ビン・アブー・アッ＝サルトゥ、アナス・ビン・ズナイムのような他の部族に属する多神教徒の詩人たちによる攻撃を挙げることができる。詩によるイスラームへの攻撃に対し、同じ手段で対抗することが必要だとの確信を抱いた預言者は、ムスリムたちに助けを求めた。この求めにハッサーン・ビン・サービト、カアブ・ビン・マーリク、そしてアブドゥッラー・ビン・ラワハが応じた。イブン・ヒシャームの『預言者の生き方』という著書には、バドルやウフドの戦い、塹壕の戦い、マッカ征服やフナインの戦いについて、多神教徒の詩人、ムスリムの詩人双方によって呼びかけあう形で書かれた詩が紹介されている。[270]

預言者の時代、詩はイスラームを広めるためにも用いられた。ハッサーン・ビン・サービトのイスラーム以前の時代の誤った考え方や部族主義の愚かさを詠んだ詩は、イスラームが広まる上で大きな影響を及ぼした。ハッサーンはそのことに関して強い意志と確信を持って詩を書いた。預言者は詩によってイスラームに大きな貢献をしたハッサーンを高く賞賛している。ユダヤ教徒の詩人カアブ・ビン・アシュラフは、バドルの戦いののちマッカに赴き、その戦いの中で死んでいった多神教徒たちを詩に詠み、クライシュ族のムスリムへの報復心を煽った。それに対しハッサー

ン・ビン・サービトは、カアブ・ビン・アシュラフと彼を家に招く人々について詩を詠んだ。その詩の反響は大きく、その後カアブを家に招く勇気を持つ者は誰もいなくなった。

アブドゥッラー・ビン・ラワーハも自らの詩の芸術性を、預言者とイスラームの教えを守るために、また多神教徒たちを風刺するために用いた。ハッサーン・ビン・サービトとカアブ・ビン・マーリクは、その詩で多神教徒のクライシュ族やその人々の欠点をあげつらい、アブドゥッラー・ビン・ラワーハは彼らの不信仰とイスラームの教えへの執拗までの憎悪を皮肉った。預言者はアブドゥッラーの詩にも賞賛の言葉を送っている。ムスリムたちが小巡礼のためにマッカに入ったとき、アブドゥッラー・ビン・ラワーハが「不信心者たちよ、アッラーの使徒の前から退け」という言葉で始まる詩を詠みだした。ウマルは彼を黙らせようとしたが、預言者はウマルを押しとどめ、「干渉してはいけない、ウマルよ。彼の自由にさせなさい。彼の詠む詩が不信心者たちに及ぼす力は、矢の力よりもずっと強いものなのだ」[271]と言った。

マッカ征服の際、アブドゥッラー・ビン・ジバラやアナス・ビン・ズナイムのような、それまで多神教徒の側にいた詩人たちは、いち早く生命の危険を感じて逃亡した。しかしその後、預言者のもとを訪ねムスリムとなった。それ以後は預言者を褒め称え、彼の赦しを乞い願う詩を書いた。著名な詩人カアブ・ビン・ズハイルはマディーナに預言者を訪ねムスリムとなった。そして『バーナト・スアード』という韻律詩を書いた。彼はこの詩で、スアードと名づけた愛する人への思慕と彼女を思う心の痛みを表現し、その美しさにどれほど恋焦がれているかを詠みあげている。そして預言者について語り、彼の崇高さを称え赦しを求めた。[272]預言者はその詩にたいへん心を動かされ、身につけていた外套を脱いでカアブに贈っている。預言者の聖なる遺品として、今日トプカプ宮殿博物館に保管されている「聖なる外套」がそれである。[273]

七　書くこと

イスラームは、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）に最初に啓示が下されて以来、書くことを大切にしている。クルアーンにおいても、文字を書くための道具である筆や書いたものに誓いを立てている。[274]またクルアーンは紙上や帳簿に記されたものにも重きを置いている。[275][276]

先にも触れたように、預言者の活動においては文字が大きな役割を果たしている。預言者は知識を文字に表すように命じ、また子供たちに読み書きを教えることは父親の義務であるとしている。教友たちに読み書きを学ぶことを奨励した。最初の啓示以来、アッラーから下された言葉は文字にして記録させた。預言者の周りには、啓示された言葉を書きとめ、様々な条約を記録し、手紙を書き、その他文字を使う仕事を受け持つ多くの書記たちがいた。預言者は条約を文字として記録させ、近隣諸国の為政者たちに書簡を送った。このようにして預言者の時代に読み書きのできる人の数は増えていった。預言者の時代以降、イスラーム諸国では急速に文字が発達し普及していった。アラブ人の間では詩の本がよく読まれた。バドルの戦いでムスリムの捕虜となった多神教徒の兵士たちの中で賠償金を支払うだけの資産がなく、読み書きができる男たちは、十人の子供に読み書きを教えることを条件に解放されたとのエピソードはすでに述べたとおりである。当時、石版や木版、骨片、布、皮革、パピルスなどが筆記用具として用いられていた。

預言者はアラビア文字の発達にも寄与している。アラビア文字の互いに似た形を持ついくつかの文字に点が打たれるようになったことについて、一説にはそれはイスラーム以前の時代に始まったと言われているが、預言者の時代に始まったという説もある。実際、預言者は書記の一人であったムアーウィーヤに文字に点をつけることを勧めている。[277]

八　環境

神から与えられたもの（自然）を大切し、他の様々な被造物と共存して生きることを勧めた預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、現代でいう環境保護の観点からも有意義な活動を率先して行い、人々にもそのことを推奨した。それらは今日の環境保護の活動家たちが環境問題解決のために提案している事柄ときわめて類似し、中には一致しているものもある。預言者は自然環境の保護と、人が暮らすのにふさわしい生活環境の創出を目的としたいくつもの活動を行っていた。

　預言者は森林の保護や植樹を奨励した。ハディースには、植物の緑が地球の生態系を保つ上で大きな役割を果たしているとの記述が多々ある。預言者は一部の樹木、ことにナツメヤシには特別の注意を払っていたとされる。自ら植林活動を行い森林づくりを進めるとともに、すでにある森林の保護に努めた。[278]一度に五百本のナツメヤシの木を植えたこともあった。古くからの森林地帯であったズライブ地方に新たな植林を行った。この地域はその後、「森」という意味の「アル＝ガーバ」という名称で呼ばれるようになった。また一定の地域を特別な保護の対象とした。これらはハリーム（あるいはハラーム）地域やヒマー地域、すなわち禁止地区や保護地区と呼ばれた。そこでは木を切ったり草を刈ったり、鳥や動物を狩猟することは禁じられていた。

　預言者は機会あるごとに植樹を奨励し、それに対し現世や来世において報奨が与えられると述べている。そこには預言者の次のような言葉が記されている。「あなたが木の苗を持っているなら、たとえ世界の終焉が始まろうとしていたとしても、時間がある限り必ずそれを植えなさい」、「誰であれ木を植えるなら、その木がもたらす果実の量だけアッラーはその人の善行として記されるだろう」、「誰であれ、乾燥した不毛の地を再生させるならば、それによりアッラーから報奨が与えられるだろう。[280]人々や家畜がそこから益を得るたびに、そこを復活させた人のサダカ（任意の施し）として記録される」、[281]「ムスリムのうち誰かが木を植えれば、その木から生み出され食べられたものはその人のサダカとなる。鳥たちが食べたものもサダカとなる。すなわち皆がそこから食べ、果実が減った分が、その木を植えたムスリムのサダカとされる」。[282]このようにハディース収集の第一人者であるブハーリーは植樹に関するハディースを一冊の

書物としてまとめている。[283]

預言者は自然環境保護区も設けている。マディーナとターイフはその中で最も重要な保護区である。現代の基準でいうならばマディーナの三十二キロ四方が保護区域とされ、動物の殺りくや木々の伐採が禁じられた。[284] ターイフのサキーフ族の代表団がヒジュラ暦九年にマディーナを訪れムスリムとなったとき、預言者は彼らに守るべき事柄を記した文書を与えている。政治や経済、社会的な問題について言及しているこの文書の中で、環境に関することとして、彼らの住む渓谷全体が保護区域であり、自生している木を切ったり動物を殺したりすることは禁じられるとされている。預言者はワッジュ渓谷の保護管理官としてサアド・ビン・アブー・ワッカースを派遣している。[285] ターイ族やジュラシュ族は自分たちの住む土地を保護区域にしてもらえないかと要請し、のちに預言者はそれを承認している。

このように預言者は、現代になってようやくその価値が認められ、必要性が認識されるようになった国立公園や鳥獣保護区、緑化区域といった環境保全活動を今から千四百年前に始めていたのである。預言者のこうした活動の結果、多くのアラビア半島の自然環境が保護されてきた。アブー・バクルやウマルもまた預言者が定めた保護区域を守るために力を尽している。

預言者は命あるすべてのものを愛した。その中でも馬、ラクダ、羊、山羊、さらにネコやハトに対しては特別な関心を抱いていた。[286] 機会をとらえては、人は動物の生存権を尊重しなければいけないと人々に説いた。最も多忙なときですら動物の保護や世話に携わっていた。マッカ征服を目指して進軍しているとき、道端に子犬に乳を与えている犬がいた。親の犬は子犬を守るために兵士たちに向かって吠え立てた。そのとき預言者は、兵士たちが犬の親子に危害を加えることのないように、教友のジュアイル・ビン・スラーカを犬の前に立たせ守らせたのであった。

フナインの戦いの後、スラーカ・ビン・マーリクがジラーナに滞在中の預言者のもとを訪ねてきた。スラーカが自分のラクダのために水飲み場に水を満たしておいたところ、その周囲に放牧されていた持ち主のいないラクダが水を飲んだ。彼はそのことについて自分に報奨があるかどうかと預言者に聞いてきた。預言者は喉の渇いた生き物に水を

与えることにはアッラーの報奨があると教えた。[287]

多くのハディースで、動物たちによく振舞うこと、いたわりや慈しみの心を持って接すること、彼らに苦痛を与えないこと、過重な荷物を負わせないこと、十分な世話をすること、その存在をないがしろにしないこと、その生来の特性に適った形で使役することなどが命じられている。

動物の子供たちについても配慮がなされていた。たとえば山羊の乳を搾っていた人に、預言者は子山羊のために十分な乳を残しておくようにと命じている。また鳥の巣を壊すことやそこから卵やヒナを取ることも禁じた。[288] 楽しむためだけに行う猟も好ましくないとしている。

預言者は多くの広い部屋と広い庭を持つ家をつくることを奨励していた。しかし家の高さを二階以上にすることは許可しなかった。高い建物をつくっている現場があれば、その工事を中止させたとも伝えられている。また通路を狭くすることもよしとしなかった。預言者は戦いのときの天幕の張り方に至るまで秩序を保ち均衡のとれたものを建てることを好んだ。[289]

預言者と社会の様々な階層の人々

一　子供たち

次世代を守り育てることは、イスラームの根本的な目標の一つである。次世代を守ることは、子供を持ち育てること、すなわち誕生から結婚までの間子供たちと関わっていくことによって可能となる。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は人々に結婚し、子供を生み、そして健全に育て上げることを奨励している。子供を見守り育て上げることにおいても、他の家族のメンバーに対するのと同様に、家族の中の年長者に責任があると指摘している。このことについて次のような預言者のよく知られている言葉がある。「あなた方は羊飼いであり、自分が率いる群れに対して責任を負っている」[290]子供たちの世話を熱心に焼く女性たちを誉め、彼女たちに子供に対して愛情と慈しみの心を持って接するよう説いている。[291]

子供たちへ深い愛情と慈しみの心を抱いていた預言者は、子供たちと真剣に向き合い、子供たちの目線に立ち、彼らの声に耳を傾けるように求めている。預言者は子供たちを胸に抱き、口づけをし、優しく髪を撫でた。ある日預言者が孫のハサンのほほに口づけをしてかわいがっていたとき、そばにいたアクラ・ビン・ハービスが「あなたは子供たちに口づけをするのですか。私には十人の子供がいますが、誰にも口づけをしたことはありません」と言った。預言者はそれを聞いて「慈しみの心を持たない者には慈しみを持った振舞いはなされない」と彼に答えた。また、「あなたは子供に口づけをするのですか。私たちはしません」と言った者に、「アッラーがあなたの心から慈しみの心を取り除いてしまったのであれば、私に何ができよう」[292]と答えている。

預言者は子供たちを大切にし、彼らの望みを叶えることにも重きを置いていた。礼拝を行うときや説教を行うときですら、そうした態度を変えることはなかった。諸文献は、預言者が孫を抱いて礼拝に来て、子供を下ろして礼拝を始めサジュダの姿勢をとったとき、子供が背中の上に乗ったため子供がそこから降りるまでサジュダを長く行ったことや、自分の娘ザイナブの娘ウマーマを肩に乗せて礼拝していたこと[293]などを伝えている。預言者は子供たちと親密にし、挨拶を交わし[294]近況を尋ねていた。ときには子供や孫たちを肩に乗せていた。子供たちの名前をつけ、彼らと遊び、楽しませていた。子供たちも預言者をしたっていた。預言者が旅から戻ったときには、子供たちが必ず彼を迎えに出た。[295] 聖遷のときアブー・アイユーブ・アル＝アンサーリの家に客となった際、ナッジャール家の幼い娘たちが歌を歌っていた。[296] 預言者は彼らに「君たちは私のことを愛しているかね」と尋ねると、子供たちは「はい、アッラーの使徒よ」と答えた。そして預言者は「アッラーに誓って言うが、私も君たちを愛しているよ」と同じ言葉を三回繰り返したのであった。[297]

預言者の子供たちへの愛情はマディーナ以外でもよく知られ、ウムラトゥル・カダー（ヒジュラ暦七年に行った、その前年にできなかった代わりの巡礼）のためにマッカに入ったときにはハーシム家の子供たちが預言者を出迎え、喜びのあまり預言者の周りを走り回った。[298]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の時代、子供たちは社会の構成員の一人であった。イードの礼拝には、女性と共に子供たちも参加した。[299] また預言者は戦いの際に女性や子供を殺すことのないようにと兵士たちに厳命していた。[300] 子供たちが経済的に豊かになること、父親の資産があるのに周囲の人の世話になるようなことをしてはならないと説いた。預言者は、財産のすべてをアッラーの道のために捧げようとしたサアド・ビン・マーリキの行為をよしとせず、「子供たちのために何を残しましたか」と彼に尋ねた。そしてサアドが何も残していないことを知るや、財産の九割を子供たちに残すようにと命じた。サアドはアッラーに財産の三分の一を捧げると主張したが、預言者はそれでもまだ多すぎると伝えたのである。[301] また財産のすべてをある遠征のために捧げたアブー・バクルにも、「子供たちに何

を残しましたか」と尋ねており、預言者がいかに子供たちを大事にしていたかがよくわかる[302]

預言者は礼拝をしていたとき、子供たちの泣き声を耳にし、子供たちが泣きやむよう、そして母親の気持ちが辛くならないよう、クルアーンの短い章を読んで礼拝を早く切り上げた。礼拝でクルアーンの長い章を読むつもりであったときですら、子供たちの泣き声を耳にするやそれを断念した。[303] こうしたエピソードは預言者の子供たちや母親に対するいたわりを表すものであると同時に、当時、モスクに女性たちが小さな子どもを連れてやって来ていたことをよく物語っている。

預言者は子供たちを虐待すること、戦場のような場所に連れて行くことや、彼らを無理やり働かせるといったようなことはいっさい行わなかった。バドルの戦いに赴いたときは、マディーナ郊外で軍隊を止めさせ、何人かの教友たちはまだ戦いに赴くには十分な年齢ではないとしてマディーナへ戻らせている。戻された子供たちの中には、当時十三歳であったアブドゥッラー・ビン・ウマルとベラー・ビン・アジーズ、そしてザイド・ビン・サービトが含まれていた。十六歳のウマイル・ビン・アブー・ワッカースも戻されるところであったが、どうしても参加したいと泣き叫んだために特別に同行が許された。ウフドの戦いに赴いたときにも、シャイハインと呼ばれる場所で軍を止め、二十人近い教友たちを年が幼いという理由でマディーナへ戻している。塹壕の戦いのときには、成人に達していない子供たちには塹壕堀に参加することだけを認め、敵軍の包囲が始まると彼らを城壁の中の家族のもとに帰した。この戦いにおける敵の包囲軍の数はムスリム側の三倍に達しており、一人でも多くの兵士を必要としている状況にあった。この戦いで戦列に加わったザイド・ビン・サービトやアブドゥッラー・ビン・ウマルが十五歳であったことを考えるなら、[304] この年齢に達していない子供たちは家族のもとへ帰されたと推測することができる。

ヒジュラ暦九年にマディーナを訪れたタミン族の一団の中に、当時まだ子供であったアムル・ビン・アフタムがいた。一行はアムルをそこに残し荷物の番をさせた。預言者はその一団の人々に、「全員私の贈り物を受け取ったかどうか」と尋ねた。彼らは荷物の番をしている子供がいることを伝えた。預言者がその子を連れてくるようにと求めたところ、

彼らはその子は生まれに問題があると言った。しかし預言者は「そんなことはかまわない。彼も代表団の一員としてここに来たのであり、贈り物を受け取る権利がある」と言って、アムルに贈り物を与えたのであった。[305]

子供たちに関し預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）がもたらした最大の変化は、女の子を男の子と同等の地位に置いたことであった。イスラームが生まれた当時、アラブ人の女の子に対する振舞いは社会問題にまでなっていた。イスラーム以前の時代、女の子は家庭の厄介者と見なされ、社会的には恥ずべき存在とさえされていた。さらには経済的・社会的不安から子供たちが殺害されることも少なくなかった。クルアーンはイスラーム以前の時代の人々の女の子に対する態度を批判し、女の子の殺害を厳しく非難し、禁じている。[302] 預言者も女の子に特別の価値を与えていた。女の子を育てている人を賞賛し、[307] 女の子を侮蔑したり悪意を持って接することなどを禁じたのである。[308]

イスラーム以前の時代、女の子を生きながら埋めて殺し、のちにムスリムとなった人々は預言者のもとを訪ね、かつて自分たちはどのようにして子供を埋めたか告白した。預言者はその話に心を揺さぶられ涙を流した。あるとき、一人の男が預言者のもとを訪ね、自分が自分の子供に手をかけてしまった詳細を語った。「アッラーの使徒よ、私たちはイスラーム以前の時代、偶像を崇拝し女の子を殺してしまうような民族でした。私にも一人の女の子が生まれました。その子が話ができるようになって、私の声に応えるその子の声を聞くのが喜びでした。そしてある日、その子を呼び、穴のところへ連れて行ったのです。そして井戸のところに来たのです。子供は何も知らずにいました。そして私は子供の手をつかみ穴の中に投げ入れました。私が最後に耳にした子供の声は穴の中に響く『お父さん、お父さん』という声でした」

男の話に預言者は涙を流し、それを手のひらでぬぐった。その場にいた一人の男が「アッラーの使徒よ、彼はあなたを悲しませたのですか」と尋ねたところ、預言者は「気にすることはない。彼は自らが犯した罪と悔恨を語っているのだ」と答え、もう一度同じ話をさせた。男が再び話し終えると、預言者はひげが濡れるほど涙を流し、「アッラーはイスラーム以前の時代の悪しき習慣をなくされた。あなたもこれからは善いことを行うように努力しなさい」と男

を慰めた[309]

預言者は戦争捕虜の中にいる子供たちのことをも憂慮し、成人に達していないクライザ族の捕虜の子供たちを母親のそばから引き離さないように命じている[310]

預言者のスンナ（慣行）を注意深く見ていくと、子供になすべき親の義務について次のように要約することができる。きちんとした名前を与えること、良い教育を受けさせること、結婚させること、そして子供たちの間に区別をつけず同等に接すること。預言者は子供の名前を注意深くつけるべきであると教えている。「あなた方は審判の日、自分の名前、そして父の名前によって呼びかけられる。良い名前をつけなさい」[311] 預言者は偶像崇拝にまつわる名前、イスラームの教えにふさわしくない名前は変えるように勧めていた。自らそのような名前を持つ人の名前を変えてやることもあった。アッラー以外の何者かにしもべとして仕えることを意味するような名前をつけることをハラーム（禁止されていること）とし、そのような名前は変えさせていた。アッラーの特徴を示す意味を持つ名前を「アブドゥ（しもべ）」という言葉を用いずに使うことについて、ここで簡単に触れておきたい。アッラーの美名が、「しもべ」という言葉なしに使われることは、外見上のことだけであったとしても、唯一神信仰に反するものであり、適切なものとはされなかった。ただし、アブドゥルカディル、アブドゥルラウフという名前が一般に広く用いられているように、カディル、ラウフといった名前もアラブ人ではないムスリムたち、ことにトルコ人の間ではよく用いられている。これはおそらく、トルコ語でアブドゥルカディル、アブドゥルラウフといった名前の発音が困難であったことに起因するものであろう。しかし、こうした名前がこのような形で使われることが唯一神信仰に反するものであると言い切ることはできない。子供に名前をつけるとき基本的に注意しなければならないことは、その名前が唯一神信仰に反する意味を持っていないこと、そして誹謗中傷の対象となるような名前を選ばないことである。イスラームの信仰や道徳に反するものでない限り、アラブ人ではない人々の名前が用いられても問題はなく、名前を変えることなく現代まで使い続けられている[312]

預言者は子供が親から与えられるものとして、良い名前と共に、良い教育を挙げている。教育やしつけは親が子供に残せる最も価値ある遺産であるとしている[313]。親は子供を育て次の世代へとバトンをつなぐ責務を負っている。それは子供に家庭を持つのに十分な礎を築いてやることによって果たされる。いくつかのハディースには、子供たちが結婚していないがために不法な姦淫などの罪を犯すことがないよう、親は彼らを結婚に導いてやらなければならないとの預言者の言葉が伝えられている。

預言者は、親が子供たちに平等に接することは彼らの義務であり、それは子供たちにとって当然の権利であることを明らかにしている[314]。子供たちは、性別や年齢、実子か義理の子であるかを問わず平等である。預言者は「アッラーを畏れなさい。そして子供たちに対し平等に接しなさい」[315]と命じている。そして子供たちへの財産の分配は平等に行わなければならないとしている[316]。したがって親は、贈り物や遺産といった物質的なものに限らず、愛情や慈しみといった精神的な事柄においても、子供たちに平等に接する必要がある。そうでなければ、兄弟同士が互いに嫉妬し、悪感情を抱くようになるからである[317]。

二　若者たち

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はイスラームを広めるに当たって、新しいものを受け入れ、理想を追求することができる活力のある若者たちから大きな支援を受けた。預言者は布教を始めた当初から、女性、男性、青年、老人、金持ち、貧しい人々、奴隷、自由人といった区別をすることなくすべての人々をイスラームへと招いた。事実、最初の頃入信したイスラーム教徒を調べてみると、そこに社会のあらゆる階層の人々が含まれていたことがわかる。しかし、その中の多くが若者であったこともよく知られているのである。

マッカの発言力を持った有力な一族のメンバーであった若者たちは、イスラームに対し老人や奴隷、貧しい人々、

孤独で無力な人たちが感じていた共感や関心よりもなお強い愛着を感じていた。イスラームを広める上で、預言者を支え助けたのは若者たちであった。最も初期にイスラーム教徒になった人々の中で五十歳前後と三十五歳前後がそれぞれで数人いたが、残りの人々はすべて三十歳以下の若者たちであった。たとえばアリーは十歳、ザイド・ビン・ハーリサは十五歳、アブドゥッラー・ビン・マスードとズバイル・ビン・アッワムは十六歳、タルハー・ビン・ウバイドゥッラー、アブドゥルラフマン・ビン・アウフ、アルカム・ビン・アブー・アル＝アルカム、サアド・ビン・アブー・ワッカスは十七歳、ムスアブ・ビン・ウマイルは十八歳から二十歳、アブドゥッラー・ビン・ウマルは十八歳、ジャーファル・ビン・アブー・ターリブは二十二歳、ウスマーン・ビン・フワリス、ウスマーン・ビン・アッファン、アブー・ウバイダ、そしてのちにカリフとなるウマルは二十五歳から三十一歳の間にイスラームに入信している。彼らの他にも多くの人々が若いときにイスラームを受け入れている。これらの人々の中から、イスラームのマッカ時代、マディーナ時代、そして預言者の死後の時代に重要な役割を果たした人々が育っていった。彼らの中から、のちの国家の長、知事、裁判長、教師、そして諸国を征服した司令官となった人々が現れたのである。

こういった若者たちの活躍の一例として、十七歳でイスラームを受け入れ、のちに預言者に自らの家を提供したアルカーム・ビン・アブルアルカームのイスラーム初期の時代に果たした役割について触れてみたい。預言者として活動を始めた最初の数年間、預言者がアルカームの家で行っていた活動は、イスラームの布教において画期的なものであったことが知られている。その家は布教活動を進めていく上で便利なところに立地していた。カアバのハラーム地区（聖域）に含まれており、サファーの丘の裾野に位置していた。巡礼に訪れた人々が、他人の目を気にすることなくその家で預言者と会うことができたのである。さらに、マッカのイスラーム教徒たちも容易にアルカームの家を訪れることができた。預言者はこの家で教友たちにイスラームを教える一方で、他の人々をイスラームへと導いていた。この家での活動の結果、多くの人々がイスラームに入信している。ウマルはこの家でムスリムとなった最後の人である。アルカームの家がイスラーム布教の拠点として利用されることにより、初期のムスリムたちの入信の土台が築かれた

のである。事実、歴史家たちは、初期の教友たちの入信について、「アッラーの使徒がアルカームの家に来る前、もしくは後」「アルカームの家にいたとき」といった表現で記録している。

イスラームの初期において多大な貢献をした若者の一人がアリーであった。アリーの青年時代の活躍はよく知られている。アリーの名を高めたのはその青年時代、二十歳から三十歳までの間の様々な活躍である。

若者たちはマッカ時代、イスラームがアラビア半島の外に紹介されていったことについても、大きな役割を果たしている。エチオピアに二十五歳のとき移住したジャファル・ビン・アブー・ターリブが、イスラーム擁護のためにエチオピアの支配者やキリスト教の指導者、さらに宮殿の役人たちの前で行った演説は、文学的にも内容的にも、歴史書の一頁を飾るほどのものであった[318]。

アルカームの家で入信したムサアブ・ビン・ウマイルは、第一のアカバの誓いののち、預言者によって教師としてマディーナに派遣された。当時二十五歳の若者であったムサアブの活動によって、多くのマディーナの住民がイスラームに入信している。何よりも重要なこととして、彼はウサイド・ビン・フダイルやサアド・ビン・ムアズのような有力な一族の長を入信させている。著名な歴史家であるイブヌール・アシールは、ムサアブのこのようなめざましい活躍はイスラームが勢力を拡大していく上で大きな役割を果たしたと指摘している[319]。

若者たちの活躍はマディーナ時代においても注目すべきものであった。ここではザイド・ビン・サービトの活躍について触れてみたい。預言者が近隣諸国の支配者やアラブの諸部族に送った書簡の多くは、ザイドによって書かれたものである。さらにザイドは、そうした人々からの返事の手紙を訳すために、預言者の命によってヘブライ語とアラム語を学んでいる。遺産分配にも能力を発揮したことから、戦利品の分配も彼の役目とされた。啓示を書き記す役割の書記の一人であったザイドは、預言者が亡くなったとき二十一歳前後であった。ザイドはアブー・バクルの時代、クルアーンの編纂の役目を与えられ、それを見事にやり終えた[320]。このような重要な役割を二十二歳前後の若者が受け持っていたということは、イスラームの初期の時代の若者たちがどれほど大きな役割を果たしていたかを明白に示す

ものである。
預言者の時代の以下のような出来事が記録されている。預言者はムアズ・ビン・ジャバルをイスラーム法官及び教師としてジャナドに派遣した際、彼に訴えが持ち込まれたときに何を基準として裁定を下すのかと尋ねた。ムアズは「アッラーの書に基づいて判断します」と答えた。預言者が「そこで答えが見つからない場合はどうしますか」とさらに尋ねると、ムアズは「アッラーの使徒のスンナ（慣行）に従って判断します」と答えた。預言者が「もし、アッラーの使徒のスンナでも答えが見つからないときはどうしますか」と続けて尋ねると、ムアズは「私の見解に基づいて判断します」と答えた。預言者はそのすべての答えに満足した。[321] ムアズが預言者によってイエメンに派遣されたときには、彼はかなり歳をとっていたと思われているが、実際にはムアズはそのときまだ二十六、七歳であった。
預言者に下された啓示を書き記す書記は、主に若者たちの中から選ばれた。また教師も若者たちの中から任命された。預言者は決して彼らを酷使するようなことはなく、彼らが危機に陥ることがないよう常に気を配っていた。彼らの熱意を悪用するようなこともなかった。そして年老いた教友たちから成っていた軍の司令官にも若者を抜てきした。軍の旗も多くの場合彼らに持たせていた。たとえばタブークの戦いでは旗をザイド・ビン・サービトに、バドルの戦いではアリーに旗を持たせていた。当時十八歳であったウサーマ・ビン・ザイドは、シリアに派遣された軍の司令官となった。
預言者自身、人々の模範となるような青年時代を送り、二十五歳の頃にはマッカで「信頼できる人」として知られていた。預言者が周囲の人々や友人に示した親しさや友情、彼らに敬意を表したその正しい振舞いは若者たちの模範となった。
預言者は二十歳のとき、マッカの治安を守る人々の一員となり、若い頃からマッカの治安維持に貢献した。そして社会の中で起きる様々な衝突を未然に防ぐことに力を尽くした。今日の若者たちも彼を模範とし、社会の中で生起する対立を未然に防ぎ、決してそれに加担してはならない。年長者は社会に混乱を引き起こそうとして若者たちを扇動

してはならない。

預言者は、最後の審判の日に現世の行いによって報われる人々として、真心をこめてアッラーへの崇拝行為を行う若者を第一に挙げている。[322] したがって若者たちは、イスラームの教えの実践が若者時代に最良の形で行われることを肝に銘ずるべきである。

若者という言葉は男性だけを指すものではない。一つの集団において、若者の半分は女性が占めている。イスラームを最初に受け入れた人々の間では、若い女性たちが重要な役割を担っていた。預言者がそうした女性たちに特別の注意を払っていたことはよく知られている。

預言者がイスラームの同胞たちを尊重していたことを若者たちは模範とすべきである。そしてお互いの考え方に敬意を払うべきである。また若者たちは預言者が相談や協議を尊んでいたことからも学ぶ必要がある。若者たちは他の人々、とりわけ年長者の経験や知恵を有効に生かすべきである。ムハンマドは預言者であるにもかかわらず、他の人々と話し合いの場を持ち、自らをその場の一員として位置づけていた。さらには、話し合いの場を持つことはアッラーによって命じられたことでもある。それは一人の人間がすべてを理解することは不可能だからである。人にはそれぞれ得意な分野がある。他の人々はそれぞれの知識や経験を生かすことができるのである。

預言者が健康を保つことに重きを置いていたこともまた、若者たちにとって模範となった。預言者は人々が健康を保つこと、特に病気の予防の大切さを理解するまで幾度となく説いていた。[323] 人は一般に若いとき、健康を害う多くの悪い習慣、たとえば喫煙、飲酒、賭博などに染まってしまう。若い人々はそうした悪い習慣に注意を払うべきである。また年長者もそうした習慣で若者たちの悪い例になるべきではない。いつも家に酔っ払って帰ってくる父親は、子供を酒の罠から救い出すことはできない。

預言者は家族の健全なあり方にも重きを置いていた。家族のそれぞれの役割を詳細に示した多くの言葉を残している。またそうした言葉を幸福でやすらぎに満ちた家庭を実現するために自らが実践していた。家の中で年長者は、若

い人たちのために模範的な生き方を示すべきである。そしてたとえ家族の中で不和があったとしても、そのことが若者や子供たちの成長に悪い影響を及ぼさないようにしなくてはならない。

預言者は若者たちに、青年時代が人の一生においていかに大事な時期であるかを繰り返し強調した。青年時代を有意義に過ごさなければ、人はその一生に悔いを残すこととなる。これは、若者がよい教育を受け人生に備えることの重要性と同様に、アッラーに対する義務や責任を果たすといった観点からも大きな意味を持つ。よく「青春を生きる」といった表現が用いられることがある。しかし青春を生きるとは、単に欲望を満足させることだけに時を費やすことではない。青年時代は責任を持って崇拝行為を始めるときである。そして死はいつ訪れるかはわからないのである。

若者の教育は年長者の責任である。年長者は、彼らがつくるあたたかく幸福な家庭で、預言者が自らの家族に示した振舞いを若者たちに伝え、それを彼らが実践できるような環境をつくり上げなければならない[324]。

三　高齢者

世界が若者だけのものではなく高齢者のものでもあることは言うまでもない。しかし現代の思想家が述べているように、人々が道徳や宗教の価値観から遠ざかり、ひとえに合理的な動機づけのみを重視する今日の「文明的な考え方」は、世界を若者の求める快適さを価値の基準にしたものへと変化させている[325]。高齢者は急速に価値観の変化が進むこの現代において、自分たちの青年時代とはまったく異なった生活環境と価値観に自らを合わせる必要に迫られている。少年時代に受けた教育がその妨げになることもある。このような観点から考えるなら、様々な分野で行われている現代の変革は、高齢者を取り巻く状況や彼ら自身のニーズを十分に考慮に入れたものでなければならない。

すべてにおいて中庸をよしとする預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、年少者を保護し、彼らに慈しみの心を持って接するのと同様に、高齢者をないがしろにすることは決してなかった。年上の人には敬意を、年下の者には

愛情を、という言葉を繰り返し述べ、そのどちらも欠かすことはできないと告げている。そのことについて次のような言葉がある。「年下の者に慈しみの心を、年配者に敬意をもって接しない人は、私たちの仲間ではない」[326]子供たちには愛情が、高齢者には敬意が必要であり、双方とも世話を必要としている人たちである。この言葉によって預言者は若い人々に年下の者と年上の人にいかに接するかを教えている。それができない人々に対してはそうした態度を厳しく正した。

今日の核家族化や夫婦の別居は、高齢者を若い世代から引き離すという事態を招いている。最も自然なのは、人間がその子供たちと共に、自ら生まれ育った環境の中で、親しい人々と交わりながら人生の最後の日々を過ごすことである。慣れ親しんだ環境は彼らを快活にさせ、生きる活力を与える。高齢者にとって本来、老人ホームなどは決して快適な環境であるはずがない。しかし一方で、世話をする人のいない、行き場所のない子供たちのために保護施設が必要であるように、高齢者のための施設も必要であり、それは見過ごされるべき問題ではない。とはいえ本来、高齢者の幸せは人生の最後の日々を自らの家で家族と共に過ごすことにある。高齢者の立場から見てそれが本来のあるべき形であるように、家族にとってもそれは意味のあることである。なぜなら若者もやがては老いていく運命にあるからである。次の時代を生きる若者たちは、年長者に敬意を払わなければならないことを、自らの家庭の中で両親が年長者に敬意を払っているのを見て学んでいくからである。

預言者の言葉や行いにも高齢者への敬意が見られる。預言者は若者たちに常々、高齢者に敬意を払うように言いきかせていた。次のような言葉がある。「若者が年配者に敬意を持って接すれば、アッラーもその若者が年老いたとき、彼の世話をするような人をおつくりになるであろう」[327]

マッカ征服のときアブー・バクルは、百歳近かった父親アブー・クハーファを預言者のもとへと連れてきた。預言者は、「年老いたあなたの父をここまで連れてきて疲れさせるようなことをしなければよかったのに。私が彼を訪問すればよかったのです」と話すと、それに対しアブー・バクルは「父があなたのおそばに来ることがより適当でしょう」

と答えた。[328]預言者のアブー・クハーファに対するこの細やかな心遣いは、アブー・バクルに対する思いやりでもあると同時に、高齢者に彼が示していた敬意の表れと見ることができる。

高齢者について触れたこの機会に親への義務についても簡単に言及しておきたい。子供が親に対し権利を持っているように、当然親も子供に対し権利を持っている。[329]クルアーンでは、アッラーにしもべとして仕えることに次いで、親に対し敬意を払うこと、親によく振舞うことが義務として述べられている。なぜなら両親がいなければ子供はこの世に存在せず、アッラーの恵みに次いで人が健全に育っていくための最も重要な援助を彼らが行ったからである。クルアーンでは、子供が親に対してほんのわずかでも失礼な態度をとったり、内心の不快感を表すような言葉を吐いたりすることを禁じ、[330]親を軽んじることのないように、また彼らに良い言葉をかけるようにと命じているのである。それに続くクルアーンの節では、「そして敬愛の情を込め、両親に対し謙虚に翼を低く垂れ（優しくし）て、『主よ、幼少の頃、わたしを愛育してくれたように、二人の上に御慈悲を御授け下さい。』と（祈りを）言うがいい」[331]と述べられている。そのことは親と子の精神的な絆の大切さを示しているのである。預言者は良い行いについて、時間どおりに行う礼拝の次に親への良い態度を挙げ、[332]逆に大きな罪として、アッラー以外の神の存在を認めることに次いで、親に反抗的であることを挙げている。[333]また親の死後、その記憶を脳裏にとどめる続けるために、親の友人との関係を維持していかなければならないと教えている。[334]

四　女性

教育、家族、家庭生活といったテーマの中で、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が女性たちに対しどのように振舞っていたかについて部分的ではあるが述べてきた。ここでは、そこでは触れなかったことについて述べてみたい。ただ、一般的な意味でイスラームやその歴史における女性の地位についてここで言及することはしない。この項目では、

預言者の時代、そして預言者の活動における女性の立場について触れてみたい。

まず、イスラームが誕生した当時の女性たちの奉仕について簡単に述べてみたい。彼女たちのイスラームへの奉仕はイスラームが誕生した年ではなく、月でもなく、誕生したその日にすでに始まっていた。預言者が最初の啓示を受けたとき、妻ハディージャがその啓示を肯定的、そして冷静に受け止めたことはここであえて繰り返し述べる必要はないであろう。さらに、最初にイスラームに入信したのも女性であった。預言者の娘ファーティマとアブー・バクルの娘アーイシャがマッカ時代に入信したことの意味ははかり知れないほど大きい。アンマール・ビン・ヤーシルの母スマイヤは拷問を受けて殉教した最初のムスリムである。当時女性の法的保護は行われていなかった時代であり、スマイヤが殺害されたことに対し誰も異議を申し立てることすらできなかった。

イスラームの初期の時代、多神教徒の家族から離れ夫よりも先にイスラームに入信した女性たちがいた。ウマルの入信に際しては、妹のファーティマが熱心な信者であったことが大きくかかわっている。マッカ時代、預言者の叔母たちが彼の活動の大きな支えとなっている。叔母の娘にあたるアルワ・ビントゥ・クライズ、アブー・ターリブの妻ファーティマ・ビントゥ・アサド、アッバースの妻ウンム・アル＝ファドゥルは、ことあるごとに預言者に援助や支援を与え、そのために生涯敬意を込めて思い起こしていた女性たちである。

エチオピアへの移住者の四人に一人は女性の教友たちであった。同様に、マディーナへの移住においても、女性たちの勇気と不屈の精神を目にすることができる。ウンム・サラマは夫と離れ一人でマディーナに移住した。これは女性の勇気ある行動を物語る一例である。マディーナ時代にも、ムスリムの女性たちは必要とあれば戦争に加わることも厭わなかった。また女性たちは、社会的な意義も持つ集団礼拝や金曜礼拝、イード（祭り）の礼拝などにも参加していた。[335]

預言者は男性同様、女性とも社会的誓約を交していた。この誓約が統治者と被統治者の間を規定する意味を持つものであることを考えるなら、これは非常に重要で、また当時としては画期的なことであった。そのことはイスラーム

共同体とその構成員の関係において預言者は、男女を区別していなかったこと、ある意味では統治者を選ぶ点において女性たちにも権利を与えていたことを意味している。ただし、ムハンマドを預言者として選んだのは人間ではなくアッラーである。それを認めるか否かの選択が人に委ねられていたのである。預言者は自分に従う人々と誓約を交していた。この点だけから考えても、預言者が女性たちに政治的権利を付与し、それについて男女の差別を行わなかったことは注目に値することである。

預言者は、女性たちの保護や庇護を承認することで、女性にも法的な権利を与えていた。ウンム・ハーニーはマッカ征服の際、ある人物に庇護を求めたことを預言者に伝え、彼はそれを承認している。これは、統治者が女性の法的な権利を示したという点で、非常に重要な出来事である。それは法に関わることであり、また庇護を与えられた人の命にも関わる問題である。なおブハーリーはこの女性の法的な権利についてハディースの中で一章を割いて説明している。[336]

クルアーンは、男性と女性は、信仰、アッラーへの服従、謙虚さ、崇拝行為、正しさ、忍耐、援助、純潔を守ること、アッラーを想念することなどにおいて等しい存在であると述べている。[337] 男女のあり方ついて述べているクルアーンの章句を細かく見ていくと、次のようなことが読み取れる。すなわち、クルアーンは女性と男性はお互いに補いあい支えあう信徒、そして人間であると見なしている。男女を問わず、アッラーの御前においてその人間の価値を決定するものは、いかにアッラーを畏怖しているかにつきる。イスラームの教えを実践すること、自らの人生を生きること、そして子供たちや財産を守ることなどにおいて男女の区別は存在しない。そもそも男性の知性や財産、イスラームの教え、子供たち、そして純潔がどのように尊いものであれ、女性のそれも同等の尊さを有しているのである。世代を受け継いでいくということでは、女性の役割は男性を凌ぐものがあるということができよう。なぜなら生まれ出てくる子供が男の子であれ女の子であれ、生命を産むのは女性であり、主体となって育てていくのも女性だからである。

預言者は知識を学ぶことにおいても男女の区別を設けず、[338] クルアーンを男女を問わずすべての人々に知らしめよう

とした。啓示を受けた言葉を男性たちに読んで聞かせるのと同様に、女性たちにも読んで聞かせた。[339]

預言者は女性もまた思想と表現の自由を持っていると考えていた。女性は望まない男性と結婚させられるべきではない。また預言者は女性の感性を優れたものとし、内容によっては女性たちに相談していた。預言者は女性を物のように扱うことはなかった。「世界は交易品で成り立つ。交易品の中で最も素晴らしい恵みはよい女性である」[340]というハディースで用いられている「交易品」という言葉は、女性が品物のように扱われていることを意味するものではなく、女性の大切さを説いたものである。

男性が独身のままで生きていくことは難しく、このことからだけでも、男性にとって女性の重要性は明らかである。またそのことは女性にとってもあてはまることであり、家庭を築きたいという気持ちは男女双方に生まれながらにしてアッラーから与えられているものである。したがって、女性は男性にとって一つの恵みであり、男性も女性にとって恵みである。男性と女性はお互いに必要としている存在なのである。

女性という言葉を単に配偶者という意味で受け取るべきではない。それは広い視野で考える必要がある。女性は子供や若者の母であり、ときには祖母でもある。また女性は誰かの子供であり、孫でもある。また孤児であることも、幼児であることも、年長者であることもある。ときには、親戚や公的機関の世話や援助を必要とする貧しい者でもある。したがって、預言者が母親や子供、貧しい人々、孤児、寡婦、そして援助を必要としている人々に認めていた人間としての価値についても、預言者が女性に認めていた人間としての価値を基準に考える必要がある。

「出来るだけ仲良く、かの女らと暮しなさい」[341]というクルアーンの言葉は、実際預言者が家庭で行っていたことであり、しばしば教友たちに命じもし勧めてもいたことである。

このように、預言者や教友たちは女性を自分たちよりも下位に位置し、自分たちの言うことを何でも聞く存在であるとは見なさず、女性たちは男性と同じ権利を持つと考えていた。女性たちもまた、自らを男性たちよりも劣り、彼らの言うことを何でも聞き、頭を下げていなければならない存在とは見なしていなかったのである。[342]

五　孤児、殉教者の家族、傷病兵

自ら孤児として育ち、社会の中で孤児に対するひどい振舞いを目の当たりにしてきた預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が、熱心に取り組んだ社会問題の一つが孤児の問題であった。イスラーム以前の時代には、子育ての放棄や簡単に離婚できたこと、さらに死別といった理由から、社会にはたいへん多くの寡婦や孤児たちがいた。親が死んだときの子どもの保護は部族の長の務めであった。部族間の抗争が頻繁に行われたことにより、後見人の庇護の下に入った身寄りのない少女たちの数も少なくなかった。一人の保護者が十人から十五人もの少女の後見人となることもあった。孤児たちは自分を守る力を持っていなかったため、遺産相続において彼らの権利は尊重されず何も与えられなかった。[343] 孤児たちは遺産を相続できず、多くの場合財産を手にすることができなかった。当時のしきたりでは、身寄りのない少女の上にマントを被せれば、それは「この娘は私のものである」ということを意味した。そうした状況では、少女の庇護者以外の誰も彼女に結婚を申し込むことはできなかった。保護する者は、孤児の少女を気に入れば自分の妻にした。その場合はしきたりで定められていた結婚の支度金は支払われなかった。そして少女が遺産相続による財産を所持していればそれを自らの管理下に置き、自分のために用いることができた。だが孤児には何も与えられなかった。保護者が少女のことを気にいらなかったり、保護者が亡くなりその未亡人が少女の結婚を認めなかった場合は、彼女たちが他の人と結婚することを妨げた。自分の妻にならなかった少女は他の男性と結婚させなかっただけでなく、その財産を少しでも早く自分のものとするために虐待したり重労働を課したりした。[344]

このように、イスラーム以前の時代の孤児の扱いは大きな社会問題であった。そのためクルアーンやハディースでは他の諸問題と同様に、この問題も頻繁に取り上げられている。クルアーンやハディースでは孤児へのひどい振舞いが非難され、孤児の権利を保護している。またそこでは、孤児たちが直面する様々な状況に応じた原則が定められ、ムスリムとして行わねばならないこと、行ってはいけないことが広範囲に示されている。この件に関するクルアーン

の言葉の要点は二つに分けることができる。一つは孤児に対してよく振舞うようにと命じるものであり、もう一つは孤児の財産や一般的な事柄に関する原則を示すものである。

クルアーンは「かれは孤児のあなたを見付けられ、庇護なされたではないか」[345]と、預言者自身が孤児として育ったことを指摘し、アッラーが預言者に多くの支援を与えられたことを明らかにしている。同じ章で、孤児に対してよく振舞わねばならないことが次のような表現で命じられている。「だから孤児を虐げてはならない」[346]

次に説明する出来事は、イスラームの教えが寡婦や孤児の権利の保護をいかに重要視しているかを示すものである。アンサール（マッカから逃れて来たムスリムたちを助けたマディーナの援助者）の一人であるアウス・ビン・サービトが亡くなったとき、あとに妻と三人の娘が残された。彼には息子はいなかった。彼の財産のすべては従兄弟たちが取り、未亡人となった妻と三人の娘たちには何も与えられなかった。彼の妻はことの次第を預言者に訴えた。[347]預言者は彼らのもとに使者を送ったところ、従兄弟たちは財産が自分たちのものであると主張した。なぜなら当時のアラブ社会のしきたりでは、男だけが遺産相続人となることができたからである。この出来事に対し、次のクルアーンの章句が啓示された。「男は両親および近親の遺産の一部を得、女もまた両親及び近親の遺産の一部を得る」[348]預言者はすぐさま彼らに知らせを送り、アッラーが女性たちにも遺産を受け取る権利を定められたと告げたのである。

イスラーム以前の時代、人々は孤児の財産を自分のものにしていた。孤児たちの財産を得るために人びとは孤児と結婚したり、自分の娘や息子と結婚させたりした。「孤児が成人に達するまでは、最善の管理のための他、あなたがたはその財産に近付いてはならない」[349]という言葉が啓示されたことによって、ムスリムたちは孤児の財産に手をつけなくなったのである。しかも孤児の財産を奪うどころか、彼らの財産と自らの財産を混同してしまわないように注意するようになった。孤児が残したパンを食べることすら躊躇するほどであった。家で孤児を養育している人々は、彼らと食べ物や飲み物を区別するようになった。彼らに家を与えることもあった。こうしたことは財産を持っていない孤児たちにとっては不幸なことで、孤児の保護者にとっても困難を伴った。アブドゥッラー・ビン・ラワハは預言者に

次のように訴えている。「アッラーの使徒よ、私たち皆が孤児を住まわせるもう一つの家を持てるだけの力や、彼らに別の食糧を与えるだけの財力を持っているわけではないのです」そうした誤った理解を正すために次のクルアーンの章句が啓示された。「またかれらは孤児に関し、あなたに問うであろう。言ってやるがいい。『かれらのために、有利に取計らうのは善いことである。もし、かれらと親しく交る時は、あなたがたは兄弟である。』[350]」この啓示によると、大切なことは孤児を健全に育て、彼らの財産を彼らのために活用することである。孤児の不利益にならない限り共に住み、彼らの財産を自分の財産と共に運用する。そのこと自体は問題ではない。ただし利益が上ったときは、そこから必要経費を差し引き、孤児の取り分を分け与えること、そしてその計算は記録しておかなければならない。[351]

孤児の社会的立場を回復することは預言者が力を入れた社会活動の一つであった。預言者が貧しい人々や孤児たちにかかわり、彼らの権利の確立に取り組み始めたのは、預言者として活動を始めた当初の時期からである。エチオピアへの移住者たちの長であったジャーファル・ビン・アブー・ターリブは、エチオピア皇帝ナジャーシーの前でイスラームとムスリムを守るために行った演説で、「イスラーム以前の時代には強い者が弱い者を虐げていた」と語り、それに続けて預言者が禁じたことを説き、その一つが孤児の財産を横領することであったとしている。[352]預言者はその生涯の最後まで孤児たちとかかわり続けた。

預言者の孤児に対する素晴らしい振舞いの例を、有名な教友アナス・ビン・マーリクに対する振舞いの中に見出すことができる。アナス・ビン・マーリクは孤児であった。彼の父のマーリク・ビン・ナドゥルはムスリムたちと対立しており、イスラームがマディーナに伝えられた最初の日に妻のウンム・スライムがムスリムとなったことに立腹し、ダマスカスへと向かった。そして聖遷以前にその地で死んだと伝えられている。ウンム・スライムはのちにアンサールのアブー・タルハーと結婚している。預言者がマディーナに聖遷を行ったとき、まだ十歳にして読み書きができる利口な子供であったアナスを、母ウンム・スライムは預言者に仕えるようにと彼のもとへやった。アナスは預言者が亡くなるまでの十年間、彼に仕えた。預言者の教育やしつけの仕方、人々、特に子供たちに見せた寛容さ、その他多

くの道徳的な行いが、アナスによって後世に伝えられている。アナスは預言者から一度たりとも叱られたことがないと伝えている。失敗したアナスをつかまえ叱ろうとした妻たちに、「子供を放してやりなさい」[353]と言うのが預言者の常であった。

預言者は孤児を育てたり、孤児の面倒をよくみている家を高く評価し褒め称えた。預言者はこのことについて次のように語っている。「最良のムスリムの家とは、孤児がよい振舞いを受けている家である。最も悪いのは孤児を住まわせながら、よく振舞わない家である」[354]

ここでは、孤児を家に住まわせるだけでなく、彼らに対しよく振舞うようにと述べられている。家に住まわせている孤児の面倒をよく見ないなら、それは孤児を迫害するに等しい。

有名なアブー・フライラもまた、イスラームが孤児を人としての尊厳を持った人間と見なしていることを体現している。彼も孤児として育ち、ブスラ・ビンティ・ガズワーンの召使として生計を立てていたが、イスラームによって自尊心を手にすることができたのである。[355]

預言者は、孤児と人々の間に争いが生じ、孤児に不利な裁定が下された場合にも、特赦を与えたり保護観察に処することによってその孤児を守ろうとした。ウフドの戦いを前にして、アンサールの一人アブー・ルバーバと孤児との間でナツメヤシの果樹園をめぐって争いが生じた。預言者はアブー・ルバーバに分があるという裁きを下したが、果樹園の権利をできればその子供に譲ることをアブー・ルバーバに求め、その報奨として彼に天国でナツメヤシの果樹園が与えられるであろうと伝えた。しかしアブー・ルバーバがその助言に従わなかったため、預言者はひどく失望した。時を同じくしてイブヌ・ダフダハは、ナツメヤシの果樹園を買いそれを孤児に与えれば、その報奨として何が与えられるのかと預言者に尋ねた。預言者が天国でナツメヤシの果樹園が与えられると伝えると、イブヌ・ダフダハはナツメヤシの果樹園を購入し、それを孤児に与えた。預言者は彼のこの振舞いをたいへん喜んだ。[356]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は孤児たちに決して悪意を持って接することはなかった。召使として働か

せることはあっても、彼らの財産に手をつけることはなかった。さらに孤児の財産を何かに投資することすらよしとしなかった。たとえば預言者モスクが建てられた土地は、アンサールのアサド・ビン・ズラーラの庇護下にあるサフルとスハイルという二人の孤児が所有していた。二人の孤児はモスクの建設のために土地を寄贈することを望んだが、預言者はそれを認めず、孤児たちに土地の対価を支払った。[358]

預言者が援助の手を差し伸べるとき、自らの親戚よりも孤児たちを優先させることがあった。ある日、彼のもとに戦利品と共に捕虜が送られてきた。預言者の叔父ズバイル・ビン・アブドゥルムッタリブの娘であるウンム・アル＝ハカムとドゥバーは、そのことを耳にして預言者の娘ファーティマを伴って預言者のもとを訪ね、自分たちの状況を訴え、召使を与えてくれるよう求めた。それに対し預言者は、「あなた方のことよりもバドルの戦いで孤児となった子供たちのことが優先される」[358]と答えている。

バシール・ビン・アクラバという教友は、彼がまだ子供の頃に父親がウフドの戦いで殉教した。そのとき預言者はバシールを訪ね、彼が泣いているのを見て、「もう泣かないで。もしよければ私があなたの父となり、アーイシャが母となりましょう」と慰めた。するとバシールは、「はい」と答えた。[359]

複数の孤児たちがアーイシャの庇護のもとにいた。[356]それに加え、遺言で預言者に預けられた孤児たちもいた。アサド・ビン・ズラーラは死に臨んで、カブシャ、ハビーバ、ファーリアという三人の娘を預言者に託すという遺言を残した。預言者は妻たちを訪問する際に、その娘たちも連れていった。そして彼女たちの結婚の世話もしたのである。[361]

預言者は孤児の世話をすることは宗教上の務めであり、そうする人は来世でその報奨を得ると伝えている。そして、「誰であれ、アッラーのご満悦のために孤児の頭を撫でれば、その手が触れた髪の数だけの善行が記される。誰であれ、そばにいる孤児の少年や少女によく振舞えば、私とその人は天国で（人差し指と中指を示しながら）この二本の指のようである」[362]と語っている。

七つの大罪とされる罪の中に、孤児の財産を奪うことが含まれている。預言者は次のように語っている。「人を破滅

へと導く七つのものを避けなさい。何ものかをアッラーと同等に配すること、魔術、人を殺すこと、利子により利益を得ること、孤児の財産を奪うこと、戦いのときに逃げること、高潔で純真な女性の信者たちについて虚言を広めること」[363]

イブン・マージャは『徳の書』で、孤児の権利について一章を割いている。そのハディースの中の「二種類の弱者の財産を奪うことを避けよ。それは孤児と女性である」[364]という一文は注意を引くものである。預言者は「誰であれ三人の孤児をその庇護のもとに入れるなら、それは日中を断食して過ごし、夜は礼拝に勤しんでアッラーの道のために奮闘努力することに等しい。私とその人、すなわち孤児の財産を守る人は、天国でこの二本の指のようである」と語り、二本の指を組み合わせて示した。[365]

預言者は孤児の財産の保護に重きを置いた。だが、孤児を保護する能力がない人にそれを求めることはなかった。実際、アブー・ザラル・グファーリーにはその力がないと見なし、孤児の財産の管理を引き受けないよう求めた。[366]アウン・ビン・アブー・ジュハイファは父親の次のような言葉を言い残している。「私たちのもとへザカートを徴収する役人がやってきた。そして彼は仲間の中の豊かな人たちからザカートを受け取り、それを貧しい人たちに分配した。孤児であった私にも一頭のラクダが分け与えられた」[367]こうした例もまた、預言者の時代に国家が孤児をよく保護していたことを示すものである。

預言者は孤児や貧しい人々、そして旅人に施しを与える人を賞賛し、彼らの財産を奪う者を非難した。そして「誰であれ孤児に食べ物や飲み物を与えるなら、彼が罪を犯さない限り、アッラーは彼を天国に入れられるだろう」[368]と語っている。[369]孤児となった甥たちにザカートを与えることについてイスラームの見解を尋ねてきた人々に、預言者は親戚としての献身とザカートを与えたことによって、その行為には二倍の報奨があると告げている。[370]また自分の心のかたくなさを訴えた人には、孤児を慈しみ、彼らの頭を撫でること、自分が食べているものを孤児に分け与えることを勧め、そうすれば心も和らぐであろうと語っている。

このように預言者は当時の社会問題であった孤児の権利とその扱い方について、根本的で重要な解決策を与えている。

預言者はとりわけ殉教者たちの遺児たちについて心を配っていた。その中でも特にウフドの戦いの殉教者アブドゥッラー・ビン・アムルの息子ジャービルのことを気づかっていた。父親が殉教したときジャービルは十八歳であった。預言者はウフドの戦いの翌日ハムラーウルアサドに向かう際、前日のウフドの戦いに参加した者だけに同行することを許したが、父親が前日に殉教していたジャービルには特別に許可を与えた。ジャービルは預言者のもとに来て、ウフドの戦いのときには妹の世話をする者が他にいなかったので戦いに参加できなかったと訴え、次の遠征にはぜひ参加したいと伝えた。預言者は他のことでもジャービルの力になった。ナツメヤシの収穫の時期になると多くの債権者がジャービルに父親の借金の返済を求めてきた。彼はナツメヤシの果樹園以外に収入の道を持っていないこと、そしてその年の収穫では借金を返すには十分ではないと預言者に相談した。預言者は集められたナツメヤシをいくつかの山に積み上げた。そして、秤を手に最も大きな山のそばに座り、債権者たちにその取り分に応じたナツメヤシを与え始めた。するとジャービルの借金をすべて返済したのちも、ナツメヤシは減っていなかったと伝えられている。この話は預言者の起こした奇跡の一つとされている。[371]

預言者は困窮している殉教者の家族を援助し、彼らが経済的に苦しまないようにした。その例として、ジャービル・ビン・アブドゥッラーとの間に起きた出来事を挙げてみよう。預言者と共にザートゥルリカーの遠征に加わったジャービルは、経済的に困っていることを預言者に話した。すると預言者はジャービルに自分にラクダを売るようにと言った。二人の間でいくつかのやりとりが交された結果、マディーナに着いてからラクダを受け取るという条件で、預言者は彼のラクダを買うこととなった。マディーナに到着後、ジャービルがラクダを連れてくると、預言者はその対価を支払い、その後すぐラクダをジャービルへの贈り物としたのである。ジャービルはそのとき、知り合いのユダヤ人と偶然に出会い、彼にその出来事を話した。ユダヤ人は「彼は君からラクダを買い、それから君にそれを贈ったという

とか」と驚いて聞き返すと、ジャービルは「そうなのです」と答えている。[372]
預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は殉教者の遺児たちを援助したが、物質的・精神的な援助をするだけで十分だとは考えなかった。彼らを援助に頼って生きていく人間ではなく、将来自分の仕事を持ち、自力で生計を立てていくようにと励ました。ムータの戦いで殉教したジャーファル・タイヤールの息子アブドゥッラーとの間に起きた出来事はその一例である。預言者はある日、市場で他の子供たちと共にものを売っているアブドゥッラー・ビン・ジャーファルを訪ね、「アッラーよ、彼の売り上げを豊かなものとしてください」と祈念した。預言者が亡くなったときアブドゥッラー・ビン・ジャーファルが十歳であったことを考えると、[373] この出来事は彼が七歳から十歳までの間に起きたものと思われる。

預言者は多くの殉教者の遺児たちを慰めた。アブー・サイド・アル＝フドゥリはウフドの戦いのとき十三歳であった。彼の父マーリク・ビン・シナンは、息子はもう十分に一人前であると預言者に告げ、彼も戦いに加わることを望んだ。しかし預言者はそれを認めなかった。マーリク・ビン・シナンはその戦いで殉教した。預言者は彼を慰め、「アッラーがあなたのお父さんに報奨を与えてくださいますように」と祈念した。

預言者は若くしてウフドの戦いで殉教した叔父ハムザの遺児たちともかかわりを持っていた。ハムザの娘ウマーマは、カダーの小巡礼のとき、「おじさん、おじさん」と預言者の後にまとわりついていた。預言者もウマーマを連れてマディーナへと向かった。子供の世話をめぐりザイド・ビン・ハーリサやアリー、そしてジャーファル・ビン・アブー・ターリブの間で意見が対立し、預言者がその仲裁に入った。そしてジャーファルの妻アスマはウマーマの叔母であることから、ウマーマはジャーファルに預けられた。ウマーマはのちにサラマ・ビン・アブー・サラマと結婚している。また預言者は、ウフドの戦いで殉教したアブドゥッラー・ビン・ジャフシュの遺産を自らの管理下に置き、ハイバルでその息子に財産となるものを買い与えている。[374]

マディーナ時代には教友たちの多くは戦士であった。バドル、ウフド、塹壕のそれぞれの戦いに加わった者たちは、すべてがイスラームの戦士であった。預言者はその中でも特にバドルの戦いに参加したバドルの民を讃え、[375] 彼らは兵士のあるべき姿を体現する者であると述べている。ムスリムたちがマッカ征服の準備をしていることを多神教徒たちに密告する手紙を書き、のちにそれを断念したハーティブ・ビン・アブー・バルタアの例のように、彼らの罪のうちいくつかは赦されている。

預言者は殉教者の遺族を慰めるためにできる限りのことをした。その一例として、年少のうちに殉教したハーリサ・ビン・スラーカの母親に対する預言者の行いを挙げることができる。ハーリサの父親スラーカは聖遷以前に亡くなっていた。聖遷の後でハーリサは母親と共にイスラームに入信した。ハーリサは年少であったためバドルの戦いには兵士として参加していなかった。しかし、戦場の後方の水汲み場で水を飲もうとしていたときに飛んできた矢に当たり、アンサール側の最初の殉教者となったのである。ハーリサの殉教の知らせが母親と妹のもとにもたらされた。母ウンム・ハーリサは、息子が天国にいるのなら泣かないが、地獄にいるのであれば泣くだろうと語った。預言者がバドルからマディーナに戻ると、彼女は息子のことを尋ねるために預言者のもとを訪れた。そして「もし息子が天国にいるなら私はがまんすることができます。そしてそれが私の善行となることを願います。もし息子が地獄にいるなら、力の限り泣きます」と訴えた。預言者はハーリサが天国に、しかもその第七層（天国の最も高い階層）にいると告げると、母親は「私はもう息子のために泣くことは決してしないだろう」と語った。[376]

殉教者の母親を慰めた預言者の次のような言動もたいへん興味深いものがある。預言者はウフドの戦いの殉教者たちを埋葬した後、兵士たちと共に馬に乗ってマディーナに戻った。アンサールの女性たちは預言者の一行を出迎えるためにマディーナを出たところであった。彼女たちの中には、預言者の馬を引いていたサアド・ビン・ムアズの母カブシャ・ビント・ウバイダもいた。その女性のもう一人の息子アムルは殉教していた。サアド・ビン・ムアズは預言者に「アッラーの使徒よ、私の母です」と母を紹介した。預言者はカブシャに「ようこそ」と挨拶した。彼女は預言

者に近づき、「あなたのご無事を確認できた以上、私の災いなどは何でもないことのように思えます」と語った。預言者は息子を失ったことへのお悔やみを言い、彼女の息子や他の殉教者たちは天国にいると伝え、次のように祈念した。「アッラーよ、彼女らの心から悲しみを取り除いてください。彼女らの苦しみにみあう報奨をお与えください。残された人々のためによいことをもたらしてください」[377]

預言者のもとに、ウフドの戦いで殉教したアナス・ビン・ファダーラの三歳になる遺児ムハンマドが連れてこられた。預言者はその子に売却や寄付はしないという条件でナツメヤシの果樹園を与えている。[378]

イスラーム軍がウフドの戦いからマディーナに戻ると、女性たちは戦いに加わった近親者たちの消息を尋ねるために預言者のもとを訪れた。ハムナ・ビント・ジャフシュには、弟のアブドゥッラーと叔父のハムザが殉教したことが伝えられた。ハムナは気丈に振舞い、アッラーが彼らを赦してくださるようにと願った。預言者が彼女の夫も殉教したことを伝えると彼女は嘆き悲しんだ。預言者は女性にとって夫は特別な存在であることをおもんばかりつつも、彼女になぜそれほどまでに悲しむのかと尋ねた。彼女は「アッラーの使徒よ、父親を失った子供たちのことを考えたのです。父を亡くした子供たちのことが私を悲しませるのです」と答えた。預言者はそうした子供たちが立派に育つよう祈念し、彼らの世話をした。ハムナにもハイバルで食糧を援助している。[379]

預言者は「未亡人や貧しい人々を助けるために駆けつける人は、アッラーの道で奮闘努力する人と同じ報奨を得る」[380]と語っている。この言葉は間違いなく、殉教者たちの残した未亡人たちを助ける人々のことも含んでいる。預言者は殉教者の遺族への精神的援助を怠らず、彼らのために「アッラーよ、彼らの心の悲しみを取り除いてください。災いを取り除いてください。殉教者が遺した人々を守ってください」と常に祈念していた。[381]

預言者が兵士たちや殉教者たち、そして殉教者の残した子供たちを大切に考えていたことは、教友たちに影響を及ぼした。イブン・ヒシャームが記録しているところによると、彼の親友の一人であったアブー・バクルが胸に幼い子供を抱きかかわいがっていたとき、一人の男が来てその子供は誰なのかと尋ねた。アブー・バクルは「この子は私より

も立派なある男の娘だ。サアド・ビン・ラビーの子だ」[382]と答えている。サアド・ビン・ラビーはバドルの戦いに参加し、その後ウフドの戦いで殉教した兵士であった。

六　貧しい人々

もう一つ、社会の中で保護され援助されなければならないのは、様々な理由で困窮している人々である。クルアーンには、貧しい人々を助けること、彼らに食事を与えることに関する多くの言葉が存在する。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はイスラーム布教の当初から、貧しい人々の世話をし、保護し、貧困を克服し、社会に困窮する人々を生み出さないために並々ならぬ努力を傾けてきた。それは具体的には、奴隷を解放すること、国家が集めた戦利品やザカート、すなわち国家予算を使い困窮者を支援すること、あるいはサダカ（義務でない施し）を奨励することなどであった。さらに、当時ムスリムでなかった貧しい人々も保護され援助を受けていたことが知られている。また経済力がなく、働くこともできず困窮していた非イスラーム教徒は人頭税の支払いを免除されていた。

預言者がサダカを奨励していた例として、次の出来事を紹介したい。ある日、預言者のもとに虎の皮のような衣装を身にまとっただけの半裸の男たちが裸足でやってきた。預言者はそのひどく貧しそうな様子を見て顔色を変えた。彼らが自分のもとを去っていったのち、ビラール・ハベシーにアザーン（礼拝への呼びかけ）を唱えさせ、礼拝を行い、その場にいた人々に演説をした。貧しい人々への援助を勧めるクルアーンのいくつかの言葉を詠み、「人はその財産や衣装、それから麦、ナツメヤシなど、それがたとえナツメヤシの半分であってもサダカとして支払わなければならない」と説いた。それを聞いて人々はいっせいにお金や食べ物、飲み物などを持ち寄ってきた。それはあたかも食べ物と飲み物で二つの山ができたようであった。預言者はこの様子を見てたいへん喜び、「誰かがイスラームにおいて新しい道を開けば、その道を行く人々への報奨は道を開いた人に与えられ、その人々の報奨が一切減らされることはない。

誰であれイスラームに悪い道を開けば、その道を行く人の罪がその道を開いた人に与えられ、道を行く人の罪もまったく減らされることはない」と語った。[383]

預言者は貧しい人々の置かれている状況の改善と取り組み、決して彼らを軽視したり蔑視することはなかった。

預言者は貧しい人々や貧困について多くの言葉を残している。それは二つに分類することができる。一つめは、貧しい人々を肯定的にとらえているものである。ハディース学者は[385]「貧者の徳」という一章を設け、この項目に関するハディースを集めている。[384] このハディースは、貧しい人々の徳として、耐え忍んでいる貧しい人びとは最初に天国に入る人たちであること、[386] 貧しい人々はもちろん天国に入れること、天国の民の多くが貧しい人々であること、[388] ムスリムのうち貧しい人々は裕福な人々よりも先に天国に入ること、[389] 貧困とは恥ずべきものではないこと、貧しいことは精神的な生き方をする上で優位であること、貧しい人々が社会において尊い層を形成していること、[390] アッラーは貧しく高潔なしもべを愛されることなどを伝えている。[391]

二つめは、貧しい人々を否定的にとらえているものである。それには耐え忍ぶことによって人間として成長することなく、貧しさを言い訳にして悪事を働き、教えに背く貧しい者たちを強く非難する伝承などがある。貧困についてアッラーに庇護を求めるべきであること、[392] 貧困は人を悪に追いやる可能性があること、さらには忘恩へと導きイスラームの教えへの憎悪に人を追いやるものであることが[393]示されている。この分類の伝承には貧困に対する否定的な表現が見られる。

[387] 貧困についてのこの肯定的・否定的な二つの見方の間には、一見矛盾があると思われるかもしれない。しかし一つめの伝承では、貧困に対し耐え忍ぶべきであることが語られ、貧困が人間にとって必ずしも悪い作用を及ぼすものではないことが指摘されているのである。二つめの伝承では、貧しい人々を庇護し貧困を克服するために努力することが奨励されている。以上のように、この二つの伝承の間に何ら矛盾はなく、共通した考え方が存在していること、社会がこの二つの側面の間で均衡を保つためにこういった表現が用いられていると指摘することができよう。[394]

預言者は様々な機会をとらえ、「与える手は受け取る手よりもより上位にある」[395]と述べている。

貧困層は、社会的な相互扶助を必要とし、そして実践している主たる階層である。したがって貧しい人々についてのこの項は、預言者がいかに社会的相互扶助に重きを置いていたかを明らかにすることによって締めくくりたい。預言者の生涯を注意深く見ていくと、預言者がクルアーンに示されている相互扶助の原則を様々な機会をとらえ、社会のあらゆる層で実践していることが読み取れる。クルアーンに示されている規範の一つは次のようなものである。「むしろ正義と篤信のために助けあって、信仰を深めなさい。罪と恨みのために助けあってはならない」[396]クルアーンのこの一節には、あらゆる種類の善行、篤信、従順、正しさ、罪のないことなどを意味する「ビッル」という言葉が使われ、篤信という言葉が意味するあらゆる種類の相互扶助が求められている。

社会や個人の幸福、平和、安定のために求められる社会的な相互扶助とは、次のようなものである。預言者は人々がお互いに助け合うことを求めた。人生において困難な状況下にあろうとも、あるいは良好な状態にあろうとも、常に人は他の人々と共にあること、言い換えるなら共に支えあうことを求めた。たとえば病人を見舞い、お悔やみの言葉を述べ、招待に応じ、贈り物をし合うことなどである。預言者は知識を持たない人には学ぶという責任を与え、知識を持つ人には教えるという任務を与えることにより、知識を得る上でもムスリムたちが助け合うようにした。ムスリムたちが住む地域に対し行われる攻撃には、精神的・物理的に力を尽くして助け合い、国家防衛における相互扶助の意識を育んだ。経済分野で預言者が取り入れた政策は、社会の各層を保護することを目的としていた。ザカートやサダカ、ラマダーン月のサダカをはじめ、お金を貸すことなど、様々な形で実践された経済的義務は、ムスリムたちの間ではもちろんのこと、ムスリムではない人々との間でも、経済的相互扶助の道を開いたのである。クルアーンでは、社会的な相互扶助はまず近親者を優先し、次いで貧しい人々、奴隷、債務を抱えた人などに対し行われるべきであると述べられている。クルアーンの説く社会的相互扶助についての規範は、すべて預言者によって率先して実践されている。[397]

七　障害者

社会には様々な理由から障害を負った人々が存在する。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は障害者ともかかわりを持ち、彼らが障害を持つが故にできないことについては義務を負わせることはなかった。彼らを尊重し、それぞれの能力に応じて公職に就かせ、社会にも貢献させようと努めた。預言者は障害者を、物乞いをする人々、すなわち人の援助を受けなければ生きていけない人々とは見なさなかった。ここでは預言者の障害者に関する実践の例を見てみよう。

預言者の障害者に対する振舞いは、大きく分けて身体障害者と知的障害者の二つに分けることができる。身体障害者の中ではまず視覚障害者が挙げられる。なぜなら当時、眼の病気に加えて、弓矢や槍などを用いて戦いが行われていたために、視覚障害を負った人々が非常に多くいたからである。クルアーンでは、「アーマー（盲人）」という言葉が一般に心の眼が開いていない状態を指すものとして用いられているが、一部には実際の視覚障害の意味でも用いられている。クルアーンの眉をひそめて章では、特に視覚障害者、さらに一般的な意味での障害者の権利を指摘し、彼らに対し正しく接しなければならないと述べられている。ここではその点に注目させる個人名は挙げず、「アーマー」として言及されている。[398]

預言者のハディースでは、視覚障害者についての規範が多く語られている。預言者は目が見えないことに耐え忍んだ人には、天国という報奨が与えられるであろうと告げている。[399] 目が見えない人々に対して悪しき振舞いをする人、たとえば道で彼らの動きを妨げるような行動をとる人々については厳しく非難している。[400] 預言者の視覚障害者に対する最善の例は、有名な教友イブン・ウンム・マクトゥムに対する振舞いに見ることができる。預言者は眼の見えない彼に預言者モスクでアザーンを唱える任務を与えている。それに加え、彼を公職の中で最高の職務に就かせ、自らの

代理人、すなわち国家の長の代理人とした。最後の巡礼やウフドの戦いをはじめ、様々な理由で預言者がマディーナを離れなければならなかったときに、十三回にわたって自らの代理を務めさせている。[401] イブン・ウンム・マクトゥムや他の視覚障害者たちが礼拝を先導するイマームとなることも許可していた。ここで、公共の任務に就かせる際には一定の品格も求められるべきである。当然、一部の仕事ではそうした品格が必要となるだろう。ただ特筆すべきは、預言者は一人の視覚障害者を国家の最高位の職務に就かせていた、という事実である。

　預言者は障害者を物乞いをする人々とは見なしていなかった。物乞いというイメージを抱かせるような方策をとることもなかった。彼らを、人々の援助がなければ生きていくことのできない、哀れで無力な、かわいそうな人々と見なすこともなかった。状況に応じて障害者が働くことを後押しし、彼らが商業に従事することを容易にする法令を出した。預言者が労働に置いていた価値について説明する際に紹介した例を、ここでもう一度取り上げてみたい。商業を営んでいたムンクズ・ビン・アムルという名の教友は精神を病み、話しがうまくできなくなった。それでも彼は商売を続けていた。しかし、しばしば人に騙されるようになっていた。彼は預言者のもとを訪れ、自らの状況を訴えた。預言者は彼に仕事をやめさせるのではなく、仕事をより容易な形で行わせることにした。取引を行うときには「私をだまさないでください」と述べること、購入した商品について三日間は返品する権利を持っていることを売り手に告げることを求めたのである。

　クルアーンでは、「盲人でも遠慮は要らない。また足の身障者でも遠慮は要らない。また病人でも遠慮は要らない」[402]とされている。また彼らはできないことを義務として与えられないこと、さらに力が及ばないためにできなかったことについては罪とは見なされないことが明らかにされている。たとえば、アンサールのサラマ族の長であったアムル・ビン・ジャムーフは足が不自由であった。彼はバドルの戦いに加わることを望んだが、預言者はそれを許可しなかった。アムルに戦わせたくなかったのである。のちにアムルはウフドの戦いに加わることを望んだ。息子たちはバドルの戦いを例に挙げ、彼に思いとどまらせようとした。だがアムルは参加することを預言者に強く求めた。預言者はアムル

に、彼が障害者であり、戦いに参加する責任を負ってはいないことを告げた。しかしアムルが繰り返し戦いへの参加を望んだので、預言者は彼に許可を与えた。息子たちにも、戦いに加わるかどうかは本人の選択に任せるよう求めた。そして戦いに加わったアムルはついに、常に彼の後ろにいて彼を守っていた息子と共に殉教したのである。[403]

社会のあらゆる立場の人々と接していた預言者が、知的障害者と関わりを持たず、彼らを軽視していたとは考えられない。実際彼は、知的な障害を負っている人々は宗教的な責任を問われないということを、次のような言葉で明らかにしている。「三つの種類の人々については筆が起こされていない。すなわち、思春期に達していない子供、眠りから覚めていない人、そして健康を快復せず精神的な病を持っている人」[404]

このハディースはイスラーム法やそれに類する書物で、知的な障害を持つ人々の崇拝行為についての規範の論拠とされてきた。書物には、崇拝行為を行うことが義務となる条件の一つとして「知性を備えていること」が記されている。知的障害を意味する「アタフ」という状態に関し、障害者の家族に関する法規も整えられている。[405] 預言者は健康な人々の障害者への振舞いについて、道徳的な改善ももたらしている。実際、目の見えない人に道案内をしたり、耳の聞こえない人、口のきけない人に言葉を教えることなどをサダカとして高く評価している。[406]

八　奴隷

まず述べておかなければならないことは、奴隷制度はイスラームがつくり出したものではないということである。その制度は古代から存続し、世界各地に広まり、イスラームの時代にも存続していた。イスラームの観点からは、奴隷制度は刑罰の一手段でもなく、経済的な利益を上げることのできる戦利品でもなかった。イスラーム以前まで奴隷は、人間と見なされることはなく、イスラームによって彼らは初めて人間として認められたのである。クルアーンが明確に奴隷制の廃止に触れず、奴隷制を廃止するようにと呼びかけていないことは事実である。しかしクルアーンには、

人を奴隷とすることを容認する言葉もまた存在しない。逆に、奴隷を解放することを奨励している。過去の出来事を評価するときには、その時代の社会的条件について考慮しなくてはならない。今日の生き方や考え方にそぐわないことであったとしても、それがその時代においても禁止されるべきであったと見なすことは、現実的でないことは明らかである。[407]

法的な観点からもイスラームは奴隷たちに新たな権利を与えている。同時にこの奴隷の存在を、戦争によってのみ生じるものと制限している。さらに、敵陣から脱走しイスラーム側に投降した捕虜たちは、通常は奴隷とされたが、もし彼らがイスラームを受け入れるなら自由を得ることができた。ターイフ包囲のとき、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が奴隷たちに城を出てイスラームの側につけば解放すると告げると、約二十人の奴隷が城を出てムスリムとなり解放されている。そして解放された奴隷たちの一人ひとりが生計を立てていけるよう、生活にゆとりのあるムスリムに彼らを預け、クルアーンとスンナを教えるよう命じている。[408]

そもそも奴隷を生み出す最大の原因は戦いにあった。戦いの結果、身柄を拘束された捕虜には、対価なくして解放されるか、身代金が支払われたり奴隷同士の交換によって解放されるか、あるいは奴隷という身分にされるかの三つの道しかなかった。預言者は当時の慣習に従い、捕虜を奴隷にするという選択は厳しい制限をつけた上で女性と子供たちに対してのみ適用し、成人男性の捕虜を奴隷とすることはなかった。クルアーンは捕虜を自由の身とすることを奨励しており、その解放のための費用には国家予算の一部が充てられた。奴隷を解放することは罪を償う一つの方法であり、悔悟への扉や善行への道であるとされた。イスラームでは、奴隷そのものよりも奴隷解放についてより多く触れられている。預言者は戦いで拘束した捕虜のすべてを、様々な機会をとらえて解放している。たとえば、叔父アッバースが預言者に贈った奴隷アブー・ラーフィーを、本人がイスラームに入信したと聞くとすぐ解放している。そして女奴隷であったサルマと結婚させている。アブー・ラーフィーは死ぬまで預言者の側近の一人であった。解放奴隷と自由民との社会的立場の違いをなくすため、ザイド・ビン・ハーリサを自分のいとこであるザイナブと結婚させて

いる。

こうした預言者の行いを踏まえ、短期間の間にイスラーム社会からは奴隷という身分が取り除かれるはずであった。そして奴隷制が残っていても、奴隷はその主人の兄弟や配偶者、子供と同じような人間的な扱いを受けるはずであった。しかし現実にはそのようにはならなかった。人々はアッラーとその使徒の意志に従わなかったのである。この点においては、古いしきたりが宗教の教えに勝ってしまったのである。そして何百年もの間、家畜市場のような奴隷市場が存続していた。

預言者は奴隷を解放するとともに、彼らを国家の要職にも登用した。たとえば、解放奴隷のザイド・ビン・ハーリサとその息子ウサーマを有力な教友たちが就く軍隊の司令官に任命している。

自由の民である男性の子供を生んだ女奴隷とその子供は解放されるという規則も導入されている。それは、当時の政治的・社会的な状況を考慮するなら、たいへん重要な進展であった。著名なドイツの作家アウグスタ・バベル（一八四〇～一九一三年）は、イスラームと共に発展したアラビア文化が、中世ヨーロッパのキリスト教支配の中で顧みられなかった中世以前の文化の遺産を西洋に伝えたことを紹介した著書の中で、奴隷制度についてたいへん公正な評価を行っている。「そもそも、奴隷制度に真っ向から反対し、奴隷制度の廃止を求めることは、その時代のものの見方、理解力、風習や習慣に合致せず、あまりにも急進的な要求となっていたことであろう。周知のようにヨーロッパでは奴隷制度は近世まで続いている。預言者は奴隷が自由民の子を生んだ場合、その子は自由民とするという規範を導入している。これは当時のヨーロッパ、あるいはドイツの奴隷制度の考え方とはまったく異なる新しい考え方であった。ヨーロッパでは同じ状況で生まれた子供は自由民にはなれなかった。一方で預言者は、奴隷として生まれた子供の母親が売られたり贈り物にされたりすることも禁じている」[409]

現在奴隷制度は廃止されており、戦争捕虜が奴隷にされることはもはやあり得ない。[410]

社会の諸問題と預言者

一　不和、口論

イスラームの登場により、長く続いてきた部族や個人の間の争いは徐々に解消されていった。ただ、時には些細な理由からムスリムたちの間に不協和音が生じたり、口論が起きたりすることもあった。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はこの種の出来事をイスラーム以前の考え方によるものと見なし、ただちに仲裁の労をとった。ある日のこと、アウス族とハズラジュ族の人々が集まって話をしていた。近くにいたユダヤ教徒はムスリムたちが仲良くしていることを妬ましく思い、ひとりのユダヤ教徒の若者に、かつてアウス族とハズラジュ族との間で起こったブアースの戦いと、その戦いによって生じたその後のいくつかの戦いを思い起こさせるために、彼らがつくった詩をその場で詠むことを命じた。若者はその命令に従った。その結果、アウス族とハズラジュ族の間に不和が生じることとなった。それはさらに武器を持って殴り合うほどの事態となった。そのことを知った預言者は事態を収拾し、「ムスリムの人々よ、アッラーを畏れなさい。私があなた方のそばにあるとき、アッラーはあなた方にイスラームによって名誉を与えられた。あなた方に恵みを授けられた。無知から救われた。教えへの憎悪からあなた方を遠ざけられた。そしてあなた方の心を一つにされた。それなのに、無知の者たちのような争いをしてお互いに誹謗中傷し合うとはどういうことなのだ」預言者のこの言葉にムスリムたちはすぐにいさかいをやめ関係を修復したのであった。[411]

このようないさかいは、ムスタリークの戦いの後にも、移住者とアンサールとの間に生じている。この戦いがムスリム側の勝利によって終わった後、移住者のウマルの馬丁ジャフジャーフ・アル＝グファーリーとアンサールのアウ

フ族のシナン・ビン・ワブラとの間で、ムライシーという井戸から水を引くことをめぐって問題が生じた。ジャフジャーフはシナンを何度か殴りつけ、シナンは「アンサールよ、助けてくれ」と大声を出した。ジャフジャーフも移住者の仲間を呼び、アンサールと移住者の双方が集まったとき、それぞれの有力者が進み出て、事態を沈静化させるための呼びかけを行った。そのとき、その場にやってきた預言者は喧嘩のいきさつに耳を傾けたのち、それは無知な人々がするような喧嘩であると述べ、「やめなさい、それはよくないことだ」とその場を収めたのである。[412]

二 暴力

イスラーム以前、そしてイスラームがもたらされた当初、世界は暴力に満ちていた。ビザンチン帝国やアラビア半島、ガッサーン朝、ヒーレ朝といったアラブの周辺の国々、部族間、さらには部族の内部においてすら暴力は、社会における普通の行いとして受けとめられていた。マッカ時代、ムスリムたち、そして預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）自身もまた暴力にさらされていた。マッカの有力者であった多神教徒たちはイスラームの発展を妨げるために、ムスリムに対し社会的・経済的制裁、弾圧、根拠のない拘束、強制的な移住、さらには鎖で縛りつけたり焼けた砂の上に寝かせ石を投げつけるといったような拷問、そして殺人までも行っていた。ハッバーブ・ビン・アラトという教友は、多神教徒がムスリムに暴力を振っていたことをはっきりと書き残している。[413]

多神教徒たちのムスリムへの暴力はマッカ時代の最後の日々まで続いた。実際、聖遷の前にダール・アル＝ナドワに集合した多神教徒たちが預言者の扱いをめぐって論議した三つの方法、すなわち預言者を拘束すること、追放すること、殺害することは、いずれも暴力に訴えるものであった。マディーナ時代にもマッカの人々は、機会あるごとに捕えたムスリムたちに暴力を振った。事実、聖遷の四年後、ザイド・ビン・ダスィンナとフバイブ・ビン・アディーを十字架にかけ拷問の末殺害している。

マッカの人々は暴力によってイスラームが広まっていくことを阻止することはできなかった。それどころか暴力を受けながらもムスリムたちは勢力を拡大していったのである。

預言者は多神教徒たちと同じような手段に訴えることはなかった。ムスリムたちが拷問を受け、預言者のもとを訪れて来たときには、耐え忍ぶように伝えた。預言者の真の目的は暴力を否定するだけではなく、暴力をなくすことにあったからである。クルアーンは「かれらのための、支配者ではない」[414]、「かれらは裁定を望んだが、すべての頑固な反逆者は望みを断たれてしまった」[415]と述べている。

暴力は、家庭内の暴力と社会的暴力の二つに分けることができる。家庭内の暴力について語る際に最初に思い浮かぶのは、一家の長が家族の他のメンバーに対し、あるいは年上の者が年下の者に対し振う暴力である。このような行いは家庭の安らぎを壊し、愛情や敬意を失わせると同時に、そういった環境で育つ子供たちの将来にも悪影響を及ぼし、彼らの人格の形成に否定的に作用することは明らかである。なぜなら、平気で暴力を用いる家庭で育った子供たちは、自然と暴力を振うようになり、長じて家庭を持ったときには自らが育った家庭と同じように子供たちに暴力を振う傾向があるからである。それを防ぐには、暴力や抑圧的態度ではなく、相互の愛情や敬意に満ちた家庭をつくる必要がある。しばしば個人や社会において争いを引き起こす原因となる暴力が、問題解決の手段として用いられたときには、簡単な問題ですら悲劇へと一変してしまうのである。

預言者は、家庭内の暴力であれ社会的暴力であれ、それを未然に防ぐため必要な予防策を講じた。預言者の家庭には何よりも愛情や敬意が満ちあふれていた。そして家族の間に起きた問題は、暴力に訴えることなく解決する方法が選ばれた。実際、預言者は妻たちにも、召使たちにも、そこで育つ子供たちにも暴力を振ったことは一度もなかった。アーイシャは、預言者が召使や妻たちを殴ったことがなく、他のどのような生き物にも手を出したことがないと伝えている。[416]また、妻に暴力を振う人たちに対しては、「なんとひどく殴りながら、夜になったら一緒に寝ているのか」[418]と非難した。[417]女性を殴ってはいけないこと、特に顔を殴っては絶対にいけないと誡めていた。預言者と妻たちとの間に

問題が生じ、彼らの近くにいたアブー・バクルやウマルが預言者と結婚している自分の娘たちを殴ろうとした際、預言者は暴力について次のように語っている。「アッラーは私を、暴力を振う人としては遣わされなかった。そうではなく、教える人、やさしくする人として遣わされたのだ」[419]

預言者は家庭の中だけではなく、社会においても暴力に訴えてはいけないと警告していた。次のような預言者の言葉がある。「イスラーム教徒を殴ってはいけない」[420]この言葉によって預言者は人間関係から生じた問題を、暴力や怒りや憎しみによってではなく、わかり合い、理解し合いながら解決していくことを勧め、社会の安定を破壊する行動を未然に防いだのである。人を傷つけたり、殺したりする武器の使用を防ぎ、怒りを武器によって発散させることがないよう警告した。そのような行動に出る人々に対して、預言者は「私たちに対し武器を構える者は私たちの仲間ではない」[421]と語っている。

預言者は、力で社会を変えようとする改革者ではなかった。「他人の権利を認めない、強制や暴力によって相手を変えようとする」という意味を持つ「ジャッバール」という特質が、自分には当てはまらないと自ら語り、また教友たちも預言者についてそのように述べている。預言者は様々なところで、「アッラーは私を、気前のよいしもべとされた。暴力的で残虐な人間とはされなかった」[422]と語っている。また様々な言い方で、そうした行為を非難している。教友たちの見解もその点で一致している。

フィジャールの戦いでクライシュ族の司令官の一人であり、のちに七十歳のとき、マッカ征服の際にムスリムとなり、マディーナに定住したマフラマ・ビン・ナウファルは、ある日、預言者に衣服が届けら、預言者がそれを人々に分け与えていることを耳にし、幼い息子ミスワルを連れ預言者の家の前に行った。そして子供に、預言者を呼ぶように命じた。しかし子供はためらっていた。そこで彼は息子に、預言者について次のように言った。「息子よ、彼は暴力を振うような人ではない」そして自ら預言者に声をかけると、それに応えて預言者はマフラマのために分けておいた衣服を彼に与えたのであった。[423]

預言者は、ムスリムに対する攻撃や侵略が企てられると、事前にその情報をつかみ、できる限り犠牲者を出すことなくそれを阻止した。あるとき預言者は、ハーリド・ビン・スフヤーン・アル＝フゼリーがマディーナへ侵攻すべく兵を集めていることを知り、アブドゥッラー・ビン・ウナイスという教友に、ハーリドを殺害するように命じた。アブドゥッラーはウラナ渓谷でハーリドと遭遇した。ハーリドは自らを預言者と戦うことを望んでいるフザーア族の人間であると紹介したが、夜半、兵士たちと離れたところを殺害された。そしてマディーナに戻ったアブドゥッラーはその一部始終を預言者に語った。この出来事は聖戦の四年後、ウフドの戦いの後で起こったことであり、またそれは多神教徒との関係が最も悪かったときのことであった。両者の間ではいつ戦争が起きても不思議ではなかった。ハーリドが戦いの準備を終え、ムスリムたちへの攻撃を始めていたとすれば、双方ともより多くの犠牲者を出していたであろう。

預言者は、たまたまその場にいた人が被害者とならないように努め、それでもそのような出来事が起きたときには深く悲しみ、被害者の家族には賠償金などを支払っていた。

預言者はどんなに激しく敵対していた人間であろうと捕虜を拷問にかけようとしたことはなく、また拷問にかけようとの提案がなされてもそれをきっぱりと拒否した。バドルの戦いで捕虜となった人々の中にクライシュ族の演説家のスハイル・ビン・アムルがいた。スハイルは足を弓で射られ負傷し、逃げようとしたところを捕えられた。ウマルは、「アッラーの使徒よ、彼の前歯を抜き二度とあなたに対して悪口を言えないようにしましょう」と言った。しかし、預言者はそれを認めなかった。「私には歯を抜くような拷問はできない。アッラーも、私が預言者であろうと、同じ罰を私に与えられるだろう」と答え、そして続けた。「スハイルはあなたが好むような態度を取るだろう」スハイル・ビン・アムルはマッカ征服のときムスリムになっている。預言者の死後、イスラームからの改宗の動きが出てきたとき、マッカの人々はイスラームから離れることはなかったが、市街では騒動が起きた。マッカの知事アッタープ・ビン・アシドですら、恐れを感じ身を隠した。そのときスハイル・ビン・アムルが演説を行い人々を落ち着かせたのである。彼

は次のように語った。「私は知っている。このイスラームという宗教は、太陽が昇り沈む限り不滅なのだ。あなた方の中から現れた一人の人間アブー・スフィヤーン・ビン・ハルブがあなた方を惑わしてしまわないように。私が知っているこのことを、彼も知っている。しかし、ハーシム家への嫉妬が彼の心を閉ざしてしまったのだ。あなた方の長に従いなさい。ザカートを彼に支払いなさい」

スハイルのこの言葉が耳に入ったとき、ウマルは預言者が彼について語っていたことを思い出し、「私は証言する、あなたはアッラーの使徒なのだ」と言わずにはおられなかった。預言者のスハイルに対するこのような行為、すなわち拷問を許さず捕虜に対してもよく振舞ったことは、敵をもイスラームに導き、いつか時が来れば彼も良いことをするようになる、という預言者が敵に対し一貫して取った姿勢の好例である。

預言者は、自身への信頼を悪用したり、裏切りや背信行為を働き、ムスリムの生命や財産を奪ったりする人間に対し、相応の罰を与えることに躊躇しなかった。ウライナ族の人たちに与えた罰はそのよい例である。その出来事は次のようなものであった。貧しさゆえに介護を受けることができずやせ細り、病気でもあった八人のウライナ族の人々がマディーナの預言者のもとを訪れ、イスラームを受け入れたことを告げた。彼らにはマディーナの環境が合わず病は次第に進行していった。自分たちは動物の乳を飲みなれている、ついてはそれを分けてくれないかと預言者に頼んできた。預言者は彼らをマディーナ郊外の解放奴隷のヤサールが飼っているラクダの群れのもとに送り届けた。そこで彼らはしばらく滞在し乳によって栄養をつけ、病気も快復した。だが彼らは恩知らずにも、ある朝ラクダの一群を奪って逃げようとした。ヤサールは人々に呼びかけ、彼らの逃亡を阻止しようとした。だがウライナ族の八人は逆に彼を捕え、手足を切断し目や舌に針を突き刺すという残虐な仕打ちを加えた上で殺害したのである。このことを知った預言者はクルズ・ビン・ジャービル率いる二十人の騎兵を派遣し、その八人を捕えマディーナへと連行させた。預言者は彼らの行ったことへの報復として彼らを死刑にしたのであった。[○424]

三　有害な習慣、そして道徳上の諸問題

有害な習慣の中から、まず飲酒の問題を取り上げてみたい。アルコールを飲むことは個人的にも社会的にも問題がある。酒を飲む人間は自分だけではなく周囲にも悪影響を与える。先にも触れたようにイスラームの教えの根本的な目的は信仰、理性、自我、次世代、そして財産を守ることにある。飲酒はその目的に反するものである。まず何よりも、イスラームの教えが重要なものと見なし、守ろうとしている理性を損なうものである。酒に溺れてしまった人々は理性を働かすことができず、物事を健全に考え判断を下す能力もない人間となってしまう。さらに酒は自我にも害を及ぼす。飲酒は人の精神構造を破壊し、羞恥心が失われる。飲酒の習慣が原因となった不貞をめぐる争いはしばしば見られるものである。また飲酒は次世代に害を及ぼす。アルコールを摂取する親は子供たちに肉体的・精神的な害を与えていることは多くの識者が指摘するところである。飲酒は家庭の崩壊ももたらす。アルコールを習慣的に飲むと、人は非協力的な、好戦的で攻撃的な人間になりがちで、悪事や犯罪を引き起こしやすく、ことに家族に暴力を振うようになる。また飲酒の習慣は様々な病気にかかるリスクを高める。見る力、話す力、そして症状が進むと聞く力も弱める。残念なことであるが、近代の評論家が指摘しているように、「アルコール中毒の問題は、ストレスの多い現代社会にあって克服すべき大きな問題の一つとなって」いるのである。[425]

飲酒の弊害について要約してきたが、次に預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）がどのようにして飲酒を禁じるようになったか述べてみたい。諸文献には教友たちに苦痛を与えた、飲酒を原因とした多くの出来事が言及されている。たとえば飲酒がまだ禁じられる前、酒を飲んだハムザが酩酊状態となり、アリーのラクダ二頭を屠ってしまった。アリーは預言者にそのことを訴え、預言者はハムザのもとに行き、彼を叱っている。[426] また、飲酒が禁止される以前、アブドゥルラフマーン・ビン・アウフはアンサールの家で酒を飲んで人々の前に立って夜の礼拝を行ったとき、クルアーンの言葉を誤って唱えてしまった。そのとき、「信仰する者よ、あなたがたが酔った時は、自分の言うことが理解出来るよ

うになるまで、礼拝に近付いてはならない」[427]という啓示が下されたのである。[428]
イスラームが誕生した当時、飲酒の習慣はアラブ人の間で広く見られるものであった。そこでアッラーはイスラーム教徒たちを徐々に禁酒に慣らしていかれたのである。まず、飲酒と賭博は両方とも大きな罪であること、人間にとってある程度効用はあるものの、罪のほうが大きいと教えられた。[429]次の段階では、酔った状態で礼拝を行うことが禁じられた。[430]そして最終的に酩酊状態をもたらす飲酒を禁止されたのである。[431]ウマルは飲酒が禁止されることを強く望んでいた。実際彼は、「アッラーよ、酒を飲むことについて明白で絶対的な啓示を与えてください」と祈願していた。そのとき次のような一節が啓示されている。「かれらは酒と、賭矢についてあなたに問うであろう。言ってやるがいい。『それらは大きな罪であるが、人間のために（多少の）益もある。だがその罪は、益よりも大である。』」[432]そこでウマルが呼ばれ、彼に対し啓示された一節が読み上げられた。ウマルは再び、「アッラーよ、酒を飲むことについて明白で絶対的な啓示を与えてください」と祈願した。それに対し次のような言葉が啓示された。「信仰する者よ、あなたがたが酔った時は、自分の言うことが理解出来るようになるまで、礼拝に近付いてはならない」[433]
礼拝のときに、「酔っている者は礼拝に近づいてはいけない」と宣告された。ウマルは再度ドゥアー（祈り）を行うと、最終的に飲酒を禁じる次の一節が啓示されたのである。「あなたがた信仰する者よ、誠に酒と賭矢、偶像と占い矢は、忌み嫌われる悪魔の業である。これを避けなさい。恐らくあなたがたは成功するであろう。悪魔の望むところは、酒と賭矢によってあなたがたの間に、敵意と憎悪を起こさせ、あなたがたがアッラーを念じ礼拝を捧げるのを妨げようとすることである。それでもあなたがたは慎まないのか」[434]この啓示を耳にしたウマルはついに酒を断つこととなった。[435]
飲酒の禁止を含むこれらの言葉が下されたことが周囲に伝えられた。アナス・ビン・マーリクは、アブー・タルハーの家で酒を飲んでいるときに飲酒が禁じられたという知らせを耳にし、そのときアブー・タルハーが即座にグラスの中の酒を捨てたと伝えている。マディーナの住民は家に備蓄していた酒を道路に流し、それは通りを洪水にしたほどであった。[436]禁酒の命令はヒジュラ暦三年、ウフドの戦いの直後に下されている。

禁酒令以降の預言者の行動については、伝えられている言葉や知識の光に照らし次のように要約することができる。預言者は酒を治療として使ってはいけないと伝えている。[437] 飲酒が禁止されたことを、イスラームが伝わっているすべての地域に書簡を送り伝えた。[438] その書簡には、酒にとどまらず酩酊状態をもたらすあらゆる物質を禁じると記されていた。[439] つまり、禁酒令の基準は、それが酩酊状態をもたらすものであることを明らかにした。酩酊状態をもたらすすべてのものをハムラと称した。[440] 量が多い場合に酩酊状態をもたらす物質であれば、もしそれが少量であったとしてもやはりハラーム（禁止されていること）であると伝えた。[441] 酒が多くの悪行の源となっていることを知らせた。[442] ムアズ・ビン・ジャバルに与えた十項目の勧めの中にも、「決して酒を飲んではいけない。それはすべての悪事の始まりである」[443]という一文が含まれている。酒に酔った者、酔わせた者、それを売った者、運んだ者、運ばせた者、その売り上げから利益を得た者、それを勧めた者は、強い非難を受けるにふさわしいとしている。[444] 預言者は日頃飲み物として、水、蜜を溶かした飲み物、動物の乳、果汁などを飲んでいた。[445]

飲酒が禁じられたのち酒を飲んでいた一部の人々に、預言者がどのように対処したかについても触れてみたい。ハイバルの征服ののち酒の瓶が割られ酒が流されたとき、冗談を好む教友の一人アブドゥッラー・ビン・ハンマールは我慢しきれずに酒を飲んでしまった。そもそもこの人物は、酒を目にしたときには飲まずにはいられない性分だったと伝えられている。人々は彼をすぐに預言者のもとへ連れて行った。預言者は彼のこの行動をよしとせず、その身体を靴で軽く叩いた。周囲にいた人々もそれに習った。預言者はそれ以前にも彼のことを何度も叱っていたとされている。そのときウマルは、「アッラーよ、彼に呪いを。もう何度もこんなことを繰り返しているのです」と言ったが、預言者は「ウマルよ、そのようなことを言ってはならない。彼はアッラーとその使徒を愛する人間なのだ」と語った。[446]『真正集』を編纂したハディース学者ブハーリーは、酒を飲む人に対し呪いをかけることは適切ではないこと、その人が教えを放棄したと見なすことはできない、すなわち、そのような行為を行っても人は教えを捨てたことにはならない、ということに多くの頁を割いて語っている。冗談を好むアブドゥッラーは、預言者を楽しませる人でもあった。

同様に、ヌアイマン・ビン・アムルもときどき酒を飲んでいた。ヌアイマンは預言者のもとへ連れていかれた。預言者は彼を靴で叩き、教友たちにも靴で叩くように命じた。そのようなことが何度も繰り返されたので、教友の一人が「アッラーの呪いがありますように」と言ったところ、預言者は「そんなことを言ってはならない。ヌアイマンはアッラーとその使徒を愛しているのだ」と答えている。[447]

また別の酔っ払った人が預言者のもとに連れて来られた。人々は手や靴や服で彼を叩いた。その中の一人が「アッラーが彼を辱めるように」と言うと、預言者は「あなたの兄弟に対して、シャイターンの手先となってはいけない」と彼をたしなめている。[448]

預言者のこうした態度は、飲酒を行った者に対し寛容であった、と受け取るべきではない。預言者は飲酒を大目に見たのではなく、逆に自ら罰を与えていたのである。以上の逸話は、預言者の時代でさえ禁止事項に従わない人々が存在していたこと、しかしそのような人々が教えを放棄したとは見なされず、社会から追放されることもなかったのである。

飲酒が禁じられた預言者の時代には、現在のようにアルコールの害を完全に証明することは不可能であった。しかし偉大なる創造主は、アルコールが人間の体にもたらす害をご存知であり、それゆえ飲酒を禁じられたのである。イッゼットベゴウィッチの言葉にあるように、「アルコールを禁じたとき、イスラームは宗教としてではなく、科学、文化として働いた」のである。[449] その後行われた数多くの科学的な実験は、イスラームのアルコールの禁止が誤ったものではなく、逆に正しかったことを証明している。預言者は一部の例外を除き、当時の頑固で保守的な人々に飲酒の禁止を浸透させることに成功した。それによって、のちのイスラーム世界の多くが飲酒の害から守られたのである。そうした成果は、強制や教育的な活動によって得ることはきわめて困難である。アメリカの大学教授ジュリウス・ヒルシュは、預言者が果たした社会的な活動を次のような言葉で評価している。「預言者は、クルアーンの啓示を介して飲酒を禁じ、何世紀にもわたって人類社会を飲酒の害から守ってきた。二十世紀の発展したアメリカは、様々な啓蒙活動や

科学的な警告にもかかわらず、このような成功を得ることができなかったのである」[450]

イスラームが誕生した当時、アラブ人の間では賭博や占い矢が広く行われていた。飲酒や賭博はマッカで一般的に行われていたが、マディーナでも同様であった。預言者がマディーナにヒジュラを行ったとき、マディーナの人々は酒を飲み賭博に興じていたのである。[451]

賭博や占い矢はクルアーンやスンナでハラーム（禁止されていること）とされている。クルアーンでは飲酒を禁じた節で賭博も禁じている。[452] また他の節でも、禁じられたものの一つとして賭博に言及している。[453] 預言者は飲酒と共に賭博の禁止についても多くの言葉を費やして説明している。[454] 賭博によって人は、苦労することなく容易に、そして不正に他人の財産を手に入れることができる。クルアーンやハディースで賭博という意味で用いられている言葉は、「容易」という語と同じ語源である。それは賭博によって他者の財産を容易に手にすることができることに由来する。当時、クルアーンやハディースで言及されている賭博は肉を賭けて行われ、そのため賭博によって得られた肉もハラームとされた。

賭博によって損失を出した人たちは、損失を取り戻そうと幾度となく賭博に挑み、ついには様々な個人的、社会的な問題を生じさせることは周知のとおりである。

占いに矢を用いることは、アッラーの人間には知りえない未知なる世界を知る力を中傷するものであり、矢という偶像に神性を持たせることに等しい。さらに、クルアーンやスンナでは、人間にとって理性を働かせて物事を考えることが根本であり、父親のいない子供の出自や、どの土地から水が湧き出るか、旅が順調なものになるかどうか、取引で利益が上がるかどうかといった事柄を占いによって知ることは良くないこととされている。預言者ムハンマドは、過去の預言者たちの中に占いを利用していた者がいたという見方は正しくないと語っている。預言者イブラーヒームと息子のイスマーイールが手に占いの矢を持っている絵を見たとき、それを破棄するよう求め、彼らは決して占いをしようとしなかったと明言した。[455]

預言者はその美徳によって人々の模範となり、生起した道徳的な諸問題は解決しそれらを未然に防ぐ努力も怠らなかった。イスラームの目指す目的の一つに次世代の保護や健全な家族の育成がある。売春行為はそのような次世代や家族の健全な育成を阻害する要因の一つである。それは道徳を崩壊させ、性病の増加や売買春にまつわる犯罪、女性の人身売買といった問題を引き起こし、お金を稼ぐために女性を利用し利益を得ようとする人々を出現させる。体を売ってお金を稼ぐことは人の道にはずれる行為であると共に、母としての本性にも反する。イスラーム以前の時代には女奴隷たちが売春を強制させられることが多々あった。一方奴隷ではない女性たちの間には姦通が見られた。男性が姦通を行うことは恥とはされず、逆に誇らしいものとされた。[456] クルアーンとハディース[457]では、そのような行為やそれらにつながるような醜い行いが禁じられ、罰が定められている。預言者は、売春によって利益を得ることを最も悪い行いと見なし禁じた。[459] そして宣誓を受ける際には、そのような行為を行わないことを条件とした。[460] また売春行為をなくすため、教育を通して啓蒙活動を行ったり、結婚をしやすくしたり、家族の絆を強めるなどいくつかの手だてを取った。それでも売買春にかかわる人間は後を絶たず、罪を犯した人には罰を与えたのである。

窃盗は人間の歴史を通し、社会の安寧秩序を乱す、恥ずべき罪と見なされてきた。預言者は窃盗の防止に力を注いだ。道徳や法規をかえりみず、不正に利益を得る窃盗行為は、イスラームが重きを置く財産の保障を侵害し、利益はイスラームの教えに適った方法で得るべきであるという考え方に反するものである。イスラーム以前の時代、窃盗はあまねく見られた行為であった。一般的にそれは罪であり、恥ずべき行為であると認識されていた。しかし強力な中央政府が存在していなかったため、規律を持って窃盗を取り締まり罰していたとは言いがたい。またベドウィンは同じ部族の人々や友好関係にある部族の人々、あるいは神殿や公共のものを盗むことは罪と見なしていたが、協定を結んでいない部族や、他から庇護を受けていない部族の財産を暴力的に奪ったものは戦利品と見なし、そのような行為は勇敢さを示すものとされていた。[461] ここで私たちは、窃盗について法的な観点からその詳細を見ていくことはせず、社会的・道徳的観点からクルアーンとハディースで窃盗がどのように言及されているか簡単に触れてみたい。

クルアーンには窃盗に関する法的な規定が存在している[462]。また窃盗を働かないことが、宣誓を行う際に誓うべき項目の一つとして定められている[463]。預言者は、アカバで入信した人々に宣誓を行わせたとき、窃盗を働かないことも条件としている。さらに、そのとき結ばれた盟約でアッラーの他に何ものも配しないという条件に次いで、窃盗を働かないという項目が挙げられていることは注目に値する[464]。預言者の窃盗に関するハディースの中に、「盗みを働く限り、泥棒は真の信者ではない」[465]、また「盗みませんという約束（ビーア）をした」という言葉がある。これは、預言者がこの問題をしばしば信仰と関連づけていたこと、窃盗についてその罰ではなく、道徳的・宗教的次元において語っていたことを示している。

窃盗の罪が確定した者には罰が与えられた。ただしここで注意しなければならないのは、窃盗犯に罰を与えること自体が目的ではないということである。重要なのは人を教育すること、人を窃盗へと追い込む社会的・経済的不平等や道徳の崩壊をなくすことである。特に預言者は、罪が犯された経緯やその罰について注意深く勘案し、許すことを推奨した。訴える者がいない場合、もしくは社会に害を与えていない罪であれば見逃すこともあった。預言者のそうした対処方法は窃盗事件の減少をもたらした[466]。

人が自らのことだけを考え、自分と関係のある人々や物事を自らの利益のためだけに利用しようとする自己中心主義は、道徳的にそして人間の行為として重大な欠点と見なされる。自己中心主義は何事においても相互扶助や支え合い、共同作業を妨げるものである。それは人を貪欲にし、様々な悪しき感情を生み出す。すなわち、うぬぼれ、物惜しみ、恨みを抱くこと、分かち合いや支え合いの精神を台無しにする欲望、欲張りなどである。イスラームの諸文献では、そうした態度や感情は誤りであり悪いものであり、放棄すべきものであると繰り返し述べられている。

自己中心主義の対極に位置するのが利他主義、すなわち他者にとってよいことを考え、彼らの利益のために行動し、人々を喜ばせ、彼らの痛みを和らげ、他者のために自分の欲求を犠牲にすることである。他の美徳と同様、利他主義も人が天使のように振舞うことで獲得される徳である。したがって、そのような振舞いを模範にし、強い意志を身に

つけることができる教育などが必要となる。自分にとって自らの命や財産、名誉がどれほど大切なものであれ、他者のそれも同じように大切であると認識し、利益や見返りを求めることなく他者を助けることが純粋な利他主義の形である。

クルアーンには、人間の最大の弱点の一つである自己中心主義を克服し、他者のために振舞うことを賞賛し勧める言葉が存在する。クルアーンには次のような自己中心主義が例示されている。

「また、『アッラーがあなたがたに授けられたものを、施せ。』と言われると、不信心な者は信仰する者に言う。『アッラーが御望みなら、（御自分で）養われるという者を、どうしてわたしたちが養うことがありましょうか。あなたがたは、明らかに思い違いをしているだけです。』」[467]

「かれ（フィルアウン）は、（その民を）集め宣言して、言った。『わたしはあなたがたの主、至高者である。』そこでアッラーはかれを懲しめ、来世と現世の生活に懲罰を加えられた」[468]

さてカールーンは、ムーサーの民の一人であったが、かれらに対し横柄な態度をとるようになった。[469]

預言者は自己中心主義を非難している。たとえば預言者は、取引の際に自分のことだけを考えて行動することを禁じた。また、取引の際中に他の人がそこに介入し、取引を行っている人の邪魔をすることを厳しくとがめ、「あなた方のうち誰であれ、兄弟が取引を行っているところで取引を持ちかけてはいけない」と命じている。[470]

自己中心主義に深く関係するものの一つに財産がある。イスラームの考え方では、財産を持つことはその奴隷になってしまわない限り推奨されている。一方で、人が財産を所有することによって思い上がったり、自らの欲求や自己中心的な考え方のために財産を用いることはよくないこととされている。喜捨や巡礼といった崇拝行為は、自己中心的な考え方を克服し、他者のために尽くすことを促し、それを個人や社会に反映させることを助長するものである。

自己中心主義は、自分の考えや思いに執着するあまり、他の人のことについて考えが及ばないという形で現れることにも留意すべきである。自分が店を繁盛させた後でやって来た客を、「隣の店はまだ繁盛していない」として隣の店

に連れて行った商人の振舞いは、そのよい例である。利他主義とは自らを他者のためにないがしろにすることではない。人が自らに価値を置き、自らのことを考え、自らのために働くことは自然なことである。イスラームは他の道徳的基準においてそうであるように、ここでもまたいき過ぎないことに重きを置いている。クルアーンとスンナは、自分への過度な執着を正すように教えているのである。次の逸話は以前にも紹介したが、ある教友に与えた預言者の助言が適正であることの重要性を示しているので、再度取り上げたい。

サアド・ビン・マーリクは死の床で、財産のすべてをアッラーの道のために捧げることを遺言にしようとした。だが預言者はそれをよしとせず、サアドに「子供たちには何を残したのか」と尋ね、何も残していないことを知ると、財産の九割を子供たちに残すよう命じた。しかしサアドが、同様のことを何度も訴えたので、預言者はそれを三分の一にするように求め、それすらも過分であると告げたのであった。[471] これは、自己中心主義と利他主義との間で守るべき節度についての好例である。

預言者ムハンマドは、人間の権利のうち最も重要なものの一つであり、多くの場合尊厳という概念で表現される人の人格、品位、名誉を守ることをたいへん重く見、ことあるごとに人権の侵害の防止に努めた。別れの説教では、生命や財産と並び尊厳もまた侵すべからざる人間の権利であると強調している。この三つを列挙することにより、生きる権利、財産を保有する権利、そして人間としての尊厳が同等に保護されるべきものであることを示したのである。預言者は、同じ信徒であるイスラームの兄弟を軽視するだけでも十分に悪いことだと見なされると説いたのち、信徒の生命や財産を奪ったり、尊厳を侵すことは禁じられていることを明らかにしている。[472] 巡礼で果たすべき行事の順番を間違えた教友に対し、それは大した問題ではなく、他の信徒の陰口を叩く方が大きな罪であると告げている。[473]

また宗教と尊厳の保護について並べて述べている預言者の言葉もある。そこで宗教と人間としての尊厳を同時に言及していることは注目に値する。この表現から、人間の尊厳は宗教的価値の真の基礎であることが理解される。[474] それゆえ、宗教が人間の尊厳に基づく場合、神に帰依する心はさらに完全なものになる。[475]

預言者は人の悪口を言うこと、陰口をたたくこと、そして本人にはどうすることもできない肉体的な欠陥を口にすることを禁じた。なぜならそのような行為は、人の尊厳を傷つけ、社会の中に怒りや敵意を生み出し、愛情や敬意、平和を損なうからである。陰口はクルアーンで、死んだ兄弟の肉を食べるようなものであるとされている。[476] そのような比喩を用いて陰口が悪いものであると指摘しているのである。預言者は、その人のいないところで欠点を述べることを陰口、その人に本当はない欠点があたかもあると述べ立てることは中傷であるとし、[477]「対価として私にこの地球が与えられるとしても、本人が嫌がるにもかかわらずその真似をしたりするようなことを私は決して好まない」[478] と語っている。また人が秘密にしていることを探りまわらないように求め、[479] 確かな証拠がなく単に疑わしいというだけで人を非難することを禁じている。

預言者が目指した最も重要なものの一つが社会の安定を保つことであった。そのために、お互いに軽蔑したり侮蔑したりすること、陰口を叩くこと、人々の間の関係を壊そうと告げ口をしたり裏表のある振舞いをすること、嘘をつくこと、偽証すること、呪いをかけること、罵ること、中傷すること、親に反抗すること、自殺すること、死者を冒涜すること、妬むこと、恨みを抱くこと、不機嫌でいること、人の欠点を探ること、人を騙すこと、約束を反故にすること、恩着せがましい行動をとることなどを禁じた。預言者が禁じたこのような行いは明らかに個人や社会に害をもたらすものであった。

四　自然現象と自然災害

自然災害がもたらした結果が、社会問題を引き起こす原因となることがあるので、私たちはこの項目を預言者ムハンマドがいかに社会問題と取り組んだかについて論じているこの章で取り上げることが適切であると考えている。ここでは、予防措置を講じることによって防ぐことができる自然災害や、人間には対処できない現象に対して預言者が

どのような態度をとったかについて、いくつかの例を挙げてみたい。

預言者はタブーク遠征で、同地に到着した夕刻、人々に夜になると大きな嵐が来るであろうと告げ、教友たちに一人では歩きまわらないように、ラクダのひざを縛っておくようにと伝えた。夜になって実際に嵐が起き、預言者の忠告に従った人びとは害を被ることもなく無事であったが、それに従わなかったサーイダ族の一人の男は呼吸困難に落ち入り、他の一人は嵐で吹き飛ばされてしまった。呼吸困難に落ち入った男は治療され、吹き飛ばされた男はタイ族の人々によってマディーナへと運ばれた。[480] ここで大切なことは、預言者が嵐の起こることをどうして事前に察知することができたかということ、加えて自然災害に対し予防策をとり教友たちに警告を与えたということである。実際、警告に従った者には被害はなく、従わなかった者が害を被ったのである。宗教は自然災害についても警告を与えるよう命じている。なぜなら自然災害に遭遇したとき、人間はそうする以外に何もできないからである。

同様に預言者の伝染病の予防に関する助言もすばらしい効果を挙げている。預言者はそれについて次のように述べている。「ペストが流行っている場所に行ってはいけない。あなたがいるところでペストが流行っているときは、そこを離れてはいけない」[481] これはタブーク遠征の際、ダマスカスでペストが流行しているとの知らせがもたらされたときの預言者の言葉であると伝えられている。[482]

次に預言者の自然現象に対する態度について述べてみたい。月食や日食のような自然現象を、イスラーム以前の時代の人々は、幸運や不運といった意味に結びつけて説明していた。あるいは将来の重要な立場の人物や支配者の誕生を示唆するものと見なした。[483] だが預言者は、月食や日食についてイスラーム以前の時代からの予言に基づいた解釈は誤りであると指摘した。

預言者の時代においては、マッカ時代の後期に一度、マディーナ時代に二度、合計三回の日食が起き、月食は二回起きている。月食が起きたとき、ユダヤ教徒たちは一堂に会して火を起こし、石を鳴らし、月にまじないがかけられていると訴えた。他の多くのことと同じように、預言者は月食についても、それは事実にそぐわない迷信だとして正

した。人々の認識は誤りだとし、そうしたことは単に天体現象であると教えた。そして自らの知識を超えた出来事に直面しても、理性を用いることなくそれを解釈するのではなく、アッラーに庇護を求めることがより健全な道であることを示したのである。事実、預言者の息子イブラーヒームが亡くなった日に日食が起きた。人々はその日食がイブラーヒームの死によって起きたものだと解釈した。しかし預言者は、「誰かの死や誕生によって日食や月食が起きることはない。そのような現象を見たときには礼拝にいそしみ、アッラーに祈りなさい」[484]と命じている。そして日食が起きたときには、モスクで四ラカートの礼拝を行った。

人間の力を超越した現象である日食や月食が起きたとき、預言者が行ったこうした崇拝行為は、この世界を創造された崇高なるアッラーの力を讃える行為であると見なすべきである。[485]

預言者は多くのハディースで、かけがえのない命を守るためにしなければならない予防策についてしばしば言及している。たとえば、嵐の海に出てはいけないこと、寝ぼけて落ちることのないよう手すりのないテラスでは寝ないこと、[486]ネズミが燃えているランプのフィルターの油を引き出して火事を引き起こさないよう、寝る前には必ずランプを消すこと[487]などである。

五　迷信

迷信とは、確かな根拠がなく現実にはありえないことを信じこむことや、その実践を意味する。それはイスラームの教えには存在しないものであるが、宗教的な衣装をまとってより多く見られるものである。迷信は民族や宗教を問わず、様々な社会において見られる。歴史上、今日に至るまでユダヤ教徒やキリスト教徒の社会に見られるのと同様に、ムスリムの社会にも存在する。イスラーム以前の宗教の残滓がムスリム社会に引き継がれ、正しい知識が欠如していたことから、来世や未知の世界、幸運や不運について、あるいは死者に助けを求めるといった様々な迷信が生まれ実

践されてきた。[488]

迷信は今でも広まっている悪しきものの一つである。物事の真実が解明され科学的な知識も驚異的に増え、文化も発展し、その成果が生活の全般にいきわたっている今日では、もはや迷信はなくなってきていると考える人もいよう。だが、残念なことではあるが、占いをはじめとして、悪魔崇拝や呪術、何らかの目的のために布を張り巡らせたり、ろうそくを灯したり、鉛や蝋を流したり、誤った形で犠牲を捧げたり、様々な出来事を不幸のもとと見なしたりする人々が、現代においても国籍や文化の違いを超えて存在していることは明らかである。そういったものの中には近代的な道具や装置を用いる職業として成立しているものもある。迷信は、科学的知識が欠落していたり、宗教の原則を正しく学んでいないこと、知らないものに対する興味や関心を満たしたいという欲求、経済的・社会的問題など様々な要素によってもたらされる。経済的・社会的問題を解決する現実的な手段を持ち得ない人々が、一種の架空の力を借りて願いを達成しようとし、希望の源を求めようとすることは避けられないことである。

預言者ムハンマドの迷信に対する態度は他のことと同様、人々の模範であり続け、今日でもその価値と重要性を失っていない。そこで私たちはここで預言者の迷信への対応策を紹介してみたい。だがその際、今日見られる迷信を逐一記すことはしない。迷信についてはすでに多くの書物が著されており、[489] 私たちの目的は預言者が、迷信にどのように対処したかを明らかにすることにあるからである。

迷信には地域や文化により差異がある。当時アラブ人の間でよく知られていた迷信が、同時代の他の地域、あるいは今日の世界では見られないということはある。同様に、当時のアラビア半島以外の地域で、もしくは今日の世界で広く見られる迷信が、当時のアラブ社会に存在しなかったということもある。

まず明らかにしておかねばならないことは、人の運命を変えると主張し、アッラー以外の何ものかから救いを求めることを唆し、ことが起こった本来の原因や要因に働きかけることをしない迷信やその実践は、クルアーンやハディースで明確に拒否され、禁じられているということである。そして預言者も迷信と闘かっている。たとえば予言や予言

者の活動をよしとしなかった。様々な技術を用いて人の将来や未知の出来事を予言し、個人の秘密を暴くと信じられ、ほとんどすべての民族で迷信や伝統技として伝えられてきた占いは、当時広く行われ、アラブ社会もその例外ではなかった。イスラーム以前の時代のアラブ社会で一般的に見られた、鳥の名や啼き声、飛び方などに災いの兆しを見出したり、小石やヒヨコマメ、エンドウマメなどを用いて占ったりすることを、預言者は禁じていた。[490]

預言者は、水を満たしたグラスや太陽などを見て占ったり、その結果を韻を踏んだ言葉で飾ることや、子供の体格を見てその子の将来を占うことなど、様々な形で未知の事柄を知ることができると主張する予言者たちにすがることを禁じた。占い師を訪ね様々な答えを求める行動を禁じたのである。[491] ムアーウィヤ・ビン・ハカム・アッ＝スラミーという教友が預言者に、「私たちはイスラーム以前の時代、いくつもの迷信を信じ、予言者を訪ねてもいました」と話したとき、預言者ムハンマドは「占い師のもとへ行ってはいけない」と命じている。[492] この教友が「占い師は私たちに様々なことを話しました」と言ったときにも、占い師がそう思っているだけであり、そのような意見に従うべきではないと教えている。また人々が予言者について尋ねたときにも、「彼らは何者でもない」と答えている。[493] 予言者を頼りにすることと信仰のあり方にはつながりがあるとし、「そのようなことを行う者は、私に下された啓示を否定したことになり、その者の礼拝は四十日間受け入れられないであろう」と告げている。[494]

預言者はまた、イスラームには不吉といった認識はないこと、それを信じることは、アッラー以外のものを神と崇める誤った道へと人を導くものであると告げている。鳥のさえずりや飛び方を見て、それが不吉であると述べ立てず、興味深い出来事に遭遇すれば、それを十分に検討するよう勧めた。[495] また、まじないをかけたりお守りを携えたりすることも、唯一神信仰とは相容れないものであるとした。[496]

イスラーム以前のアラブ人は、太陽や月、さらには一部の天体や天使、ジン（精霊）やシャイターン（悪魔）といった霊的存在を崇拝していた。それに加えて星が雨を降らせるといったような迷信を信じていた。預言者はそれらは無知からくる信仰であるとした。[497] アラブ人たちは、太陽が天使であり、[498] シャイターンは偶像を住処としていると考えて

いた。[499] 流れ星もしくは隕石の落下があると、その地方で偉人が誕生する、あるいは誰か偉大な人物が死ぬ、大きな災害が起こると見なした。[500] 預言者はそのようなことは迷信であると人々に教えた。ここに迷信にまつわる預言者の見解を表す一つの出来事がある。ある晩、預言者が教友たちと座っていたとき、流れ星があり辺りが急に明るくなった。そこで、このようなときにはイスラーム以前にはどんな話していたのか周囲の人々に尋ねた。彼らは、「今晩偉人が生まれた、あるいは偉人が死んだ、と私たちは言っていました」と答えた。それに対し預言者は「流れ星は、人の死ゆえに起こることもなければ誕生ゆえに起こることもない」と明快に言いきったのである。[501]

七世紀頃、グルという名の伝説上の存在が信じられていた。[502] グルは田舎に住み、様々な形や色で人間の目に映り、人々を惑わせ滅亡させ、剣の最初の一突きで死に、次の一突きで復活する存在とされていた。預言者は「グルなどというようなものは存在しない」[503]と断言し、その種の空想による概念も迷信の一つであると明言した。一方で、人々がイスラーム以前の時代の迷信の名残の幻を見たときには、「ビスミッラー（神の名において）」と唱え、アザーンを読みあげるといったような、ムスリムたちの気持ちを強める助言も行った。

イスラーム誕生当時、偶像崇拝と並びジンを操ること、まじないをかけること、息を吹きかけること、占いの矢を射ること、星を見て占うことなどが広く行われていた。イスラームはそうした迷信と厳しく対峙した。[504] 預言者はまじないを大罪の一つと見なしていた。[505] またアッラーに何ものかを同等に配することに続けて、この罪は重罪であるとする預言者の言葉もある。[506] まじないを行う人の信仰はなくなり、[507] まじないを行ったことに対する罰も定められていた。[508]

ヒジュラ暦九年から一〇年にかけて預言者が集中的に行ったマディーナへの訪問団との会見は、イスラームを広めるという観点と同様に、迷信との戦いという観点からも重要なものであった。預言者は部族社会が以前から持っていた迷信やそれにまつわる行事を取り除くことに努力を傾けた。イスラーム以前の時代の人々は月食や日食といった自然現象を、ときに吉報を、ときに不幸をもたらすものと解釈し、また重要な人物や支配者の誕生や死を表すものと見なした。先に述べたように預言者は、そうした解釈が誤ったものであると教えたのである。

クルアーンやハディースにおいて、知識を学ぶこと、理性を働かすこと、思考を巡らせること、真実を探求することなどをこの上なく重要なものであるとしていることはよく知られている。預言者は生涯にわたる活動で、迷信や誤った信条によってではなく、正しい信仰や意志、不屈の精神や忍耐心、勤勉さや努力、さらに協議して行動に移すといった原則を尊重し、物事を進めていった。誤った信仰や迷信はイスラームへの信仰心や宗教的生活を無力化し、人は迷信を宗教上の義務であるかのように錯覚することによって、イスラームの教えを踏みにじり、真実に基づいた行動をとることや、理性を働かせることなどをしなくなってしまうのである。そして経済的な面からも、搾取される人や不当に利益を上げる人を生み出したりする。宗教が悪い意図を持つ人によって悪用される。迷信は、未知の出来事を知りたいという人の弱みに付け込み、道徳心を崩壊させ健全な魂を失わせる。このような根拠のない迷信などに対する信仰を防ぐためにも、まず何よりもイスラームの教えをその根源から、そしてそれを熟知する人から十分学び、そして教えていくこともまた必要なのである。したがって教育の機会と並び、教師や有識者、ジャーナリストなど知識や情報を伝える立場にいる人々の役割はきわめて重要である。もし迷信をはじめとする誤った考えの持ち主がそうした職務に就くならば、迷信がよりはびこることになるだけであろう。

注釈

＊注釈の中で使われている省略記号の意味は次の通りです。

tah.	: 検証	çev.	: 翻訳者
vd.	: 続く	a. mlf.	: 同上の著者
DİA.	: ディヤーナト・イスラーム百科事典	krş.	: 比較検証
İA.	: イスラーム百科事典	Cilt	: 巻
s.	: 頁	Sayı	: 紀要の号数
p.	: 頁	v. dğr.	: 共著
sad.	: 出版編集	sy.	: 紀要の号数
ts.	: 出版日時不詳	a.g.e.	: 同上の文献

1. İbn Sa'd, I, 258; Ayrıca bk. Taberî, II, 644.
2. Âl-i İmrân Sûresi 64.
3. İbn Sa'd, I, 259-260.
4. İbn Sa'd, I, 260-261.
5. İbn Sa'd, I, 261.
6. İbn Sa'd, I, 263; İbn Seyyidinnâs, II, 355.
7. İbn Sa'd, I, 263.
8. Hamidullah, Hz. Peygamber'in Altı Orijinal Mektubu, çev. Mehmet Yazgan, İstanbul 1990, s. 90.
9. İbn Sa'd, I, 262-263.
10. İbn Sa'd, I, 264-265.
11. Hamidullah, Hz. Peygamber'in Altı Orijinal Mektubu, s. 66.
12. İbn Hişâm, II, 606-608; İbn Sa'd, I, 258-291; Taberî, II, 644-657; İbn Seyyidinnâs, II, 344-357; İbn Hudeyde, el-Misbâhu'l-Mudî', Beyrut 1985, I-II, 143-428; (この作品にはムハンマドが派遣した48人の使者の人物像とその書簡について詳細な記述がある) Ahmet Zeki Safvet, Cemheretü Resâili'l-Arab,Kahire 1971, I, 31-88; Muhammed Hamidullah, el-Vesâiku's-Siyâsiyye, Beyrut 1987, 43-368.
13. Hamidullah, el-Vesâiku's-Siyâsiyye, s. 277-278.
14. İbn Kesir, el-Bidâye ve'n-Nihâye, Beyrut 1974, IV, 239; Hamidullah, el-Vesâik, 85-86.
15. İbn Hişam, II, 559.
16. İbn Sa'd, I, 316.
17. İbn Sa'd, II, 299; İbn Hişâm, II, 573-575; İbn Hanbel, I, 264-265; Taberî, III, 124-125; İbn Seyyidinnâs, II, 313-314.
18. Müslim, el-Câmiu's-Sahîh, tah. M. Fuad Abdülbâkî, I-V İstanbul ts. (1955 Kahire baskısından tıpkıbasım), I, 42.

19. İbnü'l-Esîr, Üsd, II, 31.
20. İbn Seyyidinnâs, II, 333-334.
21. İbn Seyyidinnâs, II, 335.
22. Halebî, III, 272-273; Asım Köksal, İslam Tarihi (Medine Devri), İstanbul 1980, X, 137.
23. İbn Sa'd, I, 324-325.
24. İbn Sa'd, I, 270
25. İbn Hişâm, II, 583; İbn Seyyidinnâs, II, 321-322; Mustafa Fayda, İslamiyetin Güney Arabistan'a Yayılışı, Ankara 1982, s. 59.
26. Tirmizî, V, 361.
27. İbn Sa'd, I, 345.
28. İbn Sa'd, I, 324; İbn Seyyidinnâs, II, 336-337.
29. İbn Hanbel, IV, 257.
30. İbn Kayyım, Zadülmead, Mısır 1970, III, 33; Köksal, IX, 327.
31. İbn Sa'd, I, 247-248.
32. İbn Sa'd, I, 286,348; Mustafa Fayda, İslamiyetin Güney Arabistan'a Yayılışı, s. 55-56.
33. İbn Sa'd, I, 338; Mustafa Fayda, aynı eser, s. 61 vd.
34. İbn Sa'd, I, 352; Abdülkerim Özaydın, "Bârık", DİA, V, 70.
35. Vâkıdî, III, 966-967.
36. Vâkıdî, III, 969-970.
37. İbn Sa'd, I, 359.
38. İbn Hanbel, IV, 232.
39. İbn Hanbel, IV, 232.
40. Vâkıdî, III, 979-980.
41. İbn Sa'd, I, 323.
42. Ahzâb Sûresi 46.
43. Necm Sûresi 56; Sa'd Sûresi 65,70; Fâtır Sûresi 23.
44. Sebe' Sûresi 28.
45. 例として . İbn Hişâm, II, 344. を参照のこと。
46. Al-i İmrân Sûresi 159.
47. Şuarâ Sûresi 3-4.
48. Furkân Sûresi 56-57.
49. Ahmet Önkal, Rasûlüllah'ın İslam'a Davet Metodu, Konya 1989; Mustafa Çağrıcı, "Davet" DİA, IX, 16-19; Şevki Saka, "Kur'an'a Göre İnanç Hürriyeti", Diyanet Dergisi, Ankara 1992, s. 127-137.
50. Kurtubî, el-Câmi' li-Ahkâmi'l-Kur'ân, Beyrut 1967, XIX, 62-66.

51. İbn Hanbel, IV, 231.
52. Müslim, I, 65.
53. Tirmizî, V, 402.
54. Hûd Sûresi 112; さらに参照 : Şûrâ Sûresi 15.
55. İbn Hanbel, II, 452.
56. İbn Hanbel, III, 447.
57. Mâlik b. Enes, el-Muvatta’, İstanbul 1981, s. 989-990.
58. Ebû Dâvud, II, 191.
59. İbn Sa’d, II, 141; Ayrıca bk. Belâzürî, I, 358.
60. Makrîzî, s. 303.
61. Asrî Çubukçu, “Ebû Cendel”, DİA, X, 118-119; Recep Kılıç, Peygamberliğin Gerekliliği ve Peygamberimizin Örnekliği,” Hz. Peygamber’in Hayatından Davranış Modelleri, Ankara 1998, s. 35-42.
62. İbn Hişâm, I, 612; Makrîzî, 72.
63. Vâkıdî, II, 740.
64. İbn Sa’d, I, 138; VIII, 37.
65. Bakara Sûresi 156.
66. Fâtiha Sûresi 2.
67. Belâzürî, I, 452.
68. İbn Mâce, II, 1101; Hâkim, III, 47-48; Halebî, III,43.
69. Arnaldez, Hz. Muhammed (Hadis ve Sözleri), çev. Burhanettin Semi, İstanbul 1982.
70. Buhârî, VII, 50.
71. Arnaldez, s. 32.
72. İbn Hanbel, IV, 378.
73. İbn Hişâm, II, 580.
74. Buhârî, I, 31.
75. İbn Hişâm, II, 541.
76. Vâkıdî, II, 866.
77. Buhârî, II, 48.
78. İbn Mâce, Sünen, İstanbul 1981, II, 950-951; Ebû Dâvud, Sünen, İstanbul 1981, III, 84.
79. İbn Hanbel, II, 349.
80. İbn Hanbel, III, 54.
81. İbn Hanbel, III, 135, 154.
82. Müslim, I, 99.
83. Nahl Sûresi 76.

84. Nûr Sûresi 48-51.
85. Nisâ Sûresi 135; Mâide Sûresi 8; En'âm Sûresi 152.
86. Şûrâ Sûresi 15.
87. İbn Sa'd, I, 157.
88. Taberî, II, 446-447; İbn Seyyidinnâs, I, 395.
89. Taberî, III, 93.
90. Vâkıdî, III, 940.
91. Buhârî, III, 169.
92. Zebîdî, VII, 360.
93. Zebîdî, VII, 374-376.
94. Şemseddi Sami, Kâmûs-u Türkî, İstanbul. 1317, II, 1333.
95. Buhârî, I, 15.
96. İbn Hanbel, VII, 116.
97. İbn Hanbel, IV, 204; V, 319.
98. İbn Hanbel, I, 5; II, 210.
99. İbn Hanbel, I, 248.
100. Buhârî, IV, 40.
101. Buhârî, VII, 102.
102. Bodley, Tanrı Elçisi Hz. Muhammed, terc. Semih Yazıcıoğlu, İstanbul ts. s. 377
103. Bodley, s. 326
104. Bodley, s. 377
105. İnfitâr Sûresi, 6.
106. Rahmân Sûresi 26, 78.
107. İnsân Sûresi, 7-9.
108. Bakara Sûresi 262-265.
109. Âl-i İmrân Sûresi 92.
110. Müslim, II, 1802.
111. Buhârî, I, 4. Müslim, II, 1803.
112. İbn Sa'd, II, 195.
113. Müslim, II, 1805-1806.
114. Nisâ Sûresi 6; Furkân Sûresi 67.
115. Âl-i İmrân Sûresi 180.
116. Nisâ Sûresi 36-37; Hadîd Sûresi 23-24.
117. Muhammed Sûresi 38.

118. Teğâbün Sûresi 16.

119. Leyl Sûresi 8-11.

120. Buhârî, III, 224.

121. İbn Hanbel, II, 320.

122. İbn Hanbel, II, 256, 340.

123. Buhârî, III, 231; VII, 37; Müslim, I,708-709.

124. Müslim, III, 1996.

125. Buhârî, I, 33; İbn Mâce, II, 1192.

126. İbn Mâce, I, 147.

127. Tirmizî, IV, 612.

128. 詳細については以下も参照のこと。Mustafa Çağrıcı, “Cimrilik”, DİA, VIII, 4-5; a. mlf., “Cömertlik”, DİA, VIII, 72-73; Cengiz Kallek, “İsraf”, DİA, XXIII, 178-180.

129. İbnül-Esîr, Üsd, II, 328; Köksal, IX, 363-364.

130. Vâkıdî, III, 937.

131. Ahzâb Sûresi 21.

132. この点に関するさらなる詳細ついては以下を参照のこと。Recep Kılıç, “Peygamberliğin gerekliliği ve Peygamberimizin Örnekliği”, Hz. Peygamber’in Hayatından Davranış Modelleri, Ankara 1998, s. 30-36.

133. İbn Sa’d, I, 135-136.

134. İbn Sa’d, I, 134-144.

135. John Davenport, Hz. Muhammed ve Kur’an-ı Kerim, çev. Ömer Rıza, İstanbul 1926, s. 59; イギリスの著作家ジョン・デーヴンポートはこの作品の中で、東方研究家のクルアーンやムハンマドに対する否定的な見解や非難を論破している。

136. İbn Mâce, I, 636.

137. İbn Mâce, I, 636.

138. İbn Sa’d, I, 136.

139. İbn Hanbel, VI, 47.

140. İbn Sa’d, VIII, 205; İbn Mâce, I, 639; Ebû Dâvud, II, 608-609; Dârimî, Sünen, İstanbul 1981, s. 543.

141. İbn Hanbel, IV, 17.

142. İbn Hanbel, V, 5; Ebû Dâvud, II, 606-607.

143. İbn Sa’d, VIII, 204.

144. İbn Sa’d, VIII, 204-205.

145. Tirmizî, IV, 369.

146. İbn Sa’d, VIII, 223, 226.

147. Ahzâb Sûresi 28-29.

148. Ahzâb Sûresi 6.

149. İbn Mâce, I, 415.

150. İbn Mâce, I, 636.

151. İbn Sa'd, VIII, 204; İbn Mâce, I, 638.

152. Vâkıdî, II, 613.

153. İbn Habîb, el-Muhabber, s. 50

154. İbn Mâce, I, 629.

155. Ahzâb sûresi 50.

156. Ahzâb Sûresi 50.

157. Ahzâb Sûresi 6.

158. Ahzâb Sûresi 37.

159. İbn Sa'd, VIII, 53-221; Hamidullah, İslam Peygamberi, II, 715-746; Eş Olarak Hz. Peygamber, Ankara 1997; Ziya Kazıcı, Hz. Muhammed'in Eşleri ve Aile Hayatı, İstanbul 1991; İbrahim Canan, "Aile Reisi ve Baba Olarak Hz. Peygamber", Hz. Peygamber ve Aile Hayatı, İstanbul 1989, s. 284-342.

160. İbn Habîb, Muhabber, s. 79; Belâzürî, I, 405; この項目に関する諸伝承についての議論は以下を参照のこと。 Âişe Abdurrahman, Benâtü'n-Nebî, Beyrut 1979, s. 63-70

161. İbn Seyyidinnâs, II, 238.

162. アブー・アル＝アスがマディーナに連れてこられイスラームへ入信したこと、そしてムハンマド（彼の上に平安あれ）が彼をザイナブと新たに婚姻の手続きを踏んで結婚させたのか、以前の婚姻に基づいて結婚させたのか、という点に関する異なる諸伝承については以下を参照のこと。İbn Hişâm, I, 657-659; İbn Sa'd, VIII, 32-33; Taberî, II, 470-472; Belâzürî, I, 398-400; İbnü'l-Esîr, Üsd, VII, 130-131.

163. İbnü'l-Esîr, Üsd, VII, 22

164. ザイナブの生涯については以下を参照のこと。İbn Hişâm, I, 651-658; İbn Sa'd, VIII, 31-36; Taberî, II, 469-472; Belâzürî, I, 397-400; İbnü'l-Esîr, Üsd, VII, 130-131; M. Nazif Şahinoğlu, "Zeyneb bint Muhammed", İA, XIII, 554-555.

165. İbn Sa'd, VIII, 36-37; İbnü'l-Esîr, Üsd, VII, 113-115; Neşet Çağatay, "Rukayye", İA, XIII, 765-766.

166. İbn Sa'd, VIII, 37-39; İbnü'l-Esîr, Üsd, VII, 384; Tevfik R. Topuzoğlu, "Ümmü Külsüm", İA, XIII, 107-108.

167. Buhârî, I, 67.

168. İbn Sa'd, VIII, 19, 20.

169. İbn Sa'd, VIII, 19-30; İbnü'l-Esîr, Üsd, VII, 220-226; M. Yaşar Kandemir, "Fâtıma", DİA, 219-223.

170. İbn Sa'd, I, 134-144; İbnü'l-Esîr, Üsd, I, 49-51; Asri Çubukçu, "İbrahim", DİA, XXI,

171. İbn Hazm, s. 16-17. イブン・ハズムのこの推定はほぼ正しい。しかし諸文献を参考にし、より慎重に見るなら、ザイナブは30歳、ルキーヤは22歳、ウンム・ギュルスムは22歳

から27歳、ファーティマも23歳から27歳で死亡したということもできる。

172. Fetih Sûresi 10.
173. Âl-i İmrân Sûresi 159.
174. Vâkıdî, II, 580; Tirmizî, IV, 214.
175. İbn Hişâm, I, 620.
176. Âl-i İmrân Sûresi 31-32; Nisâ Sûresi 59-61, 65.
177. Nisâ Sûresi 80.
178. Hâkim, Müstedrek, Haydarâbâd 1335-1342, III, 219-220.
179. İbn Hişâm, II, 500.
180. İbn Hişâm, II, 600.
181. Taberî, III, 122.
182. İbn Hişâm, II, 606-608; İbn Hadîde, I-II, 143-428; (この作品にはムハンマド（彼の上に平安あれ）が派遣した48人の使者の人物像とその書簡について詳細な記述がある。)
183. Cehşiyârî, Kitâbü'l-Vüzerâ' ve'l-Küttâb, tah. Mustafa es-Sakkâ' ve dğr. Kahire 1980, s. 12-14; İbn Hudeyde, el-Misbâhu'l-Mudî, s. 21-142; Mustafa A'zamî, Asr-ı Saadette Yazı ve Vahiy Katipleri, Bütün Yönleriyle Asr-ı Saadette İslam, I, 368-462.
184. Vâkıdî, II, 436-438; İbn Hişâm, II, 305-306; ムハンマド（彼の上に平安あれ）の時代の司法組織については以下を参照のこと。 Hamidullah, İslam Peygamberi, II, 970-994; Fahrettin Atar, "Asr-ı Saadette Adliye Teşkilatı", Bütün Yönleriyle Asr-ı Saadette İslam, III, s. 105 vd.
185. Makrîzî, s. 536.
186. Vâkıdî, II, 570.
187. Vâkıdî, I, 107.
188. ムハンマド（彼の上に平安あれ）の軍事的な側面に関する事柄については以下を参照のこと。Hamidullah, Hz. Peygamber'in Savaşları, s. 227-290; Mahmud Şît Hattâb, Komutan Peygamber, çev. Ahmet Ağırakça, İstanbul 1988; Kettânî, Hz. Peygamber'in Yönetimi (et-Terâtîbu'l-İdâriyye), çev. Ahmet Özel, I-III, İstanbul 1990; Hamidullah, İslam Peygamberi, II, 881-994.
189. Buhârî, VI, 190; İbn Mâce, II, 724.
190. Buhârî, II, 9.
191. Buhârî, III, 224.
192. İbn Mâce, II, 724.
193. İbn Mâce, II, 723.
194. Buhârî, III, 9.
195. İbn Hişâm, I, 496.
196. Vâkıdî, II,446, 453.
197. İbn Sa'd, 367.

198. İbn Sa’d, I, 142.

199. İbn Mâce, II, 740-741; Kettânî, II, 285.

200. İbn Hacer, el-İsâbe, II, 27.

201. İbn Hacer, el-İsâbe, II, 302-303.

202. İbn Mâce, II, 832.

203. Münâvî, Feyzülkadîr, III, 244-245.

204. İbn Hanbel, VI, 316.

205. Rûm Sûresi 39.

206. İbn Mâce, II, 728-729

207. Buhârî, III, 27.

208. Müslim, I, 99.

209. Tirmizî, III, 514-516.

210. Buhârî, III, 9.

211. Neseî, VII, 284; Ali Bardakoğlu, “Bey’”, DİA, VI, 13-19.

212. Ali Bardakoğlu, “İslam Hukukunda İşçi İşveren Münasebeti”, İslam’de Emek ve İşçi İşveren Münasebetleri, İstanbul 1986, s. 179; クルアーンとスンナにおける労働者と雇用者の関係、及びその定義については以下を参照のこと。 a.g.e., s. 177-188; Hüseyin Atay, İslam’da İşçi-İşveren İlişkileri, Ankara 1979.

213. İbn Mâce, II, 817.

214. Buhârî, III, 41.

215. Enfâl Sûresi 41.

216. ムハンマド（彼の上に平安あれ）が戦利品をどのように処理したかについての詳細は以下を参照のこと。Ebû Yûsuf, Kitâbü’l-Harâc, çev. Ali Özek, İstanbul 1973, s. 48 vd.; Mâverdî, el-Ahkâmü’s-Sultâniyye, çev. Ali Şafak, İstanbul 1976, s. 145-158; Mehmet Erkal, “Ganimet”, DİA, XIII, 351-354.

217. Mâverdî, s. 159-163; Mustafa Fayda, Hz. Ömer Zamanında Gayr-i Müslimler, İstanbul 1989, s. 109-164; Mehmet Erkal, “Cizye”, DİA, VIII, 42-45.

218. Câbirî, İslam’da Siyasal Akıl, çev. Vecdi Akyüz, İstanbul 1997, 188-189.

219. Ahmet Özel, “Gayri Müslim”, DİA, XIII, 420.

220. Beyhakî, IX, 205.

221. İbn Sa’d, I, 288.

222. Ebû Dâvud, III, 191.

223. Âl-i İmrân Sûresi 164.

224. İbn Hanbel, III, 328; İbn Mâce, I, 17 .

225. İbn Hanbel, V, 315.

226. İbn Hanbel, I, 247.

227. İbn Hanbel, II, 418.
228. İbn Hanbel, IV, 359.
229. Buhârî, I, 41.
230. Buhârî, I, 33; İbn Hanbel, IV, 395, 402, 414.
231. İbn Hanbel, I, 239, 283, 365.
232. İbn Hanbel, V, 447-448; Müslim, I, 381; Dârimî, s. 353-354.
233. İbn Hanbel, V, 182; Tirmizî, IV, 67-68.
234. Müslim, III, 2156; Dârimî, 62.
235. Buhârî, I, 30, 167.
236. Buhârî, I, 30.
237. İbn Hanbel, V, 410.
238. この項目に関する詳細と例については以下を参照のこと。: Ebû Gudde, Hz. Muhammed ve Öğretim Metodları, çev. Enbiya Yıldırım, İstanbul 1998.
239. Ahzâb Sûresi 4.
240. Ahzâb Sûresi 5.
241. Hamidullah, İslam Peygamberi, II, 728.
242. İbn Hanbel, III, 103.
243. Buhârî, II, 6; Zebîdî, III, 205.
244. A'râf Sûresi 138.
245. Vâkıdî, III, 890-891; İbn Hişâm, II, 442.
246. Taberî, II, 481.
247. Buhârî, II, 2-12; Zebîdî, III, 151-206.
248. Tirmizî, IV, 205; Nesâî, VII, 225-226
249. Buhârî, II,3, 11; Zebîdî, III, 151, 203.
250. İbn Sa'd, II, 233-234.
251. İbn Mâce, II, 1148.
252. Buhârî, VII, 12.
253. Buhârî, VII, 21.
254. 『預言者の医学』については以下を参照のこと。Buhârî, VII, 2-33 Ebû Dâvud, IV, 192-242; Tirmizî, IV, 381-413; İbn Mâce, II, 1137-1176; Mahmut Denizkuşları, Kur'an-ı Kerim ve Hadislerde Tıp, İstanbul 1990.
255. İbn Hişâm, IV, 207-212.
256. İbn Kuteybe, Uyûnu'l-Ahbâr, II, 231.
257. Hanbel, IV, 263, 320; Müslim, I, 594.
258. Buhârî, IV, 12; VIII, 76.

259. この件については以下を参照のこと。M. Yaşar Kandemir, “Cevâmiu’l-Kelim”, DİA, VII, 440.

260. ムハンマド（彼の上に平安あれ）の呼びかけと説教は以下の作品に見ることができる。: Câhız, el-Beyân, I, 302-304; II, 31-45; A. Zeki Safvet, Cemheretü Hutabi’l-Arab; Şevki Dayf, Târîhu’l-Edebi’l-Arabî, II,114-121; Ahmet Lütfi Kazancı, Peygamber Efedimizin Hitabeti, İstanbul 1980; Muhammed Halîl el-Hatîb, Hutabi’r-Rasûl, Kahire 1983; Talat Koçyiğit, İslâmî Davetin Mahiyeti ve Hz. Peygamber’in Hutbeleri, Ankara 1994; Hasan Ali Görgülü, “Hz. Peygamber’in hutbede izlediği metod ve Günümüzde hutbe uygulamaları”, Süleyman Demirel Üniversitesi İlahiyat Fakültesi Dergisi, sayı 3, İsparta 1997, s. 175-235; Hüseyin Elmalı, “Hitabet- Arap Edebiyatı”, DİA, XVIII, 158-159 Mustafa Baktır, “Hutbe”, DİA, XVIII, 425-428.

261. Sâffât Sûresi 36.

262. Yâsin Sûresi 69.

263. Şuarâ Sûresi 224-226.

264. Şuarâ Sûresi 227.

265. Şevki Dayf, Târîhu’l-Edebi’l-Arabî, I, 337.

266. Buhârî, VII, 107; İbn Mâce, II, 1236-1237.

267. Buhârî, VII, 107.

268. Müslim, II, 1768.

269. İbn Kuteybe, eş-Şi’r ve’ş-Şuarâ, s. 300.

270. İbn Hişâm, II, 9-43, 129-168, 254-273, 459-482.

271. Tirmizî, IV, 139.

272. İbn Kuteybe, eş-Şi’r ve’ş-Şuarâ, s. 80-82.

273. Şevki Dayf, Târîhu’l-Edebi’l-Arabî, II, 46-53, 83-88; M. Nihad Çetin, “Şiir”, İA, XI, 530-542.

274. Kalem Sûresi 1.

275. En’âm Sûresi 7.

276. Abese Sûresi 13.

277. Şevki Dayf, Târîhu’l-Edebi’l-Arabî, II, 129-132.

278. İbn Hanbel, VI, 420. 444; Buhârî, III, 66 vd.; ayrıca bk. Zebîdî, VII, 117-189.

279. İbn Hanbel, III, 184, 191.

280. İbn Hanbel, V, 415.

281. Münâvî, VI, 39.

282. Buhârî, VI, 122.

283. Buhârî, III, 66-74.

284. Buhârî, II, 220.

285. Vâkıdî, III, 973.

286. Makrîzî, s. 400.

287. İbn Hişâm, I, 490.

288. Ebû Dâvud, III, 469.

289. Kettani, II, 41-42; ムハンマド（彼の上に平安あれ）の環境保全の活動に関する詳細については以下の研究を参照のこと。: İbrahim Canan, İslam'da Çevre Sağlığı, İstanbul 1986 s. 89; Mehmet Bayraktar, İslam ve Ekoloji, Ankara 1997, s. 49-61; İbrahim Özdemir, Çevre ve Din, Ankara 1997 s. 163-168; 180-184; aynı yazar ve Münir Yükselmiş, Çevre Sorunları ve İslam, Ankara 1997.

290. Buhârî, I, 215.

291. Buhârî, VI, 120-121.

292. Buhârî, VII, 75; Tirmizî, IV, 318.

293. İbn Hanbel, VI, 467; Buhârî, VII, 74-75; İbnü'l-Esîr, Üsd, V, 22.

294. İbn Mâce, II, 1220.

295. İbn Hanbel, IV, 5; Ebû Dâvud, III, 219.

296. İbn Mâce, I, 612.

297. Diyarbekrî, Târîhu'l-Hamîs, Mısır 1302, I, 385.

298. Buhârî, II, 204.

299. Buhârî, II, 8.

300. Mâlik I, 447-448; Buhârî, IV, 21.

301. Buhârî, II, 82-83; Tirmizî, III, 305-306.

302. Vâkıdî, III, 991.

303. Buhârî, I, 173-174.

304. Vâkıdî, II, 453.

305. Vâkıdî, III, 979-980.

306. Nahl Sûresi 58-59.

307. Tirmizî, IV, 318 vd.

308. İbn Hanbel, IV, 151.

309. Dârimî, I, 3-4.

310. Makrîzî, s. 251.

311. Ebû Dâvud, V, 236.

312. Özgü Aras, "Ad koyma", DİA, I, 332-333.

313. Tirmizî, IV, 337.

314. İbn Hanbel, IV, 269.

315. Buhârî, III, 133-134; Müslim, II, 1243.

316. Müslim, II, 1243.

317. Beyza Bilgin, İslam ve Çocuk, Ankara 1997; Hayati Hökelekli, "Çocuk", DİA, VII, 355-358.

318. İbn Hişâm, I, 336-337.
319. İbnü'l-Esîr, Üsd, V, 182.
320. İbn Hanbel, I, 10; Buhârî, VI, 98-99.
321. Ebû Dâvud, IV, 18.
322. Buhârî, I, 160-161.
323. Buhârî, VII, 170.
324. Mehmet Aydın, "Gençlik ve Din", Gençlik ve Din, Ankara 1998, s. 219-258.
325. Ali İzzetbegoviç, s. 207.
326. İbn Hanbel, II, 185.
327. Tirmizî, IV, 372.
328. İbn Hişâm, II, 405-406.
329. Bakara Sûresi 83; En'am Sûresi 151; İsrâ Sûresi 23.
330. İsrâ Sûresi 23.
331. İsrâ Sûresi 24.
332. Buhârî, VII, 68-69; Müslim I, 89; Tirmizî, IV, 310.
333. Buhârî, VII, 71; Müslim I, 91; Tirmizî, IV, 312.
334. Tirmizî, IV, 313; Mustafa Çağrıcı, "Ana Baba-Ahlak", DİA, III, 101-104.
335. Buhârî, VI, 160; Müslim, I, 595, 603, 605-606.
336. İbn Hişâm, II, 411; Buhârî, IV, 67.
337. Ahzâb Sûresi 35.
338. İbn Mâce, I, 81.
339. İbn İshak, s. 128.
340. Müslim, II, 1090.
341. Nisâ Sûresi 19.
342. イスラームの女性観についての詳細は以下を参照のこと。:M. Tayyib Okiç, İslamiyette Kadın Öğretimi, Ankara ; Hayri Kırbaşoğlu, "Kadın konusunda Kur'an'a Yapılan Eleştiriler",İslâmî Araştırmalar, cilt 5, sy. 4 Ekim 1991, s. 271-283; Rıza Savaş, Hz. Muhammed Devrinde Kadın, İstanbul 1991; a. mlf., "İslam'a Göre Kadının Toplumdaki Yeri", İslam'ın Işığında Kadın, s. 95-112"Mehmet Aydın, "İslam'ın Işığında Kadın", İslam'ın Işığında Kadın, s. 1-39; Mehmet Hatiboğlu, "İslam'ın Kadına Bakışı", İslâmî Araştırmalar, cilt 5, sy. 4 Ekim 1991, s. 231-235; Salih Akdemir, Tarih Boyunca ve Kur'an-ı Kerim'de Kadın", İslâmî Araştırmalar, cilt 5, sy. 4 Ekim 1991, s. 260-270; Süleyman Ateş, "İslam'ın Kadına Getirdiği Haklar", İslâmî Araştırmalar, cilt 5, sy. 4 Ekim 1991, s. 320-327. 現代の著名な思想家アリ・イゼットベゴイッチは現代文明における女性観を次のように語っている。「現代社会は女性を賞賛し使用する対象としている。しかし評価や敬意に値する唯一のものであるその本質を女性から奪ったのである。時の経過と共にこの状況はより頻繁に目にするようになってきている。とりわけ様々な『ミス～』の選出、ファッションモデルや写真モデルといった女性特有の職業にこの傾向をはっきりと見ることができ

る。現代社会では特に母性が軽視されている。そして販売員、モデル、教師、秘書、掃除婦といった仕事が、母としての務めよりも優先されている。現代文明は母であることが奴隷であることに等しいと決めつけ、女性をそこから救うと約束している。どれほど多くの女性が家庭や子供から離れ（「救われて」と表現されているが)、様々な仕事に従事していることを声高に誇っていることか。一方で文化ははるか以前から女性を高め、象徴や神秘、神聖なものとし、最も素晴らしく影響力のある詩や音楽、絵画や彫像が女性に捧げられてきたのである。(Ali İzzetbegoviç, s. 211).

343. İ. Kafi Dönmez, “Yetim”, İA, XIII, 402.

344. Zebîdî, XI, 78-79.

345. Duhâ Sûresi 6.

346. Duhâ Sûresi 9.

347. Nisâ Sûresi 7.

348. Vâhidî, Esbâbü’n-Nüzûl, tah. Seyyid el-Cümeylî, Beyrut 1990, s. 120-121.

349. En’âm Sûresi 152.

350. Bakara Sûresi 220.

351. Süleyman Eteş, Yüce Kur’an’ın Çağdaş Tefsiri, İstanbul 1990, I, 379.

352. İbn Hişâm, I, 336.

353. Buhârî, III, 195.

354. İbn Mâce, II, 1213.

355. İbn Mâce, II, 817.

356. Vâkıdî, I, 281.

357. Buhârî, IV, 258.

358. Ebû Dâvud, III, 393; V, 310.

359. Buhârî, et-Târîhu’l-Kebîr, Haydarâbâd 1941, II, 78.

360 Mâlik, I, 251.

361. İbn Sa’d, III, 610.

362. İbn Hanbel, V, 250.

363. Buhârî, III, 195.

364. İbn Mâce, II, 1213.

365. İbn Mâce, II, 1213.

366. Neseî, VI, 55.

367. Tirmizî, III, 40.

368. Neseî, V, 91.

369. Tirmizî, IV, 320.

370. Neseî, V, 93.

371. Buhârî, V, 32.

372. İbn Hanbel, III, 303; İbnü'l-Esîr, Üsd, I, 307-308.
373. İbn Hacer, İsâbe, II, 280-281.
374. İbn Seyyidinnâs, II, 32.
375. Buhârî, V, 9 vd.; İbn Hanbel, I, 105; İbn Mâce, I, 56-57.
376. Vâkıdî, I, 65, 94; Buhârî, III, 206; Ali Toksarı, "Hârise b. Sürâka", DİA, XVI, 202-203.
377. Vâkıdî, I, 316.
378. İbn Sa'd, II, 37; VIII, 342.
379. Vâkıdî, I, 291-292.
380. Buhârî, VII, 76.
381. Vâkıdî, I, 316.
382. İbn Hişâm, II, 95.
383. İbn Hanbel, IV, 358-359.
384. Buhârî, VII, 178; İbn Mâce, II, 1379.
385. Buhârî, VII, 178.
386. İbn Hanbel, II, 425, 479.
387. İbn Hanbel, II, 276.
388. İbn Hanbel, V, 259.
389. İbn Hanbel, III, 254; Dârimî, s. 735.
390. İbn Hanbel, IV, 230.
391. İbn Mâce, II, 1380.
392. İbn Hanbel, II, 540.
393. İbn Hanbel, V, 36.
394. Osman Eskicioğlu, "Fakir", DİA, XII, 130.
395. Vâkıdî, III, 945; Buhârî, VII, 186.
396. Mâide Sûresi 2.
397. Ahmet Tabakoğlu, İslam ve Ekonomik Hayat, Ankara 1996, s. 34-42; Seyfettin Erşahin, "İslam'ın Sosyal Dayanışma İlkeleri ve Tarihimizdeki Bazı Uygulamaları", Fakirlik Problemi ve Çağdaş Çözüm Yolları, Ankara 1998, s. 83-107.
398. Abese Sûresi 1-10.
399. İbn Hanbel, V, 258-259.
400. İbn Hanbel, I, 217; 309.
401. İbnü'l-Esîr, Üsd, IV, 264.
402. Nûr Sûresi 61.
403. Vâkıdî, I, 264-265; İbn Hişâm, II, 90-91.
404. Buhârî, VIII, 21.

405. Buhârî, VI, 169.
406. İbn Hanbel, V, 169.
407. Beled Sûresi 13; Nisâ Sûresi 92; Mücâdele Sûresi 3; Mâide Sûresi 89.
408. Vâkıdî, III, 931-932.
409. Auguste Bebel, Hz. Muhammed ve Arap Kültürü, İstanbul 1997, s. 89.
410. Hamidullah, İslam Peygamberi, II, 746-750; Ahmet Özel, "Esir", DİA, XI, 382-389.
411. İbn Hişâm, I, 555-556.
412. Vâkıdî, II, 415; İbn Hanbel, III, 392-393; Buhârî, IV, 160.
413. Buhârî, IV, 238-239.
414. Ğâşiye Sûresi 23.
415. İbrâhîm Sûresi 15.
416. İbn Hanbel, VI, 229; Müslim, II, 1814; İbn Mâce, I, 638.
417. İbn Hanbel, IV, 17.
418. İbn Hanbel, V, 5; Ebû Dâvud, II, 606-607.
419. İbn Hanbel, III, 328.
420. İbn Hanbel, I, 404.
421. İbn Hanbel, II, 185.
422. Ebû Dâvud, IV, 143; İbn Mâce, II, 1086.
423. Buhârî, VII, 50.
424. Vâkıdî, II, 568-571; İbn Hişâm, II, 640-641; İbn Sa'd, II, 93; Buhârî, VIII, 19-20.
425. Ali İzzetbegoviç, s. 238.
426. Müslim, II, 1568-1570.
427. Nisâ Sûresi 43.
428. Ebû Dâvud, IV, 80.
429. Bakara Sûresi 219.
430. Nisâ Sûresi 43.
431. Mâide Sûresi 90-91.
432. Bakara Sûresi 219.
433. Nisâ Sûresi 43.
434. Mâide Sûresi 90-91.
435. Ebû Dâvud, IV, 79-80; Neseî, VIII, 286-287.
436. Buhârî, V, 189-190; Müslim, II, 1570 vd.
437. Müslim, II, 1073.
438. Müslim, II, 1576.

439. Buhârî, V, 245; Müslim, II,1585-1588; İbn Mâce, II, 1123-1124; Ebû Dâvud, IV, 86, 88-91; Neseî, VIII, 327.

440. Neseî, VIII, 296.

441. İbn Mâce, II, 1124-1125; Ebû Dâvud, IV, 87; Neseî, VIII, 300-301.

442. İbn Mâce, II, 1119.

443. İbn Hanbel, V, 238.

444. İbn Mâce, II, 1122.

445. Neseî, VIII, 335.

446. Vâkıdî, II, 665; Buhârî, VIII, 14; İbnü'l-Esîr, Üsd, III, 216.

447. İbnü'l-Esîr, Üsd, V, 352.

448. Buhârî, VIII, 14-15.

449. Ali İzzetbegoviç, s. 227.

450. Alpaslan Özyazıcı, Alkollü İçkiler, Sıgara ve Diğerleri, Ankara 1996, s.14-16.

451. İbn Hanbel, II, 351.

452. Mâide Sûresi 90-90.

453. Mâide Sûresi 3.

454. Ebû Dâvud, IV, 97; İbn Hanbel, I, 274.

455. Buhârî, IV, 111.

456. Cevad Ali, V, 133-134.

457. Furkân Sûresi 68; İsrâ Sûresi 32.

458. Wensick, II, 345-348.

459. Buhârî, III, 43; Müslim, II, 1199.

460. İbn Hişâm, I, 433; Taberî, III, 62.

461. Cevad Ali, V, 605.

462. Mâide Sûresi 38-39.

463. Mümtehine Sûresi 12.

464. Buhârî, I, 10.

465. Bk. Wensinck, v. dğr. el-Mu'cemü'l-Müfehres li-Elfâzi'l-Hadîsi'n-Nebevî, Leiden 1936-69, II, 455-457.

466. 窃盗に関する詳細とその法的側面については以下を参照のこと。Ali Bardakoğlu, "Hırsızlık", DİA, XVII, 384-396.

467. Yâsîn Sûresi 47.

468. Nâziât Sûresi 24.

469. Kasas Sûresi 76-79.

470. Buhârî, III, 24.

471. Tirmizî, IV, 305-306.
472. Müslim, III, 1986.
473. Ebû Dâvud, II, 517.
474. Buhârî, I, 19.
475. Hayati Hökelekli, “Irz”, DİA, XIX, 134.
476. Hucurât Sûresi 12.
477. Müslim, III, 2001; Tirmizî, IV, 329; Ebû Dâvud, V, 192.
478. Ebû Dâvud, V, 192-193.
479. Ebû Dâvud, V, 194, 199.
480. Vâkıdî, III, 106; İbn Hişâm, II, 520-521; İbn Hanbel, V, 424-425; Taberî, III, 105.
481. Mâlik, s. 895-897; Buhârî, VII, 20-22; Müslim, II, 1737-1742; Ebû Dâvud, III, 478.
482. İbn Hanbel, III, 416.
483. Müslim, I, 622; Neseî, III, 136, 141, 145; İbn Mâce, I, 401.
484. Buhârî, II, 24.
485. Buhârî, II, 23-31; Müslim, I, 618-630; Neseî, III, 124-154; İbn Mâce, I, 400-402; Mehmet Apaydın, s. 95-98.
486. Tirmizî, V, 141.
487. İbn Hanbel, V, 82; Buhârî, VII, 143.
488. Ali Murat Yel-Yusuf Şevki Yavuz, “Hurâfe”, DİA, XVIII, 381-384.
489. Bu konuda şu eserlere bakılabilir: Abdülkadir İnan, Hurafeler ve Menşeleri, Ankara 1962; Kemalettin Erdil, Yaşayan Hurafeler, Ankara 1999; Mustafa Uysal, İslam’a Sokulan Bid’at ve Hurafeler, I-II, İstanbul 1975; Martin Lings, Antik İnançlar Modern Hurafeler, çev. Enes Harman-Ufuk Uyan, İstanbul 1980; İsmail Lütfi Çakan, Hurafeler ve Batıl İnanışlar, İstanbul 1981; ; Ali Çelik, “Asr-ı Saadette Halk İnançları”, Bütün Yönleriyle Asr-ıSaadette İslam, V, İstanbul 1995, s. 327-443.
490. İlyas Çelebi, “Fal”, DİA, XII, 138-139.
491. Müslim, II, 1751.
492. Müslim, II, 1748.
493. Müslim, II, 1750.
494. İbn Hanbel, II, 429; IV, 68; V, 380; Ebû Dâvud, IV, 226; Müslim, II, 175; Tirmizî, I, 243; İbn Mâce, I, 209.
495. Buharî, VII, 17; Müslim, I, 382.
496. İbn Hanbel, I, 381; Ebû Dâvud, IV, 212-213.
497. Müslim, I, 644.
498. Âlûsî, II, 215 vd.
499. Âlûsî, II, 197.

500. Hamdi Yazır,VII, 4569; Ali Çelik, V, 334 vd.
501. Müslim, II, 1750-1751.
502. Âlûsî, II, 343 vd.
503. Müslim, II, 1744; Ebû Dâvud, IV, 233 .
504. Büyünün mahiyeti, çeşitleri ve çeşitli kültürlerdeki durumu hakkında özet bilgi için bk. Hikmet Tanyu, “Büyü”, DİA, VI, 501-506.
505. Buhârî, VII, 34; Nesâî, Sünen, İstanbul 1981, VII, 111.
506. Buhârî, VII, 29, 34.
507. Nesâî, , VII, 112.
508. İbn Hanbel, I, 190-191; Tirmizî, IV, 60.

聖ムハンマドの普遍的教え

Vol.2

二〇一二年四月三〇日　初版発行

著　者　イブラーヒム・サルチャム

デザイン　百瀬デザイン事務所

発行者　宗教法人
東京・トルコ・ディヤーナト・ジャーミイ　©2012
Tokyo Türk Diyanet Camii Vakfi

Baskı　Türkiye Diyanet Vakfi Yayın Matbaacılık Tic. İşt. - ANKARA

〒一五一―〇〇六五
東京都渋谷区大山町一―十九
電話（〇三）五七九〇―〇七六〇
ＦＡＸ（〇三）五七九〇―七八二二
http://tokyocamii.org
info@tokyocamii.org

ISBN978-4-9905876-1-1

時代を超えすべての人々に語りかける預言者の教え

寛容は預言者の活動の重要な原則である。この原則の礎は、「やさしくしなさい、難しくしてはいけない。吉報をもたらしなさい。怖がらせてはいけない」という言葉にある。預言者はイスラームの教えとはやさしさであることを明言している。そして、寛容とやさしさの教えであるイスラームを携えて自らが遣わされたと述べている。人々の「アッラーの位階において何が最も尊いことなのか」という質問に答えて、預言者はアッラーへの信仰に次いで寛容を挙げている。また寛容であることが天国へ行くための必要条件であるとも語っている。

預言者は寛容について、人間関係の中で一方の側にだけ求められるものではなく、双方において実践されるべきものであるとした。寛容が不正につながることを防ぎ、一人が常に寛容さを求め、もう片方がいつでも寛容さを示さなければいけないという事態が生じないように、そして社会のあらゆる人々の間で寛容がよく行われるために、「寛容の精神を持って振舞いなさい。そうすれば、あなたも寛容に振舞われるだろう」と述べている。

この本は東京ジャーミイ・トルコ文化センターからのプレゼントです。
Tokyo Camii'nin hediyesidir.